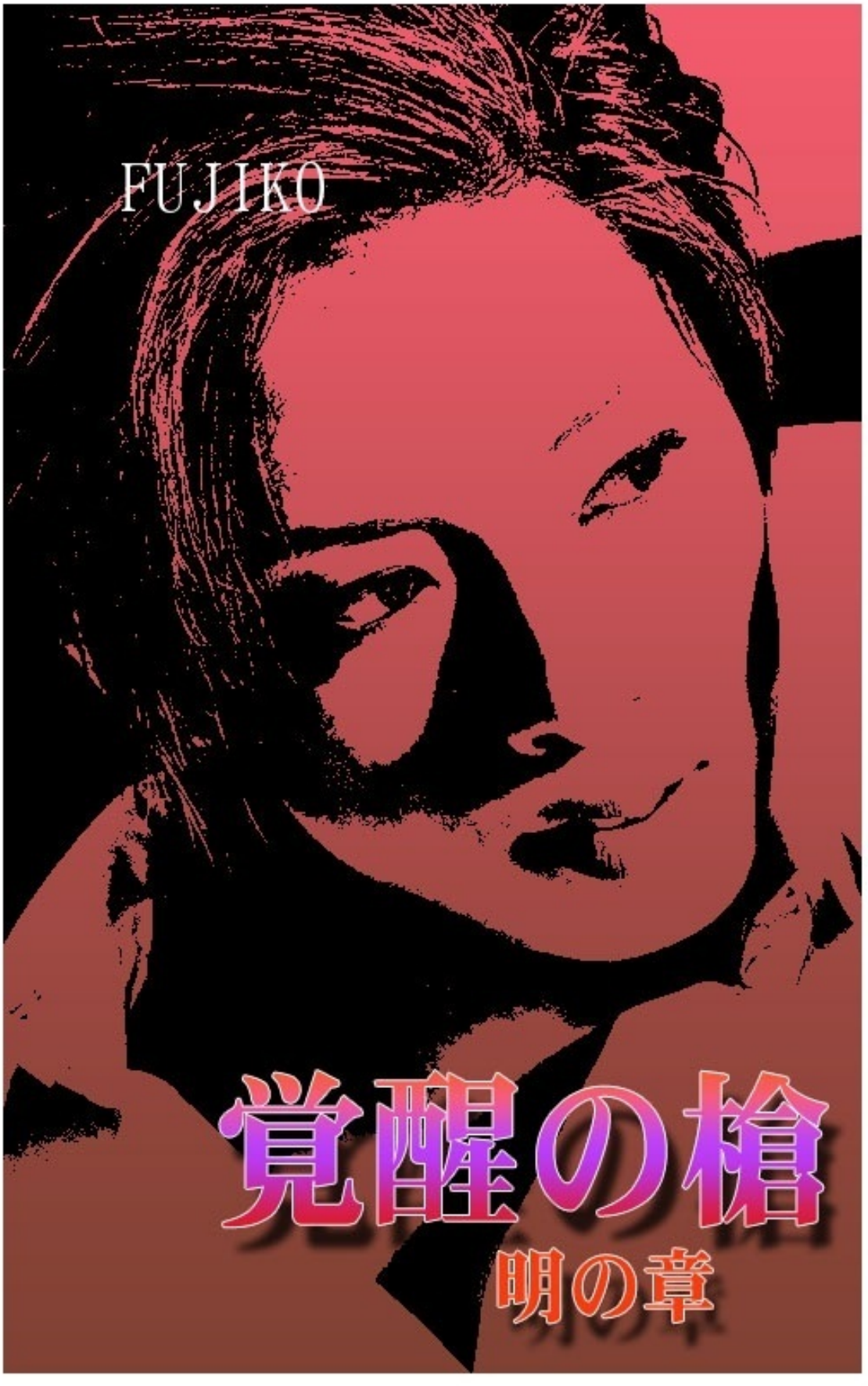
FUJIKO
覚醒の槍
明の章

前置き、主な登場人物紹介

・前置き

　舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

　名は〝警備部暗躍係〟別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

　エージェントの一人のサユミは、兵庫県に拠点を置く、女性で構成された大手歌劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られており、表と裏の世界の両面でトップの座を掴み、緊張感を持ちながら突き進もうとしていた。しかし…

・主な登場人物

サユミ

　秘密警察という裏の顔を持つ歌劇団の次世代エース。普段はマイペースでおっとりした性格であるが、舞台に立つと別人となり、存在感がある姿を魅せる新時代のスターとして注目される。彼女は実力を認められ所属する歌劇団のトップスターに就任するが、その直後、ある危機に直面することとなる。

ミチコ

　歌劇団に所属している芝居、踊り、歌と完璧にこなす実力派スター。類まれの才能と長年の経験で後にトップスターに就任する。裏の世界では優秀な工作員として恐れられ、常に世界で起きている問題にアンテナを張っている。

エリコ

　真っ直ぐな性格で、悪役からコミカルな役まであらゆる役柄を演じることができる舞台人。ベテランが集まる劇団員班に所属している。また、裏の世界でもミチコたちと行動して日々、犯罪を撲滅している。

アヤコ

　遅咲きではあるが、圧倒的な歌唱力を持ち、表現豊かな演技に定評がある歌劇団スター。裏稼業では先頭に立ち、敵地に潜入する役割を果たしている実力派。同期であるサユミがトップスターを務める班を離れることとなったが、彼女の危機に駆けつけようとする。

リカ

　元歌劇団トップスター。歌劇団退団と同時に裏稼業からも手を引いて行方不明となっている。

桜塚マサアキ

　秘密警察の一員で、サユミの裏稼業の相棒。面倒見のいい兄のような存在で彼女と共に〝鴉の眼〟の陰謀に立ち向かうこととなる。

鴉の眼(ノゾミ)

　ある実験で覚醒した突然変異体。サユミたちが所属する歌劇団の劇団員という意外な経歴がある。サユミたち歌劇団と交戦して倒されるが、復活を遂げて密かに再始動しようとする。

権藤芳雄

　兵庫県、神戸市に本部がある遺伝子科学総合研究センターのプロジェクトリーダー。ある夜、〝鴉の眼〟に殺害されて無残な姿で発見される。彼は恐ろしい研究に携わっていて、〝鴉の眼〟を生み出した張本人であった。

二階堂愛美

　権藤の助手をしていた経験がある研究員。権藤を尊敬していた彼女は、彼の死が気になり自らその要因を調べようとする。彼女はサユミに協力して、所属する研究所の陰謀に立ち向かおうとする。

アンジュ

　診療所を営んでいる元歌劇団スター。退団後も積極的に芸能活動をしており、多くの劇団員が彼女の診療所を利用している。

芽野輝弥

　慈善団体〝セイズ〟の最高責任者。優秀な経歴の持ち主だが、ある陰謀論が浮上して警察機関の捜査対象者となる。

リオン

　芽野の忠実な部下で護衛を担当している長身の男性。美形で何処となくサユミに似ている。

序章　悪夢の再来

　横浜港　山下ふ頭
　山下ふ頭は、昭和三十年から四十年の高度成長期の横浜を支える主力埠頭として重要な役割を果たしている。そして、現在は優れた立地特性を活かし、都心臨海部における新たな拠点となる開発が計画されている。

　二〇一五年、二月下旬のある夜、山下ふ頭は冬の夜風が吹いて、人気がなく静かだと思われたが、怪しい気配が潜んでいるため物々しい空気に包まれようとしていた。

「…目標地点に到達…全員配置に着いた？」

　一人のダイバースーツを着た者が埠頭内に忍び込んでいた。その正体は、歌劇団トップスターと秘密警察の密偵という二つの顔を持つサユミであった。彼女はダイバースーツを脱いで、別の場所から侵入している仲間と連絡を取り合って動こうとしていた。

「正面入り口に三人の見張りが…武器を携帯している模様…」

　サユミの仲間の一人が小型無人機を遠隔操作して、上空から現場を偵察していた。埠頭を偵察しているのは秘密警察の一人であった。また、歌劇団の注目スターの一人である。
　名はフジコ。彼女は物心ついた頃から歌劇団の舞台を観ており、念願叶って歌劇団入団が決まった。何事にも努力する一途な性格のイメージがあり、友人や仲間からは人柄の良さや大らかな性格だとムードメーカーのイメージがある。裏稼業ではオペレーターを担当して、ハイテク機器を駆使して仲間をサポートしている。
　サユミは無闇に動こうとせず、仲間と合流しようとした。

「…サユミさん、こっちです」

　サユミは、仲間の一人に手招きされた。サユミの前に現れたのは、サヤカという歌劇団スター兼秘密警察要員であった。彼女の母親も同劇団に在籍しており、父親は元プロスポーツ選手であり、長身で恵まれた体型と運動能力を親からちゃんと受け継いでいる。順調にキャリアを積んでいき、歌劇団と同時に裏の世界でも実力を発揮しているホープ。

「…皆、もう動いているようね」

「ええ、準備は整っています」

　サユミは、サヤカの言うことに従って一緒に待機しようとした。

「…こうやって皆揃うの久し振りだね～」

「…そうですね～…全国ツアーや小劇場公演やらでバラバラになっちゃったから…また新しい人が入って来るみたいですし…」

「そういえばそうだったね、まだちゃんと挨拶してなかったな～……」

「……バタ」

　その時、正面の入り口に居る見張りが突然倒れだした。サユミたちは雑談を止めて様子を窺おうとした。

「…あれ？あなたは…」

「…どうも、今日から参加させてもらいます…よろしく、サユミさん」

　サユミたちの前に現れたのは、秘密警察要員のアンという女性であった。彼女は一見クールであるが、熱いものを内に秘めており、負けず嫌いの一面がある。裏稼業では、優秀な密偵として危険な区域に潜入するのを専門にしている。サユミの古巣である班の出身者で、異動後、また同じ班の一員として彼女と活動することとなった。

「…アンちゃんだったとはね…」

「…誰が配属されるか知らなかったんですか？」

「…ええまあ、あなたの一年先輩ってことだけは知ってたんだけど…」

　サヤカとアンは、サユミのことを呆然と見ていた。

「……とにかくこれで進めるんで急ぎましょう…皆さんも向かっているはずです」

　アンは気を取り直して、サユミたちを先導した。

　サユミたちの標的は埠頭の中心部に集結しており、用意された照明の光の空間の中で怪しい取引を行っていた。そこでは非合法の闇市が開かれて強力な銃火器や大量殺戮兵器が並んでいた。

買い手は、北関東を牛耳る反社会勢力の金鷹会であった。売り手は中東の武器商人で、彼らは着々と契約を交して満面の笑みを浮かべていた。

　サユミたちは取引現場付近で息を潜めて、一網打尽にする時を窺っていた。

「…かなりの人数だね、まあ何とかなるか」

「…私たちの他に三人のメンバーが配置についています…いつでも行けます」

　闇の取引はお開きとなるが、そこに一人、金鷹会の組員が慌ててやって来た。その組員はあることを組長に報告しようとした。サユミたちは組長の驚く様を見て、自分たちの侵入が気づかれたことを悟った。

「…あらら、ばれちゃったみたいね…」

　サユミは頭を軽く掻き毟り、彼女たちはせっせと動こうとした。

「……ドパン！！」

　その時、現場に設置された照明が破壊されて、闇取引の参加者たちは慌てふためいていた。

「……何処のどいつか知らねえが、敵襲だ！…全員備えろ！！」

　金鷹会の若頭が組長を守りつつ、部下たちに命令して、武器商人も武器を構えて応戦しようとした。

「…さて、始めようか」

　サユミの合図で、仲間たちは奇襲を掛けようとした。

「ドドドドン…ドドン…ドパン…パン…」

　現場は銃声が鳴り響き、瞬く間に戦場となった。サユミたちは赤外線暗視ゴーグルを装着しているため、問題なく戦闘を続けていた。

「…！！」

「…これ、頂くよ」

　サヤカと対決する者たちは何故か動けず、彼女に武器を取られて倒されていった。

サヤカには、一時的に相手の動きを封じる能力があり、武器は簡単に奪い取れるのを理由にいつも丸腰の状態で敵地に乗り込んでいた。

「…妙な奴が居る！注意しろ！」

　サヤカに警戒する敵たちであったが、既に次の刺客が彼らに迫っていた。

「…後ろがガラ空きだよ」

「…ぐえ！！う……がは…！」

　気づけば敵数人の背後にアンが立っていた。彼らが気づいた時はもう遅く、いとも簡単に彼女に倒されていった。

「……くそ、なかなか手強いな、このままだと全員やられるかも…！」

　金鷹会は、戦況が不利になっているのを感じ取って、組長を連れて外に逃げようとした。部下たちもそれに続いた。

　サユミたちは一つも焦ることなく、急いで敵を追跡しようとしなかった。金鷹会組員と武器商人は、散って外に逃げようとした。しかし、彼らに逃げ場はなく、いつの間にか罠にはまっていた。

　出口を求めて敵たちは逃げ惑うが、行く手を阻む刺客が続々と姿を見せようとしていた。

「……♪」

　突如、美しい音色が聴こえて、敵たちは自分の耳を疑った。しかし、その音色は幻聴ではなく、まさしく楽器が奏でているものであった。

「…そこに居るのは誰だ？」

　敵の目の前に人影があった。その正体は、秘密警察要員で歌劇団の若手ホープの一人であった

。名はシオリ。常に冷静沈着で礼儀正しく器用に物事をこなす一面があるが、実はかなりの努力家で地道に任されたことをこなしている。舞台の世界では歌唱力に定評があり、裏稼業でもそれが活かされている。

　シオリの手には小さなハープがあり、敵をずっと待ち伏せしていた。美しい音色はそのハープから発せられたものであった。

「…あなたたちを待ってましたよ、悪いですけど、大人しくしてもらいましょうか」

「…何をこのアマ！邪魔をするなら力づくで……？」

「…♪」

　シオリは、突然ハープを弾きながら歌いだした。敵は呆然と彼女を見ていた。

「……な…何だ、この女は？」

　シオリの歌声は、透き通った美しい声で、ハープの音色と上手く調和されていた。敵は何故か彼女に反撃しようとせず、そのままウトウトとしていた。その直後、眠気に襲われて彼らはそのまま眠りこけて倒れていった。

「…ごゆっくりお休みください～」

　シオリの歌声は、ハープの音色と合わせることで特殊な音波を発生させることが出来て相手側を眠らせる効果があった。効き目は強く、ちょっとやそっとでは目覚めないほどであった。彼女は目の前の敵を全員夢の世界に連れ込んでからサユミたちと合流しようとした。

　一方、武器商人も脱出しようと出口に一目散であった。しかし、また一人待ち伏せている者が居た。その名はレイ。眩しい美貌と現代的な容姿を兼ね揃えた歌劇団若手スターで裏稼業も積極的に参加している。恵まれた体から身体能力が優れており、舞台の世界ではダンスが得意である。見た目はクールであるが、人懐っこい一面があり、先輩たちに可愛がられている。

「…逃がしはしないよ」

「……○★□＃？……」

　レイが武器商人の逃げ道を塞ごうとするが、彼ら日本語は通じず、お構いなく前に進もうと

した。

「…私とやろうってんの？」

「……ドガガガガ…ドドド…ドオ…ドパ」

　武器商人はレイに容赦せず、銃火器を乱射した。

「……うわ、あぶね…」

　　レイは慌てることなく、落ちついて弾を避けていった。彼女は猿のようにすばしっこく、撃った弾は無駄になった。武器商人は一旦攻撃を止めて、瓦礫の山と化した通路を通ってレイを捜索した。

「……」

　　武器商人の一人は、個室の中に入ってレイが居るか確かめた。

「……！」

　レイは死角になる天井に潜んでおり、入室した武器商人に飛び掛かろうとした。

「……▽×％＊＠！！」

　武器商人は反撃する暇もなく、レイにあっさりと倒された。

「ドドン…ドン…パン…ドゴ！」

　レイは再び銃弾の雨に向かって行った。彼女は、パルクールというフランス発祥の運動方法で、軽々と瓦礫の山や壁に飛び移って行って相手を翻弄していた。

「……！」

　ここでレイの優勢かと思われたが、二メートルを超す大柄の男が現れて、彼女の相手をしようと突撃してきた。

「…ドボゴ！！」

　レイはあまりの迫力で回避は間に合わなかったが、突如、彼女の前に防壁が現れてそれに救われた。大柄の男は突然の障害で弾き飛ばされた。

「……ふう、助かったよ」

　レイを助けたのは。お馴染みの秘密警察要員であった。名はミナミ。歌劇団は全員女性で構成されているため、体の線が細い劇団員が多い中、彼女は長身でがっしりとした体格で強靭な肉体美を誇っている。そこから男っぽい性格が連想されるが、実際はお淑やかで笑顔が素敵な関西人女性である。レイとは同期で、彼女と共に歌劇団の未来を担うスターとして早くから抜擢された。鍛え抜かれた筋肉から繰り出される力強いダンスが魅力的で裏稼業でも自慢の怪力を武器に危険な任務に挑み続けている。

「…この無能ゴリラは私が相手をするよ」

「…！！」

　大柄の男は、ミナミの悪口が通じたようで怒りを露わにして立ち上がった。ミナミと大柄の男は睨み合った後、お互いがっちり組み合って力比べをした。

「…どうしたの？そんなものなの、あんたの力は？」

「……ぐ……うわあああああ…！」

　二人の力比べは長引こうとせず、ミナミの圧勝のようで、大柄の男は腕を痛めて雄叫びを上げた。

「……！！！」

　大男は隙を見つけてミナミに奇襲を掛けようとするが、それは失敗に終わって返り討ちに遭った。彼は野生の熊のように蹲ってそのまま気絶した。ミナミはあっさりと勝利したが、まだ終わりではなかった。武装した武器商人が続々と現れて、彼女は完全に包囲された。

「もう絶対滅亡ってやつ？」

「……ドパラララ！！」

　その時、銃声がして数人の敵が倒された。

倒したのはレイであった。

「…ほい、これで借りはなしだね」

　レイはそう言って、地面にある敵のマシンガンのベルトに足を引っかけて、そのままミナミの方に蹴り投げた。ミナミは、レイから武器を受け取って笑みを浮かべた。

「…さて派手にやりますか」

　レイとミナミは怯むことなく、相手に立ち向かおうとした。

　埠頭の至る所で銃撃戦が起こり、サユミ率いるチームと闇の組織の攻防戦は、閉幕しようとしていた。

「…現状は？大体片付いたと思うけど…」

　サユミは埠頭内に居る仲間を連絡を取り合って状況を確認していた。

「……レイとミナミはまだ交戦中だけど、まもなく片付く模様…売り手はコンテナエリアに逃げ込んでいて、現在、小型無人機で応戦しています…」

「…了解、直ちに応援に向かう、皆に片付いたら合流するように言って…」

　サユミは、フジコから連絡を受けてから残りの敵を倒そうとした。

　山下ふ頭　コンテナエリア

　どうにか外に脱出した武器商人の一味は、フジコが操作する小型無人機と交戦しながらある物を待っているようであった。

「…一人もここから逃がさないで、あと数分で応援が来るから持ちこたえるのよ！」

　秘密警察メンバーは合流して、サユミの命令に従った。敵は大人しくなっていくが、ここで新たな動きがあった。

「……埠頭付近上空に反応が…！」

　サユミたちは、フジコの報告を注意深く耳にして、一斉に空を見上げた。

「ババババ…」

　　すると、ある飛行物体が背接近しているのであった。それは武器商人を迎えに来た輸送ヘリであった。

「…逃がすもんですか！」

　サユミたちは、必死にヘリでの救出を妨害しようと動き始めた。

「……ドドドドパララ…ドドガガ…！」

　ヘリの搭乗員は低空飛行後、扉を開けて銃を乱射したり装備された機関砲を撃ったりしてサユミたちに挑もうとした。サユミ率いる秘密警察メンバーは、銃弾の雨の中を縫うように避けて残りの武器商人を倒そうとしたが、そこに何故かサユミとミナミの姿はなかった。

　新手はかなり手強く、秘密警察メンバー四人は苦戦を強いられるが、密かに形勢逆転を狙っていた。

「……本当にいいんですか？」

「…ええ、この方が手っ取り早いから、思い存分にやって…！」

　派手な銃撃戦が続く中、サユミとミナミはヘリのほぼ真下に潜んでいた。二人はある作戦を練って実行しようとしていた。

「……じゃあ行きますよ、サユミさん！」

「…いつでもどうぞ！」

「……！！」

　その時、ミナミはサユミを人形のように盛上げてそのまま天高く放り投げた。目標地点はヘリで、サユミは大胆な発想でヘリの中へと辿り着いた。

「…ぐえ…！」

　サユミは驚く搭乗員の一人に飛び掛かって無事にヘリの中に入った。そして、瞬く間に銃器を持った搭乗員二人が彼女に倒された。

「…ヒュ」

　　次にサユミは、機関砲を撃っている搭乗員に愛用しているダガーナイフをダーツのように投げて沈黙させた。これで地上に居る仲間への危害は無くなった。

「…！！」

　ヘリの操縦士は、自動操縦に切り替えてサユミと闘おうとするが、呆気なく彼女に倒されていった。これで敵は全て倒されたが、ヘリを操縦出来る者は居なくなって墜落する運命を辿っていた。サユミには冷静に考える時間はなく、何を考えているのか、彼女は無謀にもパラシュートを付けず、そのまま飛び降りようとした。

「……！！」

　サユミが危険な急降下をして、そのまま地面に叩き付けられると思われたが、その直前に彼女を受け止める者が現れた。それはサユミの後輩のレイであった。彼女は極めたパルクールの力を利用して、常人以上の速さでサユミが居る場所まで駆けつけてしっかりと抱きかかえた。地上に居る秘密警察要員はサユミたちの無事を確認して胸を撫で下ろしていた。コントロールを失ったヘリはそのまま墜落して爆発を起こした。

「……全く無茶しないで下さい…寿命が縮まりました！」

「…ごめんちゃい、まあ助かったからいいじゃないの～レイ君ありがとう～」

　サユミは後輩のサヤカに怒鳴られるが、あまり気にしていないようであった。

「…買い手の方も制圧しました、引き揚げますか？」

「そうね、そろそろ迎えが来るわ」

　サユミたちは任務を遂行して引き揚げようとした。

「…お待たせ～」

　彼女たちが桟橋に向かうと月の光を浴びた一隻のクルーザーが停まっていた。迎えに来たのは秘密警察要員の一人であった。名はアキラ。所属する歌劇団の実力派スターでもある。容姿と共に性格も男のように逞しく独特な色気もあり、早くから注目されている。裏稼業でも主力として活躍しており、あらゆる武器に精通し、知識が豊富なため、どんなトラブルにも応対出来る力が備わっている。プライベートでは問いの料理を後輩たちに披露してムードメーカーの役割を果たしている。

「…上手くいったみたいですね、応援に行こうと思ってたんですが…」

「…悪いけど、全部片付けちゃったわ」

「…一応、サユミさんの得物も持って来たんですが…」

「…今回は必要なかった…わざわざ持ってきてくれたのね」

　サユミの主要武器は、自身の身長を超す〝ユニコーンランス〟という巨大槍であった。

「…後処理は海上保安庁に任せて退散して下さい」

　オペレーター担当のフジコの指示を受けて、サユミたちはその場を後にしようとしていた。その後、海上保安庁のヘリや船が姿を見せて、埠頭に居る罪人たちは全員確保するが、サユミたちの活躍は一切明かされることはなかった。

　場所は変わり、兵庫県神戸市

　夜の神戸の街をまばゆい光が照らす中、その様子を静かに見下ろす者が二人居た。

「…やはり外はいいね、窮屈で仕方なかった…私はどれくらい眠っていたのかな？」

「…一八六日と五時間三二秒です」

「…そうか、思ったより早く回復したね…ところで君は誰だったかな？」

「…リオンでございます、ご主人様」

「私の忠実な部下だということだね？」

「…はい、何なりとお申し付け下さい」

「では色々と手伝ってもらおうか…ふふ」

　黒ずくめの謎の人物は、不敵な笑みを浮かべて何かを目論んでいた。リオンという謎の人物の部下は何処となくサユミに似ていて、不可解な点が多く、このことからある陰謀が渦巻いていることが明らかになった。

第一話　邂逅と宿命

　二〇一五年、四月某日。サユミは本拠地の大劇場公演を終えた後、朝早くから兵庫県の閑静な住宅街に位置する診療所に訪れていた。

「…あら、サユミちゃん、元気にしてた？」

「ええまあ、またお邪魔させてもらいます、彼女はもう来ていますか？」

「ええ、来ているわよ、今日は患者の数が少ないから気にしないで…すぐに行くから待ってて…」

　サユミに愛想よく話し掛けている女医の名はアンジュ。現在、診療所を開設しているが、以前は歌劇団の劇団員に所属していた。退団後も積極的に芸能活動しており、彼女の診療所には歌劇団時代の仲間が多く通っている。

　サユミはある人物と会う約束をしており、アンジュの診療所を利用させてもらっていた。彼女は奥の診察室に向かい、待ち人と顔を合わせようとした。

「…ごめん、待たせちゃって…」

「いいのよ、私も来たばかりだから、公演は無事に終わったようね…」

「ええ、お陰様で…観に来てくれてありがとう」

　サユミを待っていたのは、一人の美人女性であった。名は二階堂愛美。彼女は、神戸市に本部がある遺伝子科学総合研究センターの研究員であり、優秀さが注目されて若くしてプロジェクトリーダーにスピード出世した。サユミとは所属する研究センターで起きた不祥事がきっかけで知り合うこととなり、今ではため口で話せる中となった。休日にはサユミが主演を務める舞台を観劇しに行っている。

「体の調子はどう？…何か違和感とかは？」

「今のところ大丈夫よ、動悸もしないし…」

「一応調べていきましょう…」

「……ごめんごめん、常連の患者と喋っていたら遅くなっちゃって…診断しましょうか？」

「お願いします！」

　アンジュが慌てて診察室に現れて、あることを調べるためにサユミを診断しようとした。サユミは脱衣して静かに診察椅子に座り込んだ。

「…これは酷いわね」

　アンジュと二階堂は、サユミの体を見て驚愕していた。サユミは自慢出来るほど透き通るような白い肌であるが、腹部や背中など、体の至る場所には痛々しい傷跡や痣があった。

「…また傷増えちゃいました、見た目は凄いけど、どうってことないですよ～」

「だからと言って、あまり無茶しちゃ駄目よ、大事な体なんだから…！」

　アンジュが心配する中、サユミは平然としていた。サユミは裏稼業で無理をして、大怪我を負っていた。しかし、彼女にとってそれは勲章みたいなものであった。外傷も問題だが、アンジュたちは今回、別の問題を調べてようとした。

　アンジュはサユミの体に聴診器を軽く当てた後、触診して体の具合を確かめようとした。

「…内臓機能に異常はないわ、鼓動も落ち着いている、血液も調べる？」

「そうですね、調べましょう」

　サユミは血液検査するために注射され、一通りの検査を終えようとした。その後、彼女たちは場所を変えて、診療所と併設しているアンジュの家で話をしようとした。

「…適当に座っといて…お茶淹れるから」

　サユミと二階堂は、アンジュにリビングルームへ連れ込まれて設置されたソファーで腰を下ろした。

「…まだはっきりとした結果は出ないけど、特に問題はなさそうね…血液は研究所に持って帰って調べるわ」

　二階堂は専用のパソコンにサユミの診断結果を分かるだけ記録していき、一仕事終えようとしていた。

「…いつも心配しれくれてありがとう、もうだいぶ症状が無くなったと思うけど…」

「もう症状を抑える薬を飲む回数減らしても大丈夫でしょう…そのうち要らなくなるわ…よく頑張ったわね」

「…最近やっと変な夢を見なくなって魘されなくなったわ」

「本当に災難だったわね、でもそれで私たちが出会ったわけだけど…」

「そうね、もう知り合って半年以上経つのかな～時間が経つの早いよね～」

　サユミと二階堂は、運命的な出会いを思い出した。時間は半年前の二〇一四年の七月までに遡る。その年はサユミたちが所属する歌劇団の記念すべき百周年の年であった。

　サユミは、トップスターお披露目の地方公演を無事に終えて、休む暇なく東京に訪れていた。

　東京　東京歌劇団劇場近辺の公園

　夏の空気がゆったりと漂う日、サユミは都内の公園である人物と待ち合わせしていた。

「悪いね、待たせちゃって…」

　サユミの前に現れたのは、三十代の一人の優男であった。彼の名は桜塚マサアキ、警視庁公安部に所属しており、サユミの裏稼業の相棒である。外見は朗らかでとても警察の人間に見えず、サユミは彼を兄のように慕っている。

「…珍しいですね、東京で待ち合わせなんて…勿論、仕事の話ですよね？」

「…ああ、今回は特別だよ、緊急なんでね…早速仕事の話をしたいところだが…トップスター就任おめでとう！」

「あ…ありがとうございます！」

　桜塚はサユミのトップ就任を祝福して、彼女の分のカフェオレを渡した。

「…今、バタバタしているようだけど、こっちの仕事も手伝ってもらうよ、歌劇団側にはちゃんと許可を取っているから…」

「…はい、結構難しい仕事ですか？」

「…そうだね、場合によっては手間がかかるかも…うちはやりやすい仕事なんてないから…」

「そうでしたね、内容を教えて下さい」

　サユミは承諾し、桜塚から仕事内容を聞こうとしていた。桜塚は、仕事に関する資料が入った封筒を開封して説明しようとした。

「…これを見て、怪しい取引現場の写真だ、一方は海外の犯罪組織でその正体は調査中…問題はもう一方…鵬東薬品…最近急成長した製薬会社、世界進出も果たした大手だ…そこの社員が居た…」

「…その製薬会社が標的ですか？」

「ああ、まず売り手である鵬東薬品から洗う…買い手は後回しだ」

「どういった取引を？」

「それも調査中だ、かなりやばい件のようだ…他にも関わっている組織があるかもしれない…僕たちでそれを調べる、一人の男をマークする、角田純也、鵬東薬品の営業担当だ、彼が闇取引に関わっていた…他にも候補が居るがまず彼から調べるよ」

「…分かりました」

　こうして、サユミと桜塚の捜査が始まった。二人はまだ触れてはいけない件だと気づいていなかった。

　それから数日後、サユミたちは事件のカギを握る角田純也の尾行を実行した。

「…彼だ、それじゃあ行くか…」

サユミと桜塚は、角田が勤めている会社の前で張り込みをして、専用駐車場から彼が出てくるのを目撃した。桜塚は、角田の運転する車を追跡しようと公用車を発進させた。こうしてサユミたちの長い一日が始まろうとした。

角田は都内のカフェに入り、取引先の人間と会って商談していた。サユミは彼らの様子を確かめようと、チューブ式イヤホンを装着して店の中に入った。桜塚はサユミに潜入を任せて車内で待っていた。

「…いらっしゃいませ、好きな席にどうぞ」

その時間、客の数は少なく、サユミたちにとって都合が良かった。彼女はわざと角田たちが居る場所の近くを通り、ある物をさりげなく仕掛けた。それは小型ボタン式集音マイクであった。

「…すみません、カフェラテを…」

サユミは自然に開いている席に座り、適当に注文した後、角田の会話を傍受しようとした。勿論、車内で待機している桜塚も彼らの会話を聴くことが出来た。

「……外れか」

会話を聴いていくと、どうやら追っている件と関係ないようで、桜塚はサユミに帰ってくるよう伝えた。それから一時間後、角田たちは商談を済ませて店を出ようとした。角田は、また別の顧客に会おうと車を発進させた。サユミたちは、彼に気づかれないよう尾行を続けた。

その後。角田は休むことなく営業の仕事を続けた。彼は人柄が良く、何処にでも居る真面目な営業マンのようで悪行に手を染める人物とは到底思えなかった。

サユミたちは拍子抜けしながらも角田の監視を続けて、時間が無駄に過ぎていった。気づけば空は暗くなっていき、角田の退社時間となっていた。彼は帰宅しようと最寄りのＪＲの駅まで向かい、勿論、サユミたちもついて行った。

「…たまにはこういうことも体験しないとな…」

角田は帰宅ラッシュ時の息が詰まりそうな車両に乗り込み、サユミたちもそれに飛び乗った。彼らは、標的を逃がさまいと必死でほっとする瞬間は微塵もなかった。

「…！？」

　角田はこのまま帰路に着くかと思われたが、彼は何故か途中下車しようとしたため、サユミたちは強引に満員となった車両を抜け出さねばならなかった。

　それから角田について行くと、彼は歓楽街を通って一軒の居酒屋に入った。サユミたちは勤務中で酒の飲むことが出来ないため、仕方なく外で待とうとした。

そこは行きつけの店のようで、角田は一人寂しく焼酎ロックを飲んでいた。これも会社員の日常で特に不審な点はなかった。

「…ありがとうございました、またお越し下さい～」

　それからしばらくして、アルコールで顔を赤くした角田が姿を見せて、耐え忍んだサユミたちは彼の尾行を続けた。彼らは問題なく尾行しているように思われたが、角田はふと立ち止まり、一度自分のスマートフォンの画面を確認した。

〝尾けられているぞ。私の言う通りにするんだ…〟

「…！！！」

　角田は突然送られてきたメールによってサユミたちのことに気づき、全速力で駅とは別の方向に走り出した。

「…しまった、ばれたか？追うぞ！」

　サユミは、見失わないよう桜塚と共に角田を追い掛けた。角田は、奥へ奥へと人気のない裏通りに逃げて行った。それはまるで、サユミたちを誘い出しているようであった。

「…どうもおかしい、どうしてこんな場所に…？」

　桜塚は疑問を投げ掛け、嫌な予感は見事に的中した。細い路地の角を曲がろうとすると、角田の姿はなかった。

「…そんな、彼は何処に？隠れる場所はないわ…」

「…注意しろ、この場所は異様だ…」

　サユミたちは走ろうとせず、一歩一歩慎重に前に進んだ。

「…？」

　すると、彼らの前方に一つの人影が現れた。

「…誰？そこに誰か居るのは？」

　サユミが呼び掛けると、その人影は近づいて不敵な笑みを浮かべた。

「……俺たちが追っている者ではないな、ここで何している？」

　サユミたちの前に突如現れた人物は、黒羽根に覆われた上着を着用し、全身は黒で統一され、闇夜に溶け込んでいて、無気味であった。

「…ここに一人の男性が通ったはず、知らないですか？」

　サユミは相手の姿に動揺せず、黒ずくめに質問した。

「……彼は渡さないよ、特に君たちのようなうっとうしい狗にはね…！」

　黒ずくめは、どうにか聞き取れる低い声で答えた。彼は姿を消した角田のことを話しているようであった。

「…角田のことを知っているな、お前は何者だ…？」

　桜塚は、黒ずくめに警察手帳を見せて職務質問しようとしていた。

「……知る必要はない」

　黒ずくめは、サユミたちに従おうとせず、挑発的な態度を取っていた。

「…どうやら力ずくで訊き出すしかないようだな…！」

「…やってみなよ、抵抗はするよ」

　サユミたちは前のめりになって、黒ずくめから目を離さなかった。

「！」

　黒ずくめがまず先手を取り、襲い掛かった。二人は協力して相手の動きを封じようとした。

　桜塚は、黒ずくめを地面に押さえつけようとするが、なかなか上手くいかなかった。黒ずくめは、細身の割になかなかの怪力で逆に桜塚が押し出された。

「…こいつ、何者だ？気味が悪い…」

「……どうしたの？もっと遊んでよ、刑事さん」

　桜塚は黒ずくめの挑発に乗り、装備している拳銃を構えた。

「…桜塚さん！」

「…おやおや、ここは日本だよ、一般市民にそんなの向けていいの？」

「…ふん、何が一般市民だ…！俺は今まで色んな悪党を見てきたが、お前は特にいかれている…とても普通の人間とは思えない…何処からやって来た？」

「ふーん、結構勘が鋭いね、当たりだよ、私は人間じゃない…」

「…だったらお前は何だ？」

「……化け物さ」

「！」

「ドン…！」

　その時、黒ずくめは抵抗しようとしたため、桜塚はすかさず威嚇発砲した。

「え…？」

　威嚇発砲したのと同時に、黒ずくめの姿が消えて、桜塚たちは慌てふためいていた。

「……そんな、何処に消えた…？奴は…」

　桜塚たちは動揺しつつ、辺りを隈なく探した。

「……背中を見せたらもうゲームオーバーだ…」

「！！」

　その時、桜塚の背後に視線を感じ、そのまま彼の体は固まった。

「…いつの間に？」

「…言っただろ？化け物だって…もう降参するかい？」

「…相手が悪かったようだ、でもまだ諦めねえよ…」

「……じゃあ仕方ないな」

「…あが……！！」

　その時、ぽたぽたと桜塚の血が垂れ落ちていった。黒ずくめは、指先を尖らせて桜塚の背中を深く刺した。黒ずくめの指先はまるで槍のようであった。指を抜くと、黒ずくめは返り血を浴びて、桜塚の血がついた手を嬉しそうにサユミに見せた。桜塚は、力尽きて静かに倒れた。

「桜塚さん！！！」

　サユミは、桜塚の変わり果てた姿を見て、逆上し、すかさず黒ずくめに得物のダガーナイフを放った。しかし、それは命中しなかった。黒ずくめは、またもや姿を消し、攻撃を回避した。

「…汚いわよ、早く出て来なさい！」

　サユミの怒号が鳴り響くと、気配を消しつつ背後に黒ずくめが現れて、そこから彼女にヘッドロックを掛けようとした。

「…ぐ、しまった…！」

「怒りからは油断しか生まれないよ、筋はいいが、まだまだだね…」

「…そのまま絞め殺す気？」

「…君をどう料理するかは、こっちの自由だ…簡単に殺すには惜しいな、一つ面白いことがある…」

　黒ずくめはそういうと、上着のポケットからあるものを取り出した。それは注射器であった。

「…何を？」

「…丁度、君のような人材を探していた、今夜はついている…」

「…何をごちゃごちゃと…！」

「……君は大手歌劇団の劇団員だろ？」

「！！…それが何だっていうの？」

　黒ずくめは、やたらサユミに興味を持っており、注射針を彼女の首筋に当てた。

「…下手に抵抗しない方はいい、肌が傷つくよ…！」

「…やめ……て…」

　サユミは、強引に謎の薬剤を注入された。

その直後、彼女は大量の汗を流しながら腰が抜けたのか、そのまま足が崩れていった。

「……まだ試作段階ですぐに効果は出ない…次に会うのを楽しみにしているよ…」

　黒ずくめはそう言い残して闇へと消えた。黒ずくめが去った後、体が自由になったサユミは横たわっている桜塚の容体を確認し、直ちに救急車を呼んだ。

　サユミは軽傷で治療は早く終わり、桜塚は深手を負って長時間の治療となり、どうにか一命を取りとめた。サユミは入院する必要がなく、待合室で迎えが来るのを待っていた。消灯時間は過ぎているため、病院内は暗闇に包まれていて、サユミは少量の灯りが灯された待合室で静かに待

つこととなった。

「……コツコツ」

　しばらくすると、かすかに足音が聴こえて、それは徐々に大きくなっていった。サユミは迎えに来た者だと気づき、俯いた顔をゆっくりと上げて、迎えに来た者と目を合わせようとした。

「…あなたは！…」

「待たせたわね、それと…無事で良かった」

　サユミは迎えに来た者とは顔見知りであった。名はミチコ。サユミと同じく歌劇団の劇団員で実力派スターの一人として注目されている。また、裏の世界でも多くの敵対組織から恐れられ、撲滅に力を入れている。

「…すみません、心配をおかけして、おまけに迎えに来て頂いて…」

「気にしなくていいわ……歌劇団側の上層部が心配していたわ…あなたの相棒には悪いけど、不幸中の幸いね…もし、入院となれば色々と騒ぎになる…捜査中のトラブルのようだけど、かなり危ない橋を渡っているようね…大丈夫なの？」

「…分かりません、相棒と動けないし…上の指示を待つしか…」

「…相手が明らかに自分より手強いのなら仕方ないけど、油断してミスったのなら気を付けた方がいいわね…あなたのプロなんだから…」

「…はい、肝に銘じます」

「…それにやることは山積みだけど…あなたは舞台に立つことが本業だから、しばらくそっちに集中した方がいいかもね…トップスターとなったあなたには重要な使命がある…もうじきトップ就任時初の大劇場公演が開演する…何としても成功させないといけないわ…」

「…分かっています、稽古はちゃんと行きますので…ご指導をお願いします」

「分かってくれたらいいの、それじゃあ行きましょうか…」

　サユミはミチコに軽く説教されて、宿泊しているホテルまで送ってもらうこととなった。彼女

は黒ずくめの奇襲を受けて、謎の薬物を注入されたが、その痕跡は何故か綺麗に消えていた。サユミは悪夢の出来事をミチコなど第三者に一切明かそうとしなかった。

　数日後、サユミは本拠地の兵庫県に戻り、何事もなかったかのような振る舞いで大劇場に併設された稽古場に姿を現した。彼女と同じ公演に出演するミチコは、ほっとした様子で一緒に稽古に励んだ。

　　しかし、サユミの頭からどうしても例の黒ずくめのことが離れず、注入された謎の薬品のことも気になり、独り寂しく困惑していた。

　　それから数時間後…

「…はあ」

　サユミは稽古を終えてファンとの交流を済ませた後、覇気のない顔を浮かべて帰宅した。彼女は自宅に着くと無気力になり、ただ部屋で人形のようにじっとしていた。

「……♪」

　その時、サユミのスマートフォンに着信が入り、彼女は仕方なく電話に出ようとしていた。通知表示を見ると公衆電話となっており、それはサユミをいい方向に導こうとしていた。

「…もしもし？」

「…僕だ、ちゃんと表の仕事をしているようだね…」

「…え？桜塚さん…！」

　サユミは桜塚からの突然の電話で正気に戻った。

「…入院中でなかなか連絡を取れる暇がなくてね…ようやく落ち着いて病院の公衆電話から掛けている…心配させてすまなかった…」

「…いえ、元気な声が聞けてよかったです」

「元気にやってるが、退院まで少し時間が掛かりそうだ…今日、うちの上司がお見舞いに来てね…例の担当している事件の捜査から外されるかもしれない…」

「…そんな！まだ始まったばかりなのに…どうにかならないんですか？」

「…僕だって悔しいさ、しかし、完全に相手から動きを読まれていた…バックに大きな組織が絡んでいるかもしれない…僕たちでは手に負えないかも知れない…あの襲ってきた者は異常だ…！」

「だからと言って諦めたくありません、私の体に注入された薬の成分のことも気になるし…」

　サユミは桜塚の弱気な発言に対し、怒りを露わにしていた。

「そうだったな、僕は深い傷を負ったが、君の方が厄介だった…体の方は…何ともないのか？」

「…今のところは大丈夫です、注射の跡は消えていますが…気持ち悪くて…」

「そりゃそうだ、その薬のことだけでも解決させたいな……分かった、一つだけいい手段がある…！」

「…え？」

　桜塚は苦渋の決断の末、サユミにあることを伝えようとした。

「…僕は入院中で担当している事件に一切関わることは出来ないが…君に指示は出来る…ただこっそりとだ…ばれたら僕も君も処分を受けて、最悪の場合、クビが飛ぶかもしれない…覚悟はあるか？」

「…あります！」

　サユミは即答し、桜塚は今後の捜査方法について説明しようとした。

「…わざわざこっちに来る必要はない、大事な公演が控えているからね…兵庫県にある僕の仮住居の場所を知っているだろう？合鍵も渡しているはずだ…」

「はい、大事に持っています」

「そこに行って、部屋にあるパソコンを起動させれば担当している事件の情報を閲覧出来る…新情報はメールで送られてくるようになっていて、しばらく見てないから大分溜まっているはずだ

、送信されたメールは万全なセキュリティーで守られているため、内容は外部に漏れることはない…パスワードを入力すればちゃんと開けるようになっている…パスワードは合鍵に刻んであるから…」

「分かりました、任せて下さい」

「…もし、手に負えない件なら決して無茶をするな…僕が復帰するまで待つんだ、いいね？」

「はい、桜塚さんもいい機会だから仕事のことを忘れてゆっくりしといて下さい」

「…ああ、そうさせてもらうよ、リハビリに専念しないといけないしね…報告は以上だ、そろそろ消灯時間なんで戻らないと…それじゃあまた…」

「はい、お休みなさい～」

　桜塚は松葉杖を使って自分の病室へと戻り、サユミは身を引き締めて今後のことに備えようとした。

　それから三日後、サユミは休みの日を利用して、桜塚の仮住居のマンションへと向かった。そこは仕事のために利用していて、サユミは初めて合鍵を使うこととなった。

　桜塚の仮住居は２ＤＫのワンルームでこぢんまりした空間であった。少々室内は埃っぽいが電気、水道、ガスは問題なく通っていた。

「…あぢ～」

　　夏本番となり、サユミはあまりの暑さに耐えられず、偶然目にした扇風機に手を伸ばした。彼女は机の上に置かれたパソコンを見つけて桜塚の指示通りに操作を行った。まずパソコンを起動させて、特殊なメールサーバソフトを開こうとした。

「…えっと…」

　サユミは視力が悪いため、プライベートでは眼鏡を掛けており、どちらかといえば、アナログ派で少々作業に手間取っていた。

彼女は合鍵に刻まれたパスワードを入力して届いたメールを確認しようとした。

「…これまた凄い量ね」

　メールボックスを確認すると、未読メールが溜まっており、サユミはそこから担当している事件と関係がありそうな情報を探そうとした。

「…これね、鵬東薬品のことが書かれている……」

　サユミは、関係がある情報に目が留まって黙読した。

〝闇取引現場を再度確認すると、鵬東薬品と外国人犯罪組織の他に関連している組織のことが判明、それは遺伝子科学総合研究センター。現場に居たのは、そこのプロジェクトリーダーの権藤芳雄とされる〟

「…この研究所、鵬東薬品と提携して事業を行っている…事業内容の詳細は不明…怪しいわね…研究所の本拠地は神戸市…近くて好都合だわ…」

　サユミは追っている事件の有力な手掛かりを掴み、単独で捜査を続行しようとしていた。
　ポートアイランドは、神戸市中央区神戸港内にある人工島。神戸大橋及び湊島トンネルによって神戸中心部と結ばれ、都市機能を一通り備える。神戸の有名大学が開設され、医療機関、研究機関も充実している。

　鵬東薬品と業務提携している遺伝子科学総合研究センターは、ポートアイランドに位置していた。サユミは、捜査のために研究センターへと向かうのであった。彼女は、新交通システムかつ世界初自動無人運転方式の交通機関、ポートライナーを利用して目的地に辿り着くのであった。研究所の最寄駅を降りると、未来都市のような空間が広がっており、サユミは少々落ち着かない足取りで例の研究センターに訪れた。

「……あの、ちょっと…勝手に通らないで下さい！」

　サユミは警備員の足止めを食らい、焦りの表情を見せた。

「……あ…あの…私、警察の者でして…」

「…警察？本当に…？」

　サユミは警察手帳らしき物を出すが、警備員はまだ彼女を疑っていた。

「…追っている捜査のことで協力してもらいたくてやって来たんですが…」

「…ちょっとお待ち下さい、中と連絡を取りますので…」

「はい、お願いします」

　警備員は、無線で内部の人間と連絡を取り合って、サユミの通行許可の返事を待とうとした。

「……すみません、お待たせしました、中にどうぞ、受付の方へ…」

　それから十数分後、ようやく通行許可が出て、サユミは受付担当に待つよう指示されてエントランスで待つことにした。建物内は吹き抜けでやけに静かであった。

「…お待たせしました」

　サユミの前に一人の白衣を着た若い女性が現れ、彼女は研究センターの関係者のようであった。

「…あの、こちらの責任者の方にお会いしたいんですが…」

「…生憎、責任者の者は不在中でして…どういったご用件ですか？警察の方とお聞きしていますが…」

「…ある事件でこちらの研究所の名が出たのでお聴きしたいことが…責任者の代わりになる方がいらっしゃれば話をさせてもらいたいんですが…」

「……分かりました、少しの間でしたら…私が代わりに応対します」

「…あなたが？大丈夫なんですか？」

「ええ、これでもプロジェクトリーダー補佐です、留守の間、任されていますので…二階堂と申します、よろしく」

「……〇〇サユミです、よろしく」

　二階堂は二十代の若さで着々と出世していくほどの実力者で逞しかった。これがサユミと二階堂が初めて出会った瞬間であった。

「大事な話のようなので場所を変えましょう…」

　二階堂はそう言ってサユミを研究施設内へと案内した。エレベーターを降りると、ガラス張りの研究室がいくつも存在し、無数の監視カメラが設置されていて、セキュリティーは厳重であった。

「…この先は用意した白衣とカードキーが必要になります、部屋に入る際は、このカードキーを使って下さい、あと情報漏えい防止のために書類の記入をお願いします、規則ですのでご協力お願いします」

　サユミは指示に従い、二階堂に応接室へと案内された。

「…それではお話を伺いますので…」

「…はい、どうぞ」

「…こちらの研究センターですが、鵬東薬品という製薬会社と業務提携しているそうですね…？」

「…ええ、よく御存じですね、その件が何か関係あるんですか？」

「…実はある非合法な取引現場を目撃しまして…」

　サユミはそう言って、例の闇取引現場が撮られた写真を二階堂に見せた。

「…これが何なんですか？」

「…この写真に写っているのはまず謎の外国人組織で、他の取引相手は…鵬東薬品の社員と……ここの研究センターの研究員でした…」

「…え！！？」

　二階堂は、サユミの衝撃的な発言で返す言葉が見つからず、しばし混乱していた。

「私たちは闇取引の真相を暴くべく捜査を続けています…鵬東薬品とどういう事業をしているか教えて頂けないしょうか？」

「……そ…それはお教え出来ません！機密情報なので…申し訳ないですが…規則なので…」

「…そうですか、まあ仕方ないですね」

　サユミは研究センターの体質を知り、予想通りの返事が返って来たことでひとまず納得した。

「…あの、本当にうちの研究員なんですか？」

　サユミは、疑っている二階堂に証拠を見せようとした。それは拡大された画像であった。

「…これを見て下さい、はっきり映っているのが分かりますよね？彼はここのプロジェクトリーダー権藤芳雄でしょ？」

「……そんな！！」

　二階堂は権藤本人だと確認し、他にも見覚えがある研究員が写っているようで酷く動揺していた。サユミは、隙を見つけてゆっくりと二階堂を問い詰めようとしていた。

「…この権藤という方、いらっしゃいますか？」

「…い…いえ、権藤は現在仕事で全国を飛び回っています…しばらくこっちへは戻って来ません」

「…そうですか、彼には訊きたいことがたくさんあるんですが…」

「…待って下さい！何かの間違いです、権藤先生が犯罪組織とつながっているなんて…！」

「…残念ですが、鵬東薬品の社員と同じく捜査対象者です」

「…彼を逮捕する気ですか？」

「証拠不十分のため、まだ先になりそうですが…恐らく…捜査対象者は慎重に監視しています…ご理解下さい」

「…もう…何が何だか…」

「…お気持ちお察しします、今日はこれで失礼します、もし、権藤氏が戻ってきたら教えて下さい…また、何か話したいことがあれば…どんな些細なことでも構いません…連絡待っています」

「…はあ」

　サユミは、二階堂に名刺をそっと渡してから帰る準備をした。

「…ああ、そうだ、今回私が話したことは他の人に話さないようお願いします、極秘捜査なので…それではお忙しい中ありがとうございました…」

　サユミは、二階堂に深々と頭を下げて退室した。

「……」

　二階堂は、精神的苦痛を与えられ、立ち直るのに時間が掛かった。

　その夜、サユミは桜塚に捜査の現状報告をしていた。

「…成程、進展はあったようだけど、例の注入された薬のことはどうなったんだ？」

「そんな一遍に分かりませんよ、今日話した研究員に話しても仕方ないし…」

「…体に異常はないのか？問題が起きて手遅れにならなければいいけど…」

「今のところ大丈夫ですが…これは私の勘ですが、どうもあの研究所の権藤という研究者がカギを握っているように思うんですよ…」

「…彼に会うことは出来なかったんだな？」

「はい、出張中だったようで…ただ、応対してくれた二階堂という研究員の反応が気になって…彼と親密そうでした」

「…注意すべき人物が増えそうだな…角田も突然姿を消したそうだ…謎は深まるばかりだな…」

「ええ、何が起こるか予測出来ません」

「とりあえず今は大きな動きがない、安心して本業の方に集中していいよ…」

「ありがとうございます、明日も稽古なのでそろそろ寝ることにします…」

　サユミはしばし裏稼業のことを忘れて、本業の部隊の世界に力を注いだ。
　今回のサユミ率いる班が出演する公演は、歌劇団きっての超大作の再演ものであることから、力の入れ具合が半端ないものであった。架空の物語の設定だが、リアリティが求められ、舞台セットや衣装などは限りなく精巧で、独特な演出が見ものであった。サユミは何とも言えないプレッシャーを感じながら公演初日を迎えることとなった。劇場にはサユミのトップスター就任を喜ぶ熱烈なファンが多く駆けつけ、開演を楽しみに待っていた。そして、ついに幕が開かれ、サユミが颯爽と登場して、トップスターとしての実力が試されようとしていた。
　その結果、サユミは何の迷いもなく、与えられた役を演じ切って初日のトップお披露目公演を成功させた。こうして、彼女は歌劇団の歴史に堂々と名を刻むことが出来たのであった。舞台挨拶を終えて、幕が閉まり、サユミ率いる劇団員に休息の時間が与えられた。

「……！！？」

　その時、サユミは違和感を覚えて立ち止まった。気のせいだったのか問題はなかったようだが、彼女には密かに魔の手が迫っていた。
　また、思いもよらぬ凶報が届き、内容はサユミが気にしていた権藤の突然の死についてであった。彼は無残な姿で発見され、それが基となり、ある〝影〟が見え隠れしていた。

第二話　苦患と凶敵

　場所は兵庫県の閑静な住宅街、元歌劇団スターのアンジュが開設する診療所にサユミと二階堂愛美が訪れていた。サユミたちは大事な用件を済まして、アンジュの家で寛ぎながら雑談をして盛り上がっていた。話の内容はサユミたちが初めて出会った頃のことであった。

「…本当に愛美って、私と同じくらいの年だけど、しっかりしてるよね～今では研究所開発者のリーダーでしょう？」

「…まあそうだけど、出世したのはあなたのお陰よ、研究センターの不祥事が暴かれて、それがきっかけで新体制となったのよ、最近ようやく環境に慣れてきたわ……後からあなたが歌劇団のトップスターっていうことにも驚いたし…」

「…歌劇団や秘密警察の関係者以外の人とあまり深く関わることないから何か新鮮さを感じたわ」

「…確かにサユミと出会ってから、私の運命に変化が起こり始めたからね…まさかあの権藤先生が亡くなるなんて…さすがの私も冷静ではいられなかったわ…」

「…そうね、彼の死で追っている事件の手掛かりが途絶えそうになったから…」

　サユミと二階堂は、出会ったばかりの頃の衝撃の出来事がフラッシュバックで蘇り、話し合おうとした。
　二〇一四年、九月に入った頃、ある事件が起きた。都内のホテルの一室で男性客が遺体となって発見された。その遺体の身元が判明し、名は権藤芳雄 年齢は四十七歳。本部を頭に置く遺伝子科学総合研究センターの研究員で、プロジェクトリーダーを務めていた。何者かの手によって殺害されたようだが、手口は残虐で被害者である権藤は鋭利な刃物で刺され、口の中に無理やり黒い羽根のような物を押し込まれていた。権藤の金品が盗まれていたり、部屋中に黒羽根が散らばっているのは強盗事件に見せかけるカムフラージュだと分かり、担当刑事たちは猟奇的殺人事件として捜査を始めた。しかし、手掛かりは一切見つからず、犯人は少しも尻尾を出そうとしなかった。
　兵庫県　歌劇団大劇場
　サユミは、トップスター就任お披露目公演の真っ最中で、説明できない程の慌ただしい日々を送っていた。

「……！」

　サユミは公演中、裏稼業のことについては触れないようにしていたが、偶然にも楽屋に置かれた新聞を手に取ったことで、事態は変わろうとしていた。

「……権藤が死んだ……！？」

　サユミは担当していた事件に関わっていた人物の突然の死にとてつもない衝撃を覚えていた。

「……サユミどうしたの？」

「……え？何でもないよ…大丈夫、そろそろ出番だね～」

　サユミは同期の劇団員であるアヤコに声を掛けられて我に返った。彼女はひとまず権藤のことを忘れて、舞台の仕事に集中しようとしていた。

「……」

　その時、サユミのことを注意深く見ている者が居たが、彼女は一切気づいていなかった。
　そして時間は流れて、サユミはその日の公演を無事に終えて、何も余計なことを考えないまま家路に着こうとしていた。

「…♪」

　しかし、突然、サユミのスマートフォンに着信が入り、予期せぬ出来事に遭遇しようとしていた。

「…もしもし？」

　サユミは恐る恐る電話に出て、発信者を確認しようとした。

「…もしもし？あの…サユミさんですか？私です、先日お会いした二階堂です」

「……ああ、あの時の…女性研究員の方ね」

「はい、今お時間大丈夫ですか？」

「…自宅マンションの前に居るんだけど…自分の部屋に着いてから改めて掛け直すわ…履歴に残っている番号に掛けて大丈夫？」

「ええ、プライベートの携帯番号なので大丈夫です…」

　サユミは冷静に対応して、急いで自室に帰って行った。

「……それで用件は？……大体見当は付くけど……彼のこと？」

「……はい、まだ信じられなくて……先生が……権藤さんが死ぬなんて……！」

「…私も驚いて……何て言っていいか…お気の毒に……殺害されたようだけど…」

「……はい、学会が行われる日の前夜に事件が起きたようですが…誰がこんなことを…？絶対に許せない！」

　普段冷静な二階堂も怒りを露わにしていて、声だけで充分に彼女の感情が伝わっていた。

「…気持ちはよく分かるわ、でもまだ犯人は捕まりそうにない…権藤氏と会おうとしたのに…これで追っている件は難航しそうだわ…」

「彼を犯罪者扱いしているんですよね？」

「……いいえ、まだはっきりとしたことは…何か事情があったかもしれないし…それを本人から聴き出したかったのよ…あなたはどうして電話を…？」

「……権藤さんの件で研究所に警察関係者が訪れて色々と訊かれました…」

「…あなたは何て答えたの？」

「…何も知らないと…喋る気にもならないし…信用出来なくて…でもあなたは信用しています…」

「…嬉しいこと言ってくれるわね、それでこれからどうするの？」

「……私はただ真相が知りたいんです、彼は何をしていたのか、何に関わっていたのか…何故殺されないといけなかったのかを…協力してもらえますか？」

「勿論よ、仲間は多い方がいい、こちらも色々とお願いするかもしれないけど…」

「大丈夫です…電話やメールでやり取りするのではなく、直接会って話をしませんか？出来れば研究センターではなく、別の場所で…」

「…そうね、では時間と場所を指定するわ」

　こうして、サユミと二階堂は会う約束をして、〝闇〟に迫ろうとしていた。

　それから数日後、サユミは休演日を利用して二階堂と会おうとしていた。待ち合わせ場所に選んだのは兵庫県の六甲に位置する見晴らしがいいカフェであった。その店ではフレンチや創作料理、自家製スイーツが味わえて、おすすめスポットであり、サユミは常連であった。その日は天候に恵まれ、サユミは先に店に到着して、見晴らしがいい席でカフェオレを啜りながら二階堂を待っていた。

「…すみません、お待たせしちゃって…」

「いいのよ、こっちは行き慣れているから早く着いちゃったのよ…何か注文したら？ここのスイーツ美味しいよ～」

「…じゃあこのスイーツセットを…」

　サユミと二階堂は、軽い食事を楽しみながら徐々に本題に入ろうとした。

「……それで例の件のことだけど？何か有力な情報はあるの？」

「あの…偉そうなこと言って、大したこと知らないんです、何年か前まで権藤先生の下で仕事をしていましたが、突然チームを外されて関わる機会が減りましたから…」

「そう…最後に彼に会った時、様子はどうだった？どういう人物か教えてもらえる？」

「…権藤先生はどちらと言えば大人しい性格で何事にも真っ直ぐでした…でも面倒見がよくて大変お世話になりました…ただ…」

「ただ…？」

「ある時、彼の様子に変化が起こり、まるで別人のようでした…何かに憑りつかれたかのように…それで私はいつの間にかチームから外されていました…」

「…理由は分からないけど、彼の身に何か起きたのは間違いない…彼が関わっていた研究の内容は絶対言えないんだよね…？」

「ええ、何度も言いますが…それは機密情報なので…中でもうちの機関は秘密主義ですし…権藤先生の死は、今後の研究センターに影響しそうです…」

「…とにかく彼が関わった研究の情報がないと、前に進めないわ…何か別の方法があれば…」

「…どうしてそんなに権藤先生の研究にこだわるんですか？」

「…え？それは…」

　その時、サユミは二階堂を信用して、隠していることを全て打ち明けようとした。

二階堂はサユミの正体を知り、驚くばかりであったが、次第に打ち解けようとしていた。仲良くなったことで二階堂の対応は変わりつつあった。

「……変わった人だとは思ってましたけど、まさかスパイだったなんて…おまけに表の顔はあの歌劇団スター…まるで映画の世界ね…」

「…このことは口外しないように…あなたが所属する組織と一緒で、情報が洩れたら大変なことになるから…」

「…勿論約束します、それより気になるのは投与された謎の薬品ですよ、権藤先生が開発したものかどうか調べたいわけですね…その後、体に異常はないんですか？」

「…特に変わったことは…たまに目まいや動悸がする時があるけど、疲れからだと思うわ…」

　サユミが悩みを告白する中、二階堂は何か言いたげそうで、ある決断に踏み込もうとしていた。

「…あの、実は権藤先生が関わっていた研究の情報を入手する方法があります…」

「！…それは本当！？」

　サユミは、二階堂の予想外の発言で嬉しさのあまり飛び跳ねそうになった。

「…権藤先生の研究室に過去の研究データや資料が保管されているはずです…それを手に入れれば…」

「あなたは彼の研究室に入れるの？」

「研究施設のほとんどの部屋を利用することは可能ですが…権藤先生の研究室は別です、入れるのはセンター長や上層部の人間くらいで…」

「じゃあどうやって入手するの？」

　サユミが疑問を投げ掛ける中、二階堂は次なる提案を述べようとした。

「…これは危険な賭けですが、無許可で彼の研究室に入るしか手段がありません！」

「それって不法侵入じゃない！もし、バレたら…あなただって大変な目に遭うでしょう？」

「ええ、クビは確実かと…それだけで済めばいいですが…」

「あなたにそんな危険なことさせられないわ！……私の方が適任かも…」

「何言っているんですか？…そっちの方がリスク高いですよ、それに研究室はおろか部外者の場合、研究施設に忍び込むのも困難です…厳重に監視システムで守られているので…警察だろうと容赦しないでしょう…」

「…その監視システムってどうにかならないの…？」

「…ないことはないですが、本気で忍び込む気ですか？」

「ええ、一応専門業なんで…協力願うわ」

　こうして、サユミと二階堂はお互いの抱えている悩みを解決するために異色のコンビを組むこととなった。しかし、障害となる者が潜んでおり、彼女たちは作戦を実行する日まで気づくことはなった。

　権藤の研究室に侵入する日程が決まり、サユミはその日の前日まで本業である舞台の仕事に対して一心不乱に打ち込んだ。

「……！！？」

　サユミは、最近起こる目まいや動悸が疲れからの症状ではないことに気づきだし、悪化の一途を辿っていた。それでも彼女は、公演に穴を開けないことを第一に考えて一日も休むこともなくトップスターの貫録を見せた。

「……」

　サユミの体の異変に気付く者が一人居たが、敢えて声を掛けようとせず、そっと彼女を見守ろうとした。

　一方、秋晴れの日、二階堂は権藤の葬儀に参列していた。彼の葬儀は、家族や同僚だけを集めた密葬でしめやかに営まれた。

「…先生、ありがとうございました……ぶつぶつ…」

　二階堂は我慢出来ず、大粒の涙を流して、権藤にそっと感謝の意を述べて別れを告げた。これにて、権藤はサユミと二階堂を引き寄せて何も語らずこの世から去って行ったのであった。
　それから時は流れ、気づけば侵入作戦を実行する日の前日であった。

「……カタカタカタ」

　二階堂は自分のデスクに向かい、黙々とパソコン操作を行っていた。

「…随分熱心だね」

　二階堂に話し掛けたのは、彼女の上司でセンター長を務めている不動という男であった。彼は専用のパソコンの電源を切って帰り支度をしていた。

「待ってもらわなくて結構です…まだ仕事が残っているので…」

「…そうか、あまり無理はするなよ、コーヒーでも飲んでリラックスした方がいい、身が持たんぞ…」

「ありがとうございます、戸締りはちゃんとしとくので…」

「ではお先に失礼するよ……それにしても今日は何かと忙しかったな…訪ねて来た刑事の二人組、こそこそと鬱陶しいと思わなかったか…？」

「……そうですね、何か妙な感じがして…本当に警察の人間なんでしょうか？」

「…さてな、もし、またやって来たら追い返しても構わん…充分協力したし…気の毒だが権藤と何の関わりもない…」

「…分かっています、彼らのことは忘れます…お疲れ様でした」

「ああ、お疲れさん、また明日…」

　二階堂は上司と別れた後、自分で淹れたコーヒーを飲み干して作業を続けた。とは言っても、実際の仕事とは全く関係なかった。彼女はサユミとの約束を守り、権藤の研究室に侵入させるための策を密かに練っていた。そして、運命の糸をつなぐきっかけを作る一日目が始まろうとしていた。

　翌朝、陰謀が渦巻く遺伝子科学総合研究センター、朝の光を浴びて陰で嗅ぎまわる者を待ち構えていた。

「ブオオオオ…」

　朝早く、研究センターの地下駐車場に一台の商用車が駐車された。車内からは作業服を着た者たちが現れて、彼は清掃員のようであった。

「……」
　清掃員は、せっせと清掃道具を運んで担当している場所に向かおうとするが、一人不審な清掃員が居た。その正体はサユミであった。彼女は既に研究センター内に侵入しており、目的を果たすべく機会を狙っていた。　一方、二階堂は不動センター長の呼び出しを食らい、センター長室を出た後、持ち場近くのトイレに向かっていた。

「……」

　二階堂は個室に入って便座に腰を下ろした後、専用の携帯端末を取り出してメールの確認をしようとした。送信者はサユミであった。

〝準備は整った。そろそろ始めるわ〟

二階堂は深刻そうな顔で、黙々とタッチ操作をしていた。

〝ご要望通り、監視プログラムを上手く細工しておいたけど、そう長く持たないわ、せいぜい半時間程度くらいで、それが過ぎると警報が鳴って、警備がやって来るから注意して！〟

二階堂はサユミにメールの返事をして、個室から出ようとした。

「…！」
その時、二階堂に異変が起こり、彼女は急に意識を失った。

「……ガチャ」

それから数分後、二階堂がトイレから出てきたが、何となくぎこちなかった。

研究センター警備室

「……あれ？おかしいな…」

「どうした？」

「…はい、同も監視カメラの調子が悪くて…すぐフリーズするんです…」

「…定期的にメンテナンスしているから問題ないはずだが…」

「…全てのエリアではありません…第一研究所につながるエリアに設置されたカメラだけ不具合が…」

「…何だと？」

「…おまけに第一研究所全フロアの電気が起動しています…エラーでしょうか？」

「…何でもハイテク任せにするからだ…誤作動かどうか調べるんだ…」

警備の人間は研究施設の異変に気づき始めたが、既に遅く、サユミの侵入を許していた。

サユミは、全身を黒タイツで覆って権藤の研究室がある第一研究所に侵入しようとした。閉鎖

された第一研究所は、二階堂が監視プログラムを狂わせたことで無防備状態であった。

「…？」

　サユミは安心して第一研究所に踏み込もうとするが、ふと違和感を覚えていた。

彼女は嫌な予感がして、しばし先に進むことを躊躇したが、どうにか立ち直って二階堂に送ってもらった研究所の見取り図を頼りに着き進んで行った。

「…！！？」

　サユミは順調に権藤の研究所付近に到着しようとするが、嫌な予感は的中したようで、彼女の他に気配があった。

「……」

　サユミは、息を殺して権藤の研究室に向かって行き、室内で先客である人影を目撃した。彼女は警戒してすぐさま行動に移した。

「…ビュ！」

　その時、サユミは謎の侵入者に目がけて、愛用しているダガーナイフが放った。

「…！」

　謎の侵入者は、設置されたパソコンの画面を見つつ、手の指二本で、サユミの放ったナイフを押さえていた。あと一センチずれていれば、後頭部に串刺しであった。

「……！！」

　サユミは攻撃を防がれたことよりも、謎の侵入者の姿に驚いていた。

「……ここの関係者じゃないわよね？あなたは何者？ここに来た目的は？」

「……そちらこそ目的は何だ？変装までして……スパイさん？」

「…！」

　サユミは加工した声で喋りだし、さらに鋭い彼女は目の前の二階堂を偽物だと見破った。

　二人の間に火花が散り、激闘が繰り広げられようとしていた。先手を取ったのはサユミで、ダガーナイフを投げつけて、謎の侵入者の動きを封じた。謎の侵入者はサユミの巧みなナイフさばきを紙一重で避けていった。

「……ドギャ」

　　まだデータのコピーは途中のようで、謎の侵入者はパソコンから遠ざけようとサユミを思い切り廊下の方へと押し出した。

「…！！」

　　謎の侵入者は、お構いなく間合いを詰めて行って、サユミにナイフを放たれないよう接近戦に持ち込んだ。

「…ドゴドゴドゴ…バキ…！」

　謎の侵入者の反撃が開始され、サユミは押され気味であった。そのうち防御しきれず、謎の侵入者の強烈な蹴りがサユミに命中し、そのまま彼女は数メートル吹っ飛ばされた。

「……ぐ」

　サユミは、かなりダメージが残っているようで、体勢を整えるのに時間が掛かっていた。そんな不利な状況の中、謎の侵入者は、膝をついているサユミの覆面を掴んでそのまま脱がそうとしていた。

「…やめろ！」

　サユミの抵抗も虚しく、謎の侵入者に覆面を脱がされた。

「え？」

　謎の侵入者は、無理にサユミの顔を拝もうとしたが、彼女と顔を合わせた瞬間、何故か唖然として体が固まっていた。

「ヴォンヴォンヴォン……」

「！！」

　その時、警報音が所内に鳴り響いた。どうやら二階堂の仕掛けが時間切れのようで、謎の侵入者はそれで我に返り、謎の侵入者は覆面をすぐに被り直した。
　謎の侵入者は、作業を済ませた様子で直ちに脱出しようとしていた。サユミは研究所のデータを諦め、警備隊に追われる身となった。

「…ドガガガガ…ドン…ガガン…！」
　警備隊は自動小銃を装備しており、構わずサユミたちに発砲した。必死に攻撃をかわしていくサユミであったが、彼女は壁に何かを仕掛けた。それはプラスチック爆弾であった。

「ドガ！」

　壁が爆発した後、サユミはそのまま勢いをつけて爆発で開いた穴に飛び降りた。ただ、そこから地上まで三十メートル近くの高さがあるため、無事では済まないはずであった。

「…パシュ！」
　飛び降りたサユミは、自然落下で地面に着く前に何かを発射した。それは丈夫なワイヤーであった。ワイヤーの先端が適当な場所に突き刺さり、謎の侵入者は、遠心力でターザンのようにつた渡りして怪我なく地上に降りて、無事に研究所から脱出していた。一方、二階堂に変装した謎の侵入者は、別ルートを使って脱出しようとした。その日、遺伝子科学総合研究センターは騒然となり、事態の収拾がつかなかった。

　サユミたちの侵入作戦は失敗に終わり、騒動が起きた日の夜、失敗した件で口論していた。

「…どういうこと？私の他に侵入者が居たなんて…おまけに目的は一緒だった！」
「質問したいのはこっちの方よ！私なんか気づけば下着姿にされてトイレの個室に閉じ込められていたのよ、おまけに騒動を起こした犯人にされそうになるし…無実を証明するのにどれだけ苦労したか…誤解が解けてやっと解放されたわ…！」

「……確かにあなたに侵入していた…すぐに偽物だと見抜いたけど…目的は？」

「……第一研究所専用のカードキーでしょう…カードキーを持っていればセキュリティーは反応しない…私に変装した侵入者がセンター長にこっそり返したみたいだけどね…」

「…接触して一戦交えて分かったわ…相手はプロよ…まさか狙っている物が同じとはね…もう侵入することは不可能でしょう？」

「ええ、セキュリティーは強化されて、監視プログラムの内容は大幅に変更されるから同じ手は使えない…お手上げよ」

「……諦めきれないわ、私より先にデータを奪った奴の顔が見たいわ……何か手掛かりがあれば…」

「……そういえば！」

　二階堂はふと何かを思いだし、当然サユミは食いついた。

「…何かあったの？」

「…実は昨日、職場に訪ねて来た人たちが居てね…男女ペアで…刑事らしいんだけど…」

「それで何の用で来たの？」

「権藤先生殺害の件で聞き込みに来たみたいなんだけど…何か怪しいのよ…」

「どうして怪しいと？」

「…女性刑事がトイレに行ったんだけど、なかなか帰って来なくてね…心配になって様子を見に行くと、何故か彼女は第一研究所につながる出入り口の前に立っていたの…迷ったと言っていたけど、どうも嘘くさくて…彼らはもう二度と来ないと約束して帰って行ったけど…」

「…成程、その刑事たちの名前とか分かる？」

「分かるわよ、ちゃんと記入してもらったから…」

「顔が分かる物は？」

「うちの監視カメラに映った映像を静止画にした物ならあるけど、私が全て管理しているからね…あなたのもちゃんと取ってあるわ…」

「…悪いけど、その刑事たちの情報を送ってくれない？調べたいことがあるの…」

　サユミは謎の刑事たちに心当たりがあるようですぐに二階堂に情報を送ってもらった。それにより、事態は意外な方面に進展しようとしていた。
　それから数日後の早朝、サユミはパーカーのフードを深く被って、ある場所に向かっていた。それは兵庫県の閑静な住宅街に建てられたマンションであった。彼女はエントランスで部屋番号を入力して、一室の住人を呼び出そうとしていた。

「……突然すみません…これには事情が……話したいことがあるので、入れてもらえませんか？」

　サユミは何かを警戒して、小さな声で喋り、謎の住人は突然の訪問で機嫌が悪かったが、サユミの声に少し聞き覚えがあるようであった。

「……どうぞ」
　ひとまず、謎の住人はサユミの訪問を許してオートロックを解除したが、まだ完全に警戒が解けない様子で自室のチャイムが鳴った後、恐る恐るチェーンロックをしたまま扉を開けた。

「…あなた、何者？」

　謎の住人がそう尋ねると、サユミはフードをめくり上げ、ゆっくりと相手に顔を近づけた。

「…お早うございます」

「！」

　謎の住人はサユミの顔を見た途端、目が点になった。

「…こんな朝早くにお邪魔してすみません…」

「…どうしてあなたが…？」

　サユミと謎の住人は、顔見知りのようであった。

「…カチャ」
　謎の住人はチェーンロックを外して、辺りを気にしながらサユミを招き入れた。

「……それで用件は？」

謎の住人はサユミにカフェオレを勧めた後、ソファーに深く座って彼女の目をじっと見ながら訊ねた。

「お聴きしたいことがあります…早速ですが、数日前に神戸の遺伝子科学総合研究センターという所に行ったりしていますか？」

「…！」

その時、謎の住人はサユミの質問に驚いた様子であったが、心当たりがあるようで徐々に彼女と打ち解けようとした。

サユミが会った謎の住人の名は、彼女と同じ境遇の人物であった。名はリカ。歌劇団トップスターという表の顔を持ち、秘密警察という裏の顔を持っており、サユミの先輩であった。お互い同じ歌劇団に所属していながら共演したことがなく、特別企画のドラマが初共演となった。彼女は十五年以上、歌劇団に在籍して輝かしい経歴の持ち主で記念すべき百周年の年に退団を公式発表した。

サユミとリカはお互い違う標的を追っていたが、双方の任務に権藤が絡んでいることが分かり、運命の対面を果たすこととなった。

一方、東京の病院に入院している桜塚にも思わぬことが起こり、ある人物が彼の見舞いに訪れた。見舞いに訪れたのは、桜塚の同僚であり、旧友であり、さらに驚くことにリカの相棒であった。次第にお互いの相棒のことが話題となり、追っている事件も共通している点があることから、極秘の合同捜査が実行されようとしていた。

サユミは、リカから権藤の情報を提供してもらい、さらには追っている事件の裏で糸を引いている者が権藤だけではないことが判明した。

「……クァー…クァー…」

外から聴こえる鳴き声が気になり、リカがカーテンを開けると、衝撃的なことが起きていた。

「…ちょっと何？気持ち悪い…」

マンション上空には無数の鴉が飛んでおり、異様な光景であった。鴉の群れは、リカたちが居る場所を囲んで監視しているように見えた。さらに、今朝は大気が不安定のため、曇り空になっ

ており、上空は不気味さが増していた。

「…随分と鴉が多いわね、なんか不吉～」

　リカは呑気であったが、サユミは嫌な予感がして、顔色が悪くなっていた。

「……すみません、リカさん、カーテンを閉めてもらえませんか？」

「…ああ、そうね、こんなもの見ても仕方ないし…」

　リカたちは、鴉のことを忘れて話の続きをしようとした。鴉は、しばらくして散らばって去って行ったが、一羽だけ妙な鴉が紛れ込んでいた。その鴉をよく見ると、首に小型カメラが装着されていた。彼女たちは何者かに監視されていた。その謎の監視者こそサユミに謎の薬物を注入した張本人で、彼女たちに敵対する者であった。

　サユミはしつこく付き纏う謎の敵を〝鴉の眼〟と名付けた。

　その後、サユミは権藤が携わっていた研究内容を調べ上げ、謎の薬物が関与していることを二階堂に知らせた。

「……信じたくないけど、先生は天才を超えた異常者だったのね…」

　二階堂はかつての恩師、権藤がしていたことに驚愕するのと同時に多大なショックを受けていた。

「…色々と思うことがあって大変だと思うけど…あなたに頼みたいことがあるの…彼の研究データには注入された薬物の設計図らしきものがあるから、それを読み解いて…解毒剤を作ってほしいの…」

「ちょっと待って…！私にそんなこと出来ないわ…！！」

「あなたなら可能よ、優秀な頭脳を信じるわ…権藤氏が居ない今、あなたしか頼めないわ…お願い…！」

　サユミは二階堂に深々と頭を下げて必死に頼み込んだ。

「……分かったわ、やれるだけやってみる…体の状態はどうなの？」

「…今のところ、目まいや軽い頭痛、動悸が激しくなることが多々あって…嘔吐する時も…幸い舞台に立っている時は何ともないからいいけど…集中が途切れると体が不調になるわ…まるで自分の体じゃないみたい…」

「…そう、なら急がないとね、取り返しがつかない前に対策を練らないと…頼りないけど、任せて…」

「お願いするわ……それと…リカさんが迷惑を掛けて悪かったと…」

　サユミがそう言うと、ふと笑みを浮かべてリカのことを許したようであった。
こうして役者が揃い、一つの戦いが最終局面に向かおうとしていた。

第三話　麗人の適性

　サユミと二階堂は、アンジュの診療所で出会った時の思い出話で盛り上がり、そのエピソードも終盤に突入しようとしていた。

「……ところでリカさんは今、どうしているの？」

　二階堂は、しばらく会っていないリカを気に掛けてサユミに訊ねた。

「…さあ、私も長く会ってないから…確か去年の年末恒例イベントで共演した時が最後かな…退団されてから全然連絡取ってないわ…アンジュさんは知っています？彼女の居所を…」

「…分からないわ、私も長いこと音信不通だし…国内に居るかどうかも分からない…まあ彼女のことだから地球の何処かで元気にやっていると思うけど…」

「…そうですか、何事もなければいいんですが…リカさんもサユミと同じ災難に遭ったので…急に検査に来なくなったんで心配になりまして…」

　二階堂はリカに付き纏う問題が気になり、表情を曇らせた。

　二〇一四年、九月下旬

　サユミとリカが同盟を結んでから、数日経とうとしていた。某日、リカは本業の仕事場で聖地である歌劇団大劇場へと向かっていた。とはいっても、稽古場や舞台の上ではなく、観客席の方であった。彼女は周りのファンに注目されながら劇団員の仲間と指定された席に座り込み、観劇を楽しもうとしていた。彼女が観劇する公演はサユミが主演を務める公演で、その日は千秋楽の日であった。リカは偵察も兼ねて、彼女の公演を観劇に来たのであった。

　今回、彼女は人間ではなく、異世界の架空の生物、〝影〟を見事演じ切って、多くのファンから歓声が上がり、無事に千秋楽の幕を閉じたのであった。

「パチパチパチパチパチ…」
　リカは、サユミ率いる班の公演に満足して温かな拍手をしていたが、他に目的があるようで、閉演後、仲間と別れて姿を消したのであった。

　歌劇団楽屋フロア

「…お疲れ様でした～」

　公演に出演者たちは舞台メイクや落として衣装を脱いだ後、安堵の表情を浮かべながら挨拶をして続々と帰宅していった。

そんな中、サユミなど上級生数人はゆっくりと帰り支度をしていた。

「今日はお疲れ様～評判もいいし、これなら安心して東京に行けそうね～」
　サユミに声を掛けたのは先輩劇団員のミチコであった。

「…そうですね、本当に無事に終わって良かったです…」

「……何か体の調子悪そうね…ちょっと痩せたんじゃない？大丈夫？」

「…はい、何とか大丈夫です、風邪かと思うんで帰って休養します…」

「その方がいいけど、その割にはのんびりしているわね…まだ帰らないの？」

「…ええ、ちょっと野暮用がありまして…」

　その時、楽屋に接近する気配があり、サユミは即座に察知していた。

「サユミちゃ～ん！」

　楽屋の外からサユミを呼びかける者が居て、それはリカであった。

「あ、どうも、いらっしゃい～」
　リカが呼ぶと、ひょこっとサユミが顔を出した。

「…あら、お久しぶりね」

「！！…ご無沙汰しています、すみません、急に割り込んできちゃって…」

　リカは、先輩のミチコとばったり会って驚愕していた。

「…いいわよ、サユミちゃんに用事？珍しいツーショットね」

「ええ、まあ…」

「…最近調子はどう？次、サヨナラ公演よね？また才能ある人材が去って行くから寂しいわ…」

「…そんな、私なんか大したことないですよ、ミチコさんのような実力者が歌劇団に残ってくれて本当に助かってます…最後に一緒に舞台に立ちたかった…」

「…そうね、最後の舞台、絶対観に行くから…」

　ミチコは、軽くリカと会話して、先輩の気遣いで、席を立とうとした。

「…裏の仕事の方はどう？難航していると耳にするけど…」

「はい、結構手強くて…」

「……物騒な噂を聞くわ…私たちのような人間が狙われているみたい…注意しないとね…」

「…！」

　普段、穏やかなミチコの表情が一瞬険しくなり、リカの目が点になった。彼女は意味深なことを言い残し、その場を去って行った。

「…優しい人だけど、やっぱりベテラン…貫禄があるよね、とても敵わないわ…」

「ミチコさんから色々と教わりました、あの人の力でどれだけ助けられているか…」

「…ええ、敵になれば恐ろしいわ、私たちが裏で何をやっているか把握しているみたい…」

「はい、彼女は国内を問わず、世界各国の情勢に驚くほど詳しいですから…」

「へえ、そうなんだ……そろそろ本題に入りましょう、それでそっちの方は？彼女に会ったの？」

「ええ、コピーしたデータに目を通してもらいました、思った通り、食いついてくれて…」

　サユミとリカはお互い追っている事件の現状を報告して、情報交換を行っていた。気づけば時間は真夜中となり、話が一段落した後、サユミはリカと別れて家路へと急ごうとした。

　歌劇団大劇場付近は、月の光を浴びて何とも妖しく、まるでサユミたちが出演している公演の舞台が再現されているようであった。すっかり夜が更けて人気がなく、サユミは街灯や車のヘッドライトなどわずかな光が集まる空間を平然と歩いているが、彼女を監視する者が複数現れて静寂な雰囲気がかき消されようとしていた。

「……！！」

　その時、信号待ちしていたサユミは、妙な気配を感じとり、気づけば黒衣のマントを纏った不審者数人に囲まれていた。

「……！！！！」

　サユミは声を出したり抵抗する間もなく、不審者に拉致された。

「…しまった！」
　サユミは煙のように消えていったが、拉致現場を目撃した者が一人居て、それはミチコであった。彼女はサユミの担当する事件のことに興味を持ち、密かに監視していた。

「……私としたことが…仕掛けた発信器も当てにならないか…次なる手を考えないと…」

　ミチコは、困り果てた表情を浮かべたまま闇へと消えた。

　一方、リカにも魔の手が迫り、標的は大きく動こうとしていた。その夜、秘密警察である麗人たちは得体も知れない者に敗北した。

　拉致されたサユミは〝鴉の眼〟のもとへと運ばれて仲間の声は届かず、敵の手中に落ちた。

　サユミは〝鴉の眼〟に洗脳され、操り人形と化して、その時の記憶は全くなかった。
　その一方で、サユミたちが捜査している事件で衝撃の事実はいくつも明かされた。
　まず、事件のキーパーソンである権藤は、軍事関係者の要請で悪魔の事件に手を出していて、彼は実験のために何人もの罪なき人々を殺害していたのであった。そこまでして彼が開発したのは、神秘の薬であった。開発した薬品の名は、〝ルシフェル〟、投与すると、肉体はたちまち変異して究極の生命体に転生する危険な薬であった。そんな劇薬に適しているのは女性であり、驚くことにサユミたちが属している歌劇団員が一番適していた。よって、謎のベールに包まれた

宿敵の正体が判明することとなる。
〝鴉の眼〟は特に性別はないが、彼女と言っていいのか、経歴を調べると、転生する前はサユミたちと同じ歌劇団の一員であった。これから注目されるために舞台に立とうとした時に彼女は拉致されたのであった。華やかな人生を壊された彼女は、やがて悲劇のヒロインから殺人マシンへと変わっていき、ある野望を目論んでいた。

〝鴉の眼〟は生みの親である権藤や関係者に反逆して次々と彼らを殺害していった。自由の身となった〝鴉の眼〟は、同じ実験体となった者を集めて闇の組織を結成しようとして、強大な力を求めてサユミたちに目をつけたのであった。
　サユミとリカは〝鴉の眼〟に無理やり劇薬〝ルシフェル〟を投与され、その結果、変わり果てた姿に変異した。サユミは二メートルの大柄の化け物となって、同じく変異したリカと暴走して死闘を繰り広げたそうだが、彼女たちに変異した時の記憶は一切なかった。
　気づけばサユミとリカは、ミチコたち歌劇団メンバーに助けられてアンジュの診療所のベッドの上に居た。サユミは迷惑を掛けたことをリカに詫びようとしたが、彼女は広い心で包んですぐに許そうとした。〝鴉の眼〟はリカの手によって倒され、敵のアジトは地下奥深くに埋もれていき撲滅されたようでサユミは一息ついた。また、嬉しいニュースが続き、二階堂は権藤が開発した劇薬の効力を打ち消す解毒剤を完成させて、すぐさまサユミたちに提供しようとした。彼女たちは定期的にアンジュの診療所に通い、検査を受けて劇薬の力から解放されようとしていた。
　記憶のない死闘で負った傷が癒えたサユミは、休み暇なく主演を務める公演のために東京へと飛んだ。彼女はトラブルを起こさず公演を無事に成功させた。
　それから数日後、サユミは東京歌劇団劇場近辺の公園で人を待っていた。季節はすっかり秋めいて、紅葉が見ごろであった。
　サユミはしばらく秋の空気に酔いしれるが、そんな彼女の前に待ち人が現れた。

「…いやいや悪いね、待たせちゃって…」

　サユミの待ち人は、桜塚であった。

「…前に会った時も同じこと言ってましたね…もう体の方はいいんですか？」

「あれからどれだけ経っていると思っているんだ…？もう通院する必要ないし、全然問題ないよ、神経の方をやられて若干危なかったけど…そっちの問題は解決したのかい？」

「ええ、まあ……任務に就いた時は夏場でしたよね…本当に時が流れるのは早いわ」

「ああ、なんか不思議な数ヶ月間だったよ、僕はほとんど参加していなくて、事件を解決させた実感がないんだけど…」

「…私も同じこと思っています、一応、新聞やニュースで確認していますが…その後、あの事件はどうなりましたか？」

「ああ、進展があったから伝えておくよ、まず、うちが追っていた鵬東薬品に闇の取引のことで捜査のメスが入ったわけだが…叩けば埃が出る…急成長した企業は注意した方がいい…同じく関わっていた研究センターも上層部の横領が発覚してね…よって業務提携の件は白紙…この先は僕たちが踏み込むことじゃない…あと、外国の犯罪組織のことだが…」

「…えっと何でしたっけ？それ…」

「例の闇取引の買い手のことだよ、確かに色々とあって影が薄かった…一応報告しておこう、奴らは人身売買や麻薬密売で荒稼ぎしていて、活動拠点はアジア区域、最近では欧州まで活動範囲を広げようとして、国際指名手配されている、組織名は〝スキャリー・グレイン〟…」

「…鵬東薬品とはどういう繋がりが？」

「奴らに大人数の拉致を依頼して、拉致された者は皆、鵬東薬品が密売している劇薬の実験台となった…劇薬は〝スキャリー・グレイン〟がテロ組織やシンジケートに高値で売りさばく…何ともおぞましい契約だ…」

「…権藤氏が劇薬を開発し、鵬東薬品が闇ルートのパイプを作り、外国犯罪組織が闇市場を拡大していく…禁断のトライアングルの完成ってことですね…」

「…それも崩れることになる、劇薬の開発は廃止となり、〝スキャリー・グレイン〟はタイの空港で一味らしき人物を確保したため尋問して主犯格を引きずり出す…これで直に密売ルートが絶たれて闇マーケットは消滅されるわけだ…」

「…ひとまず一件落着ってことですか…」

「ああ、何か疑問点はあるかい？」

「…いいえ、問題ありません」

　サユミは桜塚の報告に対し、納得した表情を浮かべたがそれは表向きであった。本心は腑に落ちない様子で気づけば全て終わっており、いつに間にか着地地点に降り立った感じで達成感がないようであった。

「…忙しい時に付き合わせて悪かった、もう本業の方に専念して大丈夫だよ…」

「別に気を遣わなくていいですよ、本業もようやく落ち着いて、どちらかというと今は暇なんです…あとは年末恒例のイベントに出演するくらいで…」

「…ああ、歌劇団のほとんどが出演する大きなイベントだね…確かリカ…さんだったかな…同僚から聴いたんだけど…彼女、来年に退団するそうだね…」

「ええ、もう出演するのが最後になるので張り切ってらっしゃいますよ～」

「今回は異例だけど、別の班に色々と協力してもらった…リカさんに礼を言っといてくれないか？」

「ええ、ちゃんと伝えておきます」

「…報告は以上だ、お疲れさん……」

「……？…どうしました？」

　桜塚は何か言いたげそうな表情を浮かべており、サユミは気になっていた。

「…すまない、一つ引っ掛かることがあってね…君に言うか言わないか迷っているんだ…」

「……何なんですか、気になります、放してもらえませんか…？」

「…ああ、分かった、確かな情報じゃないから楽にして聞いてもらったらいい…例の劇薬の実験で多くの罪なき人々が犠牲になったわけだが、その実験台を集めるのに……君が所属する歌劇団上層部が加担していたそうだ…」

「……！！！！！？？？？」

　サユミは、桜塚の衝撃的な発言に驚愕して、大きく口が開いたままであった。

「…これはあくまで噂だから忘れてもらっても結構だ、真実を追求するのに時間が掛かりそうだしね…嫌な思いをさせて悪かった…それじゃあ失礼するよ…」
　桜塚は先に鮮やかな紅葉散る公園を去って行き、それからしばらくして我に返ったサユミはそ

の場を後にした。
　これでサユミと二階堂の思い出話は一応、幕を閉じようとした。

　アンジュの診療所兼住居

「……本当に去年は内容が濃い年だったわ、サユミにリカさん、アンジュさんに出会って人生観が変わったんだから…あと、権藤先生のことも衝撃的だったわ…」

　サユミとアンジュは二階堂の気持ちに同情して、しばし亡くなった権藤へ黙とうした。

「……さて、そろそろお暇しますか、色々と予定があるし…」

「…サユミちゃん、その細い体でよく頑張るわね～何か海外公演が決まったって聴いたけど…」

「…そうなんです！もうびっくりしちゃって…前回、先輩のチエさんが行った公演がとても評判よくて、再度、オファーがあったようです」

「もう大抜擢ね、絶対成功すると思うわ！」

「ありがとうございます…でもその前にやらないといけないことがあって…」

「それは何なの？」

「…副業の方なんですが、不定期で秘密警察の適性試験があるんです…」

「そういえばそんなのあったわね…確かリカや秘密警察やっていた劇団仲間から聴いたことがある…目的は秘密警察要員としての能力が著しく低下していないか調査するため…そうよね？」

「ええ、通知が来たので、ちゃんと受けないと…」

「…あの、もし、その試験を受けなかったり、不合格みたいなことになったらどうなるの…？」

　二階堂は、サユミたちの会話に興味を持って素朴な質問をした。

「…病気や身内の不幸など諸事情の場合だけ欠席することが認められ、また改めて試験日を設けるわ……試験を受けて不合格になった場合だけど、秘密警察のライセンスが剥奪される…つまりクビ…」

「…成程、結構ちゃんとしているのね…でもいいじゃないの、危険な仕事だし、副業なんだから清々するんじゃないの？」

　二階堂は軽く冗談を言ったつもりであったが、サユミたちは硬い表情のままであった。話にはまだ続きがあるようであった。

「……確かに秘密警察を辞めることになれば気が楽になるかもしれないけど…それだけで済まない……歌劇団も退団しないといけないわ…！」

「……え？そんな……！！」

　二階堂は、サユミの発言にただただ驚いていた。

「……それもリカから聴いた、そういう契約なんでしょう？徴兵制度みたいなものね…秘密警察要員に選ばれた劇団員に裏稼業を断る権利がなく、強制的で…リカは志願したそうだけど…あなたも…？」

「ええ、断れば歌劇団を辞めさせられるので…全ては本業のためです…！」

「…どう考えても汚いやり方だわ！よくそんな組織に従っているわね…」

「秘密警察側も歌劇団側もいい人ばかりよ、いざという時、しっかりと守ってくれるしね…環境に慣れればどうってことないわ…歴代のＯＧも経験してきたことだから…」

「…まるで運命共同体ね、その適性試験に落ちて歌劇団を去った人とか大勢居るんじゃない？」

「…そうね、気づけば同期のメンバーが減っていることがあったわ…でもそれも運命…そういう世界なの…自分の力量の無さが要因よ…だから私やリカさん、歌劇団員は常に必死なの…今の環境に適していなければ用済み、お払い箱…かと言って歌劇団上層部と警察組織を恨んだことはないわ」

　二階堂は、サユミの話を聞いて改めて別の世界で生きる者だと感じた。彼女は、サユミたちが所属する組織に洗脳されていないことが分かり、反論することなく表情を緩めた。

「…さて、これから頑張らないとね、公園の他にもやることがたくさんあるから…」

「…まあそう力まず、たまには息抜きしたら？うちにはいつでも遊びに来たらいいからさ～」

「ありがとう、アンジュさん！」

「もう検査を受ける必要はないわ…例の劇薬の力に怯えることはない、リカさんも恐らく大丈夫でしょう、良かったわね」

「…愛美、あなたのお陰よ、どれだけ助けられたか…このお返しは必ず…」

「そんなのいいのよ、今はバタバタしていて行けないけど…そのうち公演を観に行くからね…」

　サユミと二階堂は友情の証として抱き合ってお互いを信じ、それぞれの道に進もうとした。

　こうして、サユミたちは新たな気持ちで生きていこうとしていたが、それを阻む者が現れようとして、忌まわしい過去に翻弄されようとしていた。

　それから時が流れ、二〇一五年五月某日。

　サユミは東京公演を控え、稽古の合間にある場所へ呼び出された。そこは都内に位置する雑居ビルであった。中に入ると人影がなく、殺伐とした感じであったが、彼女は少しも動じず足を踏み入れた。

「…チン」

　サユミを乗せたエレベーターは、地下二階に辿り着き、降りると人気があり、そこは打ち放しコンクリートの壁の簡易オフィスのようであった。

「すみません、適性試験を受けに来たんですが…」

　サユミは受付の女性に用件を伝えて、ロビーで待つよう指示された。

「…お待たせしました、こちらにどうぞ」

　サユミの前にスーツを身に纏った男が現れて、彼女は彼に案内された。

「…これに着替えるんですか？」

「ええ、更衣室でそれに着替えた後、中央の受付センターに行って下さい、まず体力テストから始めますので…」

　サユミは用意されたジャージに着替えて適性試験を受けようとした。

「ではこちらの指示通りに試験を受けてもらいます…」

　サユミは白衣を着た試験官に囲まれながら試験を受けることとなった。彼女は順に筋力、持久力、瞬発力を調べられて、最後は特別試験であった。

「それではこちらに…」

　サユミは、試験官の指示で無人の個室に入室した。室内は無駄な物が一切置かれておらず、殺風景であった。

「…棚に入っているヘルメットを被って銃一丁を構えて下さい…」

「…！！」
　サユミが居る部屋にアナウンスが流れて指示通りにすると、その直後に変化が起こった。室内は廃墟のビル街の風景に変わり、それは精巧な仮想空間であった。

「…あなた一人で敵のアジトに侵入したという設定です、具体的な任務内容は教えられません…とりあえず目的地を示すレーダーが備え付けられているのでそこに向かって下さい…あなたの意思や行動で状況が変化するので注意して遂行するよう心掛けて…制限時間は一時間…では後程…」

　サユミは実戦に近い任務シミュレーションを受けることとなり、身を引き締めて挑もうとした。

「……こういうの久し振りだな～」

　サユミは、独り言を言って五感を働かせながら侵入しようとした。

「…パシュ…パシュ…！」

　サユミは、一階で見張りをしている覆面戦士をサイレンサー（消音装置）付きの銃で倒していき、順調に上の階へと進もうとした。空間は二階フロアに切り替わり、サユミはゲームを楽し

むかのようにして歩を進めた。

「……！」

　サユミは敵の気配に気づき、瞬時に物陰に隠れて息を潜めた。

「…がば！」

　サユミは接近してくる覆面戦士に襲い掛かり、武器を使わず気を失わせた。奥には多くの敵が潜んでいて、こっそりと徐に敵を倒していくのは不可能だと悟り、彼女は強行突破を余儀なくした。

「……バタバタバタ」

　やがて、サユミがアジトに侵入していることが敵にばれてその場は一気に物々しくなった。

「…ドババババ…ドンドンドドン！！」

　サユミは敵に見つかり、一目散に銃弾の雨を掻い潜り目的地へと向かおうとした。悪戦苦闘しつつも、彼女は制限時間を気にしつつ、どうにか目的地の最上階に辿り着いた。

「……」

　サユミは、全神経を集中させて最上階フロアに足を踏み入れたが、そこはやけに静かであった。

「……よく来たな、褒めてやろう」

　サユミに謎の声が届き、それと同時に数人の覆面戦士が姿を現した。

「…ここがラストステージってわけね」

「…ああ、そうだ、待ちわびたよ」

　サユミの前に三つの人影があり、月光が彼らを照らした。

「……！！！？」

　サユミは、目の前に現れた人物を見て様子が一変した。それもそのはずで彼女は人質を取られており、その人物はサユミが所属している歌劇団の最高責任者の理事長であった。理事長は、リーダー格の側近に銃を突きつけられていた。

「……分かっていると思うが、余計な真似をすれば、おたくのボスは死ぬことになる」

　サユミは動揺が隠せず、判断力が鈍りそうになった。

「よくもまあ…こんなこと考えるね～」

「さあどうする？一人仕留めたところで無駄なことだ、そっちは一瞬で体が蜂の巣のようになるし、人質も死ぬことになる、いい案は浮かばないだろう…ふふ」

　リーダー格の覆面戦士は余裕の態度を取って、勝利を確信して嘲笑った。

「……」

　　サユミは言い返そうとせず、黙って何か考えているようであった。

「…！？」

　その時、リーダー格の覆面戦士はサユミの思いがけない行動を目にして、表情が強張った。

「…チャキ」

　サユミは何のためらいもなくリーダー格の覆面戦士に銃を向けた。

「…私を殺そうというのか？何の解決にもならないぞ…いいの……！！！」

「……ドン！」

　その時、銃声が鳴り響き、一人の人物が静かに倒れた。

「……あが……あ…ぐあ！」

「……な……何故…撃った！？」

　リーダー格の覆面戦士は、思わずサユミに声を荒立てた。部下の覆面戦士たちはリーダーの命令通りにしようと動くが、それは既に遅かった。

「ドンドンドンドドド…！！」

「……うーん、先輩たちのようにはいかないか…やっぱりナイフの方がいいわね」

　サユミは不満げな様子であったが、華麗な銃さばきを見せつけて、弾は全ての敵に命中していた。彼女は敵を沈黙させた後、倒れ込んだ理事長の元へと急いだ。

「…大丈夫ですか？」

「……ああ、ありがとう…急なことで驚いたが…意外と大胆なことをするな…」

　サユミは理事長の足を狙って撃ったため、彼の命に別状はなかった。これにより、理事長を救出されたことが確認され、サユミはほっとした様子であった。最後に倒した覆面戦士の姿が映像で流れて、よく見ると覆面が脱がされて素顔が映し出されていた。

「…？…そんな！！！」

　サユミは覆面戦士の素顔を見た途端、背筋が凍っていた。それは理事長が人質となっていることより衝撃的なことであった。

サユミが倒した覆面戦士は皆、彼女が率いる班の歌劇団のメンバーであった。

「……」

　サユミは気が動転して、しばらく頭の中が真っ白となった。

「……ヴン…」

　気づけば、サユミの任務シミュレーションの制限時間が過ぎており、仮想映像は消えて元の個室に戻っていた。

「…お疲れ様でした、ヘルメットと銃を返してから部屋を出て下さい…」

　サユミは、無表情のまま個室を出た。彼女の前に一人の男性試験官が立っており、彼はサユミに次なる指示を出そうとしていた。

「…これで体力テストの方は終了となります、今から一時間休憩を取ってもらい、午後から筆記、心理テストの方を受けてもらいます…何か質問ありますか？」

「…さっきのシミュレーションで訊きたいことが…意図は何です？」

　サユミは受けた試験に納得出来ないことがあり、感情的になっていた。

「…意図ですか？…やはり気になりますか？」

　試験官はサユミの表情を見て、彼女が何を思っているか大体察していた。

「…なかなか酷な演出ですね、遂行しても後味が悪かったですよ…」

　サユミは、礼儀正しい口調で話すが、言葉に棘が見え隠れしていた。

「…はは、受験者のほとんどはあなたと同じことを言いますよ、確かに正論です、普通なら考えられないことです…」

「…あの任務の具体的な内容は？」

「…特例の任務…いわば内輪もめです、あなたたちが属する組織内で反乱が起こり、過半数の秘密警察である劇団員が寝返ったという筋書きです…特に深い意味はありませんが…これも適正を調べるためです」

「…私がした行為は正解なんですか？」

「合否はまだ言えません……それに正しい答えなんてありませんし…あなたが正しいと思ったらそれでいいかと思いますよ…まあ結果は楽しみにしといて下さい～」

　試験官は、サユミの質問に対して丁重に対応した。サユミは試験官の返答に納得した様子でそのまま休憩を取ろうとした。

　試験会場には無料のセルフ食堂が用意されており、サユミはそこで昼食を取ろうとしていた。

「…和食にしようかな～」

　サユミはご飯や味噌汁、自分の好きなおかずを並べていき、空いている席に座ろうとした。

「あれ～？サユミじゃないの～」

　サユミは誰かに呼び止められて、振り向くと一人の女性が立っていた。

「…あ…どうも、何でここに？」

「適性試験を受けに来たに決まっているでしょう、あなたもそうでしょ？」

「はい…私の他にも受けている人居たんですね～」

「そんなの当たり前よ～何十人も受けているみたいよ、時間をずらして受けているみたいよ、さっき、知っている顔数人とすれ違ったし…」

「そうでしたか…一緒に食事していいですか？」

「いいよ、座りな…こっちはやっと試験が終わってね、帰る前にお腹の中を満たそうと思ってね…」

　サユミと偶然出会ったのは、彼女の一年先輩であるアスカであった。注目の歌劇団スターでリカの後任として、トップスターを引き継いだ。彼女はサユミよりポジティブな性格で、裏の世界でも幅広く名が知れ渡っている実力派である。ただ、チャラい一面がある。サユミとは別の班で舞台の共演はないが、雑誌の企画での共演をきっかけに彼女と親しい関係となった。

「…へえ、もう終わったんですか、それで自信のほどはどうですか？」

「…さあね～そんなの分かんないよ、朝早くから始めるからくたびれたわ～もう何をしたか忘れそうよ～あんたはあと何が残っているの？」

「…えっと、体力テストを終えて、午後から筆記と心理テストを受けます」

「いいな～私は筆記テストが先だったから参ったわ～体力テストの方は自信があるけど…」

「私も筆記試験は自信が無くて…学生時代を思い出しますね～」

「…まあ頑張りなよ、たまに違う頭を使うのもいいんじゃない…？」

「そうですね……あの…」

「え？何…？」

　サユミは、アスカにある問題を投げ掛けようとした。

「試験のことです、特別試験のことで訊きたいことが…」

「ああ、あのシミュレーションの…結構楽しめたけど…どうしたの？」

「……最後はどんな対処をしたか知りたいんです…」

　サユミが率直な質問を述べると、アスカはうっすらと表情を一変させて、素直に答えようとした。

「……試験に関する情報を交換することは固く禁じられているわ…詳しくは言えないけど、間違ったことはしていないと思う、私たちは特殊な世界で生きているんだから…私も他の受験者もあんたと同じことをして同じことを感じたと思う…」

　アスカが述べたことは説得力があり、サユミは反論せず、何事もなかったかのように食事を続けた。サユミは、アスカと雑談して余計な緊張を吹き飛ばして午後からの試験を受けようとした。

　サユミは個室に連れて行かれた。室内はさほど広くなく、一人分の机と椅子が用意されて、壁一面には小窓があり、まるで警察の取り調べ室のようであった。やがて試験開始時刻となり、サユミは自分の席に着いて、用意された答案用紙に記入しようとした。試験内容は小中高の基本問題と一般常識であった。サユミは少々頭を抱えながらも用紙に記入していき、制限時間が訪れると係りの者が彼女の答案用紙を回収しようとした。

「…次に心理テストを行いますので、そのまま着席しといて下さい…お手洗いの方は大丈夫ですか？」

「…ええ、大丈夫です」

　サユミが居る個室にアナウンスが流れて、彼女は素直に従って待機した。

「それでは心理テストを始めます…」

　アナウンスが流れた後、サユミが居る個室は照明が落とされて設置されたプロジェクターが作動した。

「…どうも今日は、私が心理テストを担当する剣崎です、よろしく…」

　プロジェクターが映し出した一人の中年男性は、心理学専門の教授であった。彼の仕事場からリアルタイムで映像が送られて、それを立体映像で映し出していた。

「……あなたが問題を出すんですか？あまり難しいのは止めて下さいね、脳が疲れるんで…」

「…はは、ご心配なく、簡単な連想ゲームですよ、私が言った言葉に対して即答で連想した言葉を答えてくれたらいい…いいですか？例えば〝春〟と言えば〝桜〟というような感じで…ご理解頂けたかな？」

「ええ、始めて下さい…」

　サユミは安堵の表情を浮かべて心理テストを受けようとした。

「問一〝舞台〟」

「〝自分を表現する場所〟」

「問二〝潜入〟」

「〝使命〟」

「問三〝ナイフ〟」

「〝得物〟」

「問四〝花畑〟」

「〝癒し〟」

「問五〝トップスター〟」

「〝目標達成〟」

「問六〝休暇〟」

「〝願望〟」

「問七……」

　サユミは、剣崎教授の述べた言葉に対して躊躇せず連想した言葉を言い放った。気づけば最終問題であった。

「問一〇一〝鴉〟」

「……！」

　それまで淡々と質問に答えてきたサユミであったが、様子が一変して言葉を出すのを拒んだ。

「…どうされた？〝鴉〟ですが…」

「……不吉の塊……」

　サユミは、しばし考え込んで答えを絞り出した。

「…これで連想ゲームは終わりです、次の質問に移ります…」

「え？…まだあるんですか？」

「ああ、疲れたかい？ちょっと一服でもするかね？」

「…いいえ、続けて下さい」

「それでは、次は私の言ったことに対して意見を述べてもらう…特に正解はないので、連想ゲームの時と同じように気を楽にして素直に話してほしい…よろしいかな？」

「…はい、分かりました」

「……では始める、もし、君の所属する組織が何者かに乗っ取られて、大事な仲間全員が寝返ったらどうする…？」

「……！！」

　サユミは、剣崎教授の質問で心拍数が上がっていた。

「…少し時間をあげよう、頭の中で整理してはっきりと真面目に答えるんだ……」

　サユミは、剣崎教授の言われた通りにして集中して考え込んだ。彼女は剣崎教授とマンツーマンで試験を受けているようであったが、実は密かに彼女たちを監視する者が居た。個室の小窓はマジックミラーになっていて、数人の試験官がサユミが述べた言葉を記録して分析していた。
また、試験官の他にサユミが所属する歌劇団側と秘密警察側の上層部の人間が視察に訪れていた。

　それから半時間経ち、サユミの適性試験が無事に終わろうとしていた。彼女は帰り支度をして試験会場を後にした。

「…ふう～やっと解放された～」

　サユミは外に出た途端、独り言をこぼし、そのまま家路を急いだ。空を見ると夕日が沈みかけていて、彼女にとって長い一日となった。サユミが受けた試験の結果が分かるのは約一ヶ月後で、丁度、彼女の東京公演が終わった後であった。これは余談であるが、サユミは歌劇団の入団を決めた際、両親に猛反対されたらしく、それでショックを受けて寝込んだようである。その後、入団の許しを得て、サユミはすぐに実力を買われ、着々と経験を積んで念願のトップスターの椅子を手に入れた。今では入団を反対した両親が最高のファンとなり、喜んで娘の公演を観劇していた。現在、サユミは充実期に達していて、秘密警察のことは気にならないが、歌劇団を退団は考えられないことであった。彼女は試験が合格していることを切に願っていた。

第四話　因縁と宿敵の影

二〇一五年　六月中旬　都内某所

サユミは一ヶ月間の東京公演を無事に終えたが、彼女に休み暇はなかった。舞台とは別に仕事があり、早速その準備に取り掛かろうとしていた。

今や歌劇団の活躍の場は舞台の上だけではなく、テレビやネットの世界と活動範囲を広げて知名度を上げている。歌や演技の基礎が出来ていることから舞台以外の仕事も多々ある。特にトップスターに関しては色々なプロジェクトが実行されていた。歌劇団スターが一般のアーティストのようにＭＶ（ミュージックビデオ）を撮影することとなり、それがＤＶＤで販売され、熱烈なファンにとっては永久保存のものに違いなかった。

サユミはＭＶや彼女の魅力、歴史などが収録されたＤＶＤボックスを完成させるべく、積極的に参加していた。どういったテーマのＭＶにするか念入りに打ち合わせしていき、彼女のスケジュールが組まれてレコーディング、ダンス振り付けが行われた。当初、歌劇団とは違う環境に戸惑うサユミであったが、徐々に慣れていって自らのオリジナルＤＶＤを完成させようとした。彼女が歌劇団のトップスターに就任してから一年経とうとしているが落ち着く暇はなく、今夏は過酷な日々を過ごすこととなった。

ちなみに、サユミはハワイが好きで、長い休暇が取れた場合、そこに劇団仲間を連れて、癒しの旅へと向かう。しかし、トップ就任後はちゃんと休みが取れず、大幅に生活習慣が変わり、当分の間、ハワイで羽を伸ばすことは叶いそうになかった。

ＭＶの撮影は専用のスタジオで予定通り行われるが、夏の太陽光が撮影場所に射し込んで、おまけに粗油名器具を大量に使ったことで異常なほど眩しく、ほとんど炎天下の外と変わらなかった。そんな中、サユミだけでなく、周りのスタッフも滝のように汗を掻きながら、どうにか彼女の華麗でスタイリッシュなダンスシーンを撮り終えた。

サユミは、若手の頃から定評のある歌唱力を持っており、ＤＶＤには彼女がカバー曲として歌った流行りのＪポップや海外の曲が収録されており、メイキング映像の他、ファンが好む彼女が今まで出演した作品の舞台映像も収められており、お得感が倍増されることとなる。

サユミのＭＶは着々と形になっていき、短期間の過密スケジュールの中、ついに全てのレコーディング、撮影が無事に終了しようとしていた。彼女は自分のＭＶに関わったスタッフたちの温かい拍手を浴びて、ほっとした様子であった。

サユミは作り手たちの熱意を感じて、感極まったまま一つの仕事を終えて、その場を後にしたのであった。これから少し休みたいところだが、今のサユミにそのような時間は設けられそうになかった。彼女には二つの顔があり、裏では秘密警察の密偵として日々活躍している。そろそろ

不定期で行われた秘密警察の適性試験の結果が知らされることとなり、今後の人生が懸かっているため、とても落ち着いてはいられなかった。

　ある日、サユミは東京の歌劇団劇場から近い公園へと訪れた。彼女はあまりの暑さに耐えられず、木陰にあるベンチに座って人を待っていた。

「…ごめん、ごめん、待たせちゃって、うちのボスの愚痴しつこくてね…」

　サユミの前に現れたのは、裏稼業の相棒である桜塚であった。

「別にいいですよ、たいして待ってないんで……結果出たんですよね？」

「…ああ、ボスは忙しいので僕が代わりに伝えることになった…勿論、覚悟は出来ているよね？」

「ええ、どうぞ…」

　桜塚は、サユミが受けた適性試験の結果が記された書類を持っており、緊張で顔が強張っている彼女の傍にそっと座った。

「…では内容を読み上げるよ、試験についての分析結果が記されている…あなたは安全性、計画性を重視した慎重派でそんな自分に不満がないように見えて、実は少しずつの環境の変化を求めている…周りの目を気にして決断に時間が掛かってしまう優柔不断であることが判明…ただ、気配りを大事にしている一方で、頑固な面もあり、いざという時に自分の意見を通そうとする場合がある…とのことだ」

「…それはつまり？」

　サユミは、鼓動の高まりを訴えながら桜塚に訊ねた。

「……精神的にはいくつか問題点、未熟な面が見受けられるが、それは当然のこと…君は感情の無い精密なマシンではない、赤い血が通った人間だ…全く違う二つの世界で生きている割にはメンタルが強い方だ、満点とは言えないが、総合すると平均点以上…つまり……合格だ…！」

「…！！！」

　サユミの強張った表情は、桜塚からの吉報を耳にしたことで和らいでいった。彼女は嬉しさの

あまり、ここで大声を上げて飛び跳ねたかったが、どうにかその気持ちを押し殺した。

「…おめでとう、これで本業も継続ということになる…改めてよろしく頼むよ」

「こちらこそよろしくお願いします！」

「…自信はあった？」

「…あまり自信がなかったんですが…でも桜塚さんが伝えに来ると聞いた時に少し緊張がほぐれて…それにこの公園はよく待ち合わせする場所だし…安心していたかも…」

「…実は、僕も君に知らせるまで結果を知らなくてね…でも予想通りだった…本当に良かった……」

「…ちなみに今日、私の星座が一位だったんですよ、それで気分が良くて…」

「…そうか、思惑通りということか…本業の方は順調かい？」

「ええ、やっと落ち着いてきまして…」

「……丁度良かった、早速だがこっちの仕事に就いてほしいだけど…大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫です、久しぶりの任務ですね、何なりとお申し付け下さい！」

「よし…それじゃあ内容を伝えよう…」

　桜塚は、サユミの適性試験の結果が記された資料を鞄に入れて、新たに別の資料が入った封筒を取り出そうとした。

「…厄介な件ですか？」

「…さて、どうだろうね、まだ捜査を始めたばかりでね…情報を集めている最中なんだ…まあ集まった分だけ目を通しておいてくれ…」

　桜塚はそう言ってサユミに添付された写真数枚を渡した。

「…これ、何処ですか？随分と山奥みたいですけど…立派な山荘が建っていますね」

「…関東近郊の山岳地帯だよ、衛星からも撮影したが、山荘は何件もあって、広大な土地を所有しているようだ…謎の施設も発見されて、どうも怪しい雰囲気だ…」

「…どういった場所なんですか？」

「慈善団体が使用しているようだ、施設は新しく、今年の春から本格的に活動しているようだ…表向きは災害支援、貧困者の救済などチャリティ活動を行っているが、ある疑惑が持ち上がったんだ…」

「…その疑惑とは？」

　サユミが訊ねると、桜塚はまた別の写真をそっと見せようとした。

「三週間前に都内で銀行強盗事件があってね、銃器や爆薬を使うなど、日本にしては珍しい大胆な犯行だった…」

「…そういえばそんな事件ありましたね、犯人はまだ捕まっていないですよね？」

「ああ、しかも同じような事件が全国各地で起こっていて、現在の被害総額は十億円を超えようとしている…」

「その強盗事件とどういった関係が？」

「…捜査しているうちにあることが判明してね…強盗の犯人の中に例の慈善団体のメンバーが居るという情報が入った…！」

「…そんな…確かな情報なんですか？」

「まだはっきりしたことは分からない…徹底的な証拠がないんでね…捜査一課と地方警察と合同で捜査をしているところだ…」

「慈善団体は何と？」

「何度か訪ねたが、一切関与していないと一点張りで捜査に協力してくれそうにない、だからといって諦めたわけじゃないが…うちの班はまだマークしている…」

「桜塚さんはこの慈善団体のことをどう思っているんですか？」

「慈善団体…社会的な貢献を目的にしている団体と聞こえがいいが、実際は怪しい影が見え隠れしていてね……寄付金もどのようにして集められたか分からないケースがあるし、どうやって組織力を高めていったかも不明等、危ない匂いが漂う団体があってね…」

「犯罪に手を染めている団体が多いんですか？」

「…勿論ちゃんとした団体も多いが、危険視されるのも増えてきてね…慈善とはそもそも宗教的なものが取り入れられていて、悪しき集団に変貌する恐れがあったりする…つまりカルト教団だ…」

「カルト教団…！」

「二十年前に起きた都内地下鉄バイオテロ事件のことは知っているかい？」

「……はい、その時、私は小学生でした、よく報道番組で取り上げられていたのを覚えています…」

「…前代未聞の事件だったからね、化学薬品を利用して大量殺戮をするなんて信じられないことだ…カルト教団が一般市民に向けた恐ろしいテロリズム行為だ…つい最近起きたバイオテロ事件もカルト教団が関わっていると思ったが…今の時代、引きこもりの坊やでもテロの真似事が出来るからな…あの事件は君の仲間が解決したんだったね？」

「はい、先輩たちがテロ行為を阻止しました、私は地方公演があったので参加出来ませんでしたが…」

「それは仕方がないことだよ、僕は事件の情報収集のために呼び出されたけどね…本庁内はとても慌ただしかったよ、日本警察のテロ対策は万全とは言えないからね…彼女たちの力が無かったらどうなっていたことか…」

「…またあのようなことが起こると思いますか？」

「さて…ただ、一切起こらないとは言えないね、だから調べるんだ、マークしている慈善団体もカルト教団も可能性が高い、どうしても突き止めたい、手を貸してくれないか？」

「…勿論です、それでこれからどうするつもりですか？」

「真正面から向かっても進展しない、警察と口にしただけで嫌な顔をされる…うちの独自の捜査方法でやるしかないだろう…」

「…と言うと？」

「捜査していることが悟られないよう、ちゃんと手は打ってある…今日はひとまず解散だ、また連絡するよ」

「そうですか、ではまたよろしくお願いします」

「こちらこそ……本業の方は忙しそうだけど、頑張ってね…働きやすい環境にしていくつもりだから…」

「本当にありがとうございます、桜塚さんと仕事出来て嬉しいです！」

　サユミは桜塚に屈託のない笑顔を見せて感謝の意を述べた後、東京歌劇団劇場の方へと帰って行った。

「……」

　桜塚はサユミの容姿端麗の後ろ姿を見て、とても裏の殺伐とした世界で生きている者だと思えなかった。ただ、久々に彼女と顔を合わせて変化を感じて、以前より逞しくなったことを感じるのであった。桜塚はかすかに笑みを浮かべて公演を去って行った。

　　ここで突然ではあるが、この世には多くの民族、文化、宗教が存在する。ただ、宗教の中には、異質のものがあり、それは時に牙を剥く場合がある。危険視されるのは、特定のものだけを崇拝する団体、反社会的組織でそれは規則、法律を無視し、犯罪行為を行う正統な宗教とは程遠い存在である。

　日本国内には反社会的な危険を及ぼす団体が存在し、海外の過激派、テロ組織とは違って被害の規模は小さいが、悪巧みを目論む集団には変わりない。その団体は武力で脅して制圧するのではなく、弱みに付け込み、徐々に洗脳していく策を取っている。団体名はカルト（異端的宗教）教団と呼ばれ、多くの人間を勧誘、洗脳し、暗躍を続けている。完全に洗脳された信者は、教団のトップとされる教祖の操り人形となり、多額の金銭を騙し取られて、自ら脱会することは難しく、酷いケースは信者の家族や関係者が被害を受けて破滅することがある。多くの宗教団体にありがちなのは、一般社会で普通に生活することに疑問を感じた者、自分の居場所を失った者、

精神的に障害、欠陥がある者等、社会的弱者が信者になりうることである。ただ、特例もあり、芸能人という特殊な世界で生きている人間も洗脳されやすく、元信者は苦労して脱会したことを赤裸々に語っている。警察組織はカルト教団撲滅に力を注ぐが、逮捕されるのは小物ばかりで捜査は難航していた。社会に害を及ぼす集団は、徐々に仲間を増やして一国を支配する時を待っていたのであった。

　数日後、サユミは桜塚に呼び出されたため自宅マンションを出ようとした。桜塚は公用車に乗って彼女を迎えに来ていた。

「お早うございます～」

「お早う、朝食は取ったのかな？」

「…いえ、まだですけど…」

「良かったら食べなよ、ドーナツとカフェオレを買っておいた、あと、デザートに牛乳寒天のあるよ～」

「ありがとうございます、好物なんです♪」

「気が利くだろ、それじゃあ出発するか」

　桜塚はサユミを車に乗せて、ある場所へと向かおうとした。

「ムシャ…何処に行くんですか？…モグ」

　サユミは、桜塚に奢ってもらったドーナツを頬張りながら質問した。

「前に写真を見せただろう、慈善団体が所有している山に向かっているんだよ、朝早くから出ないと到着が遅くなるからね、眠いなら寝ていいよ、着いたら起こしてあげるから…」

「いえいえ、ちゃんと睡眠取ったんで…あのその追っている慈善団体のこと、詳しく教えてくれませんか…？」

「ああ、そうだね、分かった範囲で教えるよ、団体・組織名は〝セイズ〟構成人数はおよそ八百人、二十代から四十代の男女が中心に活動し、高学歴の人間が幹部に多く居るようだ…主に社会貢献に携わり、事故や災害で家族を失った者の支援、環境エネルギー事業を立ち上げるなど

関わっていることは多種多様、だがこれはあくまで表向きの話…例の銀行強盗事件の犯人かどうか、カルト教団かどうか徹底的に調べる必要がある、そこでうちの専売特許である潜入捜査するわけさ…」

「どうやって潜入するつもりですか？」

「慈善団体に興味がある記者に扮するつもりだ…取材の了承は得ているから心配ないが、相手は用心深いから注意しないとな…着くまで〝セイズ〟の資料にでも目を通しておくかい？」

「そうですね、長い旅路になりそうですし…見せて下さい」

「ご丁寧にホームページやブログまで開設されている、代表やメンバーの経歴もずらりと載っているよ…」

　サユミは桜塚にタブレットを渡されて、〝セイズ〟のことを調べようとした。

「……代表者の名前は芽野輝弥三十六歳、兵庫県出身…子供の頃は、父親の仕事の都合で海外を転々として生活。英語の他、五ヶ国語の言葉が話せたりと、語学は堪能。また、物理学・生物学を専攻してマサチューセッツ工科大学を首席で卒業…その後、帰国して社会経験を積んでＩＴ企業の役員を数年勤めた後、慈善活動に従事して〝セイズ〟を設立。現在は慈善団体の代表の他、国立大学の教授を兼任している……この人、優秀ですね…」

「……絵に描いた様な経歴だね、どれも嘘くさく聞こえるよ…顔は美形の方だけど、どうも気に入らない…整形しているんじゃないか…ナルシストに見える…君はどう思う？」

「…え？……そうですね、会ってみないと何とも言えませんね～…」

　　サユミたちのドライブデートはしばし続き、陰謀渦巻く城を目指そうとしていた。〝セイズ〟の所有地がある山に到着するのに三時間以上掛かり、おまけに車で進めない場所があるため、一キロメートルの険しい山道を歩くこととなった。サユミたちは少々くたびれている様子であった。

「…ここだな…」

　サユミたちの目の前にはいくつかの山荘が建っていて、至る場所に風車がそびえ立っており、奥には謎とされる巨大施設があった。二人は周辺を見渡して様子を窺っていた。

「…代表は何処に居るんだろう？ちょっと訊いてみるか……」

　桜塚は代表の居場所を訊こうと、山荘の前で作業している女性に声を掛けた。

「…すみません、代表の芽野という方はどちらにいらっしゃいますか？」

「芽野代表でしたら賢人館に…」

「賢人館？」

「はい、奥に見える白い洋館のことです、そこを住居兼仕事場にしていますから…」

「そうですか、教えて頂いてありがとうございます…」

　桜塚は女性に礼を言って、サユミと共に賢人館に向かおうとした。山荘に住んでいるのは赤子を育てる女性や高齢者で、まるで一つの居住区のようであった。二人はそれをもの珍しそうに見ていた。

「…♪」

　桜塚がドアチャイムを押して、名乗った後、扉の鍵が開けられた。

「…遠路遥々お越し頂いてありがとうございます、代表は応接室で待っておりますのでご案内いたします…」

　扉を開けたのは、白いスーツを身の纏った気品溢れる女性であった。彼女は秘書としての役割を果たしていた。

　応接室の扉を開けると、芽野が高級ソファーに腰掛けており、彼の後方には黒黒衣のスーツを身の纏った屈強な男性数人が立っていた。

「…いらっしゃい～」

　　芽野はサユミたちと目が合うと、すぐ立ち上がって快く招き入れた。彼は桜塚のイメージより感じよく、とても腰が低かった。

「…失礼します、フリー記者の桜塚と申します…」

「浜野と申します…」

　サユミたちは芽野に自己紹介するが、サユミだけ偽名を名乗った。こうして、彼らは取材を装った潜入捜査を開始した。

「…どうぞ、お掛け下さい、お茶を用意しますので…」

「…どうぞ、お構いなく、すみません、お忙しい中、無理を言いまして…」

「いえいえ、今日は何も予定が入っていなかったもので丁度良かった…うちの組織に興味があるとお聴きしていますが…」

「はい、色々と質問させてもらいたいんですが…よろしいですか？」

「ええ、どうぞ…取材内容は何に載るんですか？」

「…まずネット配信しようと思います…それから徐々に商業誌に…迷惑ですか？」

「全然大丈夫ですよ、ここは設立されて一年も経っていません、知名度を上げるにはもってこいだ…有難いですよ」

「そうですか、では始めたいと思いますが…こちらを訪ねて色々と驚かされました…かなり広大な土地ですね…建造物もしっかりしていて…あの山荘は住居設備ですか？」

「ええ、住居エリアに住んでいるのは、経済的、精神的に不安定な家族、身寄りのない老人等…虐待を受けた児童、災害孤児の面倒も見ていて、ちゃんと一般社会に溶け込めるための環境も整っています…自慢になりますが、名門大学の出身者も結構居るんですよ」

「それは凄いですね、貧困層の救済に力を入れているのは充分分かりましたが…他に関わっていることとかあるんですか？」

「…そうですね、うちの土地に畑やビニールハウスがあって、有機野菜や果物を栽培していまして、それを災害被害者や貧民のもとへと送られます、ちなみに栽培しているのは例の住居エリアに住んでいる夫側です、働かざる者食うべからず…自給自足の意味もあって、自分で栽培した物は食卓のおかずにもなりますからね…」

「成程、他には？」

「環境エネルギー事業に携わっていて、風車が目に入ったと思いますが、太陽光や風力発電の開発協力、バイオエネルギー、新資源の研究助成を行っています…よって、あの研究施設には優秀な研究者や技術者が集結しているんですよ…」

「本当に多方面で活躍されていますね、出来れば研究施設を見学したいんですが…」

「……！」

　その時、芽野の顔色が変わり、彼の後方に立っている部下も落ちづかない様子であった。

「どうされました？」

「……いえ、何でもありません、申し訳ないが研究施設は…関係者以外立ち入り禁止なんです…」

「そうですか、それなら仕方ないですね」

　芽野は明らかに動揺しており、サユミたちは密かに感づいていた。

「…研究施設以外でしたら見学可能です、良かったら案内しますけど…」

「…そうですか、じゃあお願いします」

「…桜塚さんばかり質問されていますが、そちらの…浜野さん…でしたっけ？何か訊きたいことありますか？」

　芽野は気分を変えて、記者に扮したサユミに話し掛けた。

「……えっと…あの…日本でこれだけ規模が大きい公益法人は珍しいかと思うんですが…費用はどうされたんですか？合法的に用意されたんでしょうか？」

「……！」

　芽野は、サユミの予期せぬ質問に唖然とした様子であった。これでまた、気まずい空気が流れることとなった。

「……可愛らしい顔して、なかなか下世話なことを訊くんだね～」

　芽野は動揺を隠して、笑顔でサユミに接した。

「……すみません、まだ新人なのですが、とにかく素直な娘で……気分を害したかと思うので別の質問をします…」

「…いいえ、構いませんよ、まだ会って少しの時間しか経っていませんが、あなた方のこと気に入りましたよ、ちゃんと話しましょう…」

「…お願いします」

　サユミは悪びれる様子もなく、芽野の返答を待とうとした。勿論、桜塚はサユミが下世話な質問をすることを知っており、追っている件の核心に触れようとした。

「…うちのホームページを観れば経歴が分かりますが、私はここを設立する前、あらゆることを経験しまして…勿論、犯罪の臭いがすることには手を出していません、あらゆる事業で成功を収め、投資も行った結果、莫大な資産を手にすることになりました…それを設立の資金源にしたわけです…納得して頂けましたか、新人記者さん？」

「…はい、すみませんでした、失礼なことを言って…」

「…いえいえ、分かって頂ければいいんですよ、それにたまに居るんですよ、我々を忌み嫌う人たちが…ネットでも誹謗中傷が多くて…はは、もう慣れましたけど…」

「…後ろに立っている彼らはがっちりとした体格ですが、ただの社員じゃないですね…？」

　桜塚は、芽野の部下のことが気になって続けて質問した。

「…おっしゃる通り、彼らは私の護衛です、以前、不審者に襲われそうになって…講演中にも襲われる恐れがあるので仕方なく付けることにしました…」

「…成程、その他にトラブルは？」

「そういえば……先日、東京から刑事さんがやって来て、最近多発している銀行強盗事件に加担しているんじゃないかと疑いを掛けられまして…断じて関わっていないことを訴えてお引き取り

願いましたが…今度は地方の警察関係者もしつこく嗅ぎ回っていて…実に迷惑なことです」

「…そんなことがあったんですか、しかし、何故疑いが掛かったんでしょうね？心当たりありますか…？」

　桜塚は、さらに核心に触れようと芽野に鎌を掛けようとした。

「…さて、はっきりしたことは分かりませんが…どうも勘違いが多いようです…」

「勘違い…？」

「…二十年前にあったでしょう、カルト教団が起こした大量殺戮…バイオテロ事件…あれは日本のみならず海外をも震撼させた歴史的犯罪です…我々の組織もその類だと思っているようです…慈善団体は宗教的要素が加わっていて悪い噂があったりしますから…クリーンな存在だと認めてもらうには、まだ時間が掛かるようですね…」

　芽野は、沈痛な面持ちでサユミたちに事実を述べた。

「…色々と答えて頂き感謝します、取材内容は全て記録させてもらいました…もし、載せてほしくない、都合の悪い内容があれば言って下さい…これ、個人事務所の番号と携帯番号が記載されているので…」

　桜塚はそう言って、芽野に簡単な名刺を渡した。勿論、それは模造品であった。

「…では、堅苦しい話は止めて外に出ましょうか、周辺を案内しますよ」

「お願いします……」

「…失礼します」

　その時、芽野の秘書が入室してきて、足早に彼の方へと向かった。

「…どうした？」

　秘書は、すぐさま芽野に耳打ちした。

「……！」

　芽野は秘書から用件を聞いた途端、表情が一変した。

「芽野さん…？」

「……お二人には申し訳ありませんが、急用が入りまして…案内出来なくなりました…代わりに秘書に案内させますので…」

「そうですか、お忙しそうですね…僕たちのことは気にしなくていいので、気を付けて行って来て下さい…」

「ありがとうございます、何か初対面とは思えないですね…またお会いしたいですね、今度一緒に食事でもどうですか？日程はそちらで決めてもらって結構です…秘書が対応しますので……」

　芽野はサユミたちに別れを告げて、部下と共にその場を後にした。

「それでは外をご案内しますので…」

　その後、芽野と別れたサユミたちは、秘書に案内されて周辺を見回ることとなった。

「……ご苦労だった、それで例のモノは手に入ったのか？」

「…はい、やはり彼女が持っていました、ちゃんと手に入れたのでご心配なく…」

「…彼女とは接触したのか？」

「…いいえ、留守のようでした、お蔭で手間が省けましたが…」

「そうだな、出来るだけ騒ぎを起こしたくない…今から迎えに行くから待っていろ」

「分かりました、そちらは特に問題ないですか？」

「…ああ、さっきまで来客対応していたが…珍客でね…姿を変えているとはいえ、全然気づいていなかった…久しぶりに彼らと会ったが元気そうだったよ…」

「…また彼らと争うことになりそうですね…楽しみで仕方ないでしょう？」

「…そうだね、お前にも楽しみを分けてあげるよ、そろそろ本格的に動く時だ…役者も揃った…」

「そのようですね、今度は敗けるわけにはいきませんね？」

「…ああ、もう失敗は許されない！」

　芽野は、誰かと怪しげな会話をしていた。その時の彼の目は狂気に満ちており、何か目論んでいることは間違いなかった。サユミたちも芽野の陰謀に関わっているようだが、まだ知る由もなかった。

「……バババババババ」

　空を見上げると一機のヘリコプターが飛行しており、それには芽野が搭乗していた。

「…代表はヘリでお出掛けですか？」

「…ええ、ここは何かと不便なので緊急時に利用しています」

　偶然、サユミたちはヘリが飛び立つ瞬間を目撃していた。

「…よほど大ごとのようだね」

「お気になさらず…それより、うちの農作物で調理した物があるので是非召し上がって下さい～」

　サユミたちは、しばし芽野のことを忘れて〝セイズ〟所有地の見学を楽しんでした。気づけば日が暮れていき、彼女たちは引き揚げようとした。

「結構楽しかったですね、お土産まで頂きましたし…」

「ああ、いい気分転換になったよ」

　桜塚が運転する公用車の後部座席を見ると、〝セイズ〟の農作物がどっさり置かれていた。彼女たちは、案内してくれた秘書やスタッフに手を振ってその場を後にした。

「…それで収穫はありました？」

「…まあね、上手くやっているが、クロに近いグレーだと判明したよ…」

　桜塚は、自信ありげな表情でサユミに返答した。

「…危険極まる組織ということですか？」

「ああ、可能性が高いよ、ただ、あの芽野という男…なかなか手強いよ…取材中の会話を録音していたが、端末機には嘘発見器も内蔵されていてね…判定結果を見ると、彼の言っていることに偽りはなかった…少々目が泳いだ程度で冷静さを保っていた…」

「化けの皮を剥がすには材料が足りないようですね…」

「…そうでもないさ、芽野や秘書、幹部の人間はともかく、畑で働く従業員、護衛の者たちは異常だったよ…皆、目が死んでいて精気がなかった…操り人形に近かった…すなわち洗脳だよ…彼らは洗脳されて元々の人格を失いつつある…」

「…確かにおかしな人が居ましたね…では居住区の人たちも…？」

「…恐らく洗脳されているだろう…僕が声を掛けた女性は自然体に思えたけど…居住区の人間はまだ救えるかもしれない…とは言っても、洗脳を解くことは安易ではなくてね…」

「…そうなんですか？」

「…ああ、これは米国で起きたことだが、一時期、十代から二十代の一般女性が拉致される事件が多発してね…捜査は難航して犯人の手掛かりは見つかりそうになかった…しかし、事件未解決のまま一年程経った時に進展があった…拉致された女性が一人が突然姿を現したんだ…」

「…え？どうして？」

「その女性は、自分を拉致した犯人グループと生活していたようだが、ふと我に返り脱走を決行した…その女性は警察に保護されたが、肉親が居ないので親戚に引き取られることとなったんだけど…」

「その拉致被害者の女性に何かあったんですか？」

「当初、彼女は平穏な日々を過ごしていたが、徐々に変化が起きてね…言動がおかしかったり、

上品で大人しい性格だったが、突然、行儀悪さが目立って短気になり、ついには暴力を振るった…」

「…まるで別の人間ですね……それってまさか…！」

　サユミは、拉致された女性の変化の原因が分かったようで、桜塚は一度頷いた後、話を続けようとした。

「…彼女は拉致した人間に洗脳されていたのさ…彼女は犯人グループとの生活が嫌になって脱走したが、洗脳は解けていなかった…心や肉体が蝕まれていき、べう人格に支配されていったわけだ…」

「…その拉致被害者の女性は、どうなりました？」

「一緒に生活出来ないと判断した親戚は、彼女を精神病院に入院させたよ…それからどうなったかは知らない…」

「拉致した犯人は捕まったんですか？」

「…いや、まだ捕まっていない、カルト教団の一味と判明したが、尻尾を出さず捜査は打ち切られた…」

「…そうですか……！！」

　その時、サユミのスマートフォンに着信が入り、確認すると発信者は親友の二階堂であった。

「…気にせず出ていいよ」

「すみません……もしもし？」

「…もしもし？ごめん、今、電話しても大丈夫…？」

「…うん、まあ大丈夫だけど、どうしたの？」

「…実はね、帰宅して部屋を見ると、酷く荒らされていたのよ、どうやら泥棒が入ったみたいで…今、警察の人に来てもらってるんだけど…」

「…それは災難ね、でも犯人と出くわさなくて良かったわね…殺されていたかもしれないわ…それで被害状況は？金銭面の被害はどうなの？」

「それが…お金や金品は一切盗まれてないの…それはいいんだけど…ちょっと気になることがあって…あなたにしか話せないことがあって…」

「…それで電話したのね、いいわよ、用件を言って…」

「…自宅のパソコンに保存されたデータを調べると、あるデータがごっそり消えているの」

「何のデータが無くなっているの？」

「……〝ルシフェル〟…権藤先生が開発した劇薬のデータが削除されているわ」

「……え？」

「……！」

　桜塚は、サユミの強張った表情を見て、非常事態だということを悟った。

「…恐らく部屋を荒らした犯人の仕業よ、コピーして取ってあるフラッシュメモリーも無くなっているし…犯人の目的はこれだったのよ…！」

「……でも誰がそんなことを…？犯人の正体は？」

「…まだ分からないわ、荒らされた部屋を調べてもらったけど、犯人の指紋や証拠が無くて、プロの犯行のため、犯人を特定するのに時間が掛かりそうなのよ…」

「…そう、何か気味が悪いわね…」

「ええ、嫌な予感がするわ、変なことに巻き込まれてなかったらいいけど…」

「…分かったわ、直接会って話しましょう、私で良ければ力になるわ…！」

「ありがとう、あなたしか頼れる人が居ないから…助かるわ、是非うちに来て…！」

「うん、じゃあまた連絡するね…お休み～」

　サユミは電話を切った後、一呼吸して気持ちを落ち着かせた。

「……大きな問題を抱えているようだね、対応出来そうかい？」

「……あの…」

「…ん？」

　サユミは、勇気を出して二階堂との会話の内容を桜塚に伝えようとした。

「……一年前に私たちが担当した事件のこと覚えています？」

「……一年前…確か大手の製薬会社と研究機関が起こした不祥事のことかな…？海外の犯罪組織も絡んでいて複雑な案件だったが…」

「ええ、あの事件…妙だと思いませんでしたか？」

「ああ、そうだね…はっきり当時のことを覚えていないな…気づけば解決したからね…僕は入院していたしね…」

「……私も災難に遭いました、劇薬を強引に投与されて、変な奴に目をつけられましたし…」

「…ああ、そういえば僕も変な奴に襲われたよ…！そいつのせいで入院する羽目に…！腹が煮えくり返ったよ…名前は確か……」

「……〝鴉の眼〟…では？」

「…そうだ！僕たちはそう呼んでいたね、事件が解決したのと同時に消息を絶ったようだが…何者だったんだろうね？」

「さあ…分かりません……電話を掛けていたのは私の女友達なんですが、担当した事件に関わっていた研究機関の研究員なんです…当時、色々と協力してくれて…」

「ああ、会ったことはないが、話は聞いている…彼女に何かあったのかい？」

「……彼女の部屋が何者かに荒らされたようです、金品など盗まれていないんですが…何者かに

パソコンを操作された形跡があって…一部のデータが盗まれたようです…」

「それは重要なデータなの？」

「盗まれたのは私に無理やり投与した劇薬のデータです…！」

「…キ……キキー！！」

　その時、桜塚は驚きのあまり急ブレーキを掛けた。

「…それはまずいんじゃないか？劇薬については詳しく知らないが…君はそれでかなりの苦痛を味わったはずだ…」

「ええ、彼女はデータを完全に抹消せず、念のために自ら保管していました…あれは開けてはいけないパンドラの箱…公になれば大変な事態に…！」

「決して穏やかではないね…彼女に会う気かい？」

「ええ、話し合って対策を練るつもりです」

「…そうか、次から次へ難題がやって来るね…今夏も波乱が起きそうだ…」

　サユミたちは、抱えきれない問題に立ち向かうこととなり、しばし緊張を拭えずにいた。また、彼らの知らない所で計り知れない野望が蠢いていた。

第五話　ほくそ笑む鴉

　サユミと桜塚は、謎を秘めた慈善組織〝セイズ〟の潜入捜査を無事に済ませ、それから三日後、兵庫県に位置する二階堂の自宅に訪れたのであった。

　二階堂は高台の土地に住んでいるため、サユミたちは最寄駅のロータリーで迎えの車が来るのを待っていた。

「……この辺は高級住宅街だ…彼女、まだ若いのに随分と豊かな生活しているんだね～」

「ええ、一年前に担当した研究センターでの不祥事事件で環境が大きく変わって、今では大手研究機関の一チームの責任者です…彼女、こういった長閑な所に住むのが夢だったみたいで…まさかもう叶ってしまうとは思ってなかったようですが…」

「…成程、一年前のことも兼ねて、色々と話を聞かせてもらうよ」

「…ええ、私も彼女と会うの久し振りなので楽しみです～」

「…おっと、噂をすれば何とやらだ…」

　サユミたちがしばらく待っていると、一台のピンクカラーの軽自動車アルトラパンがロータリーにやって来た。運転手は、クラクションを軽く鳴らして彼女たちに合図した。

「…すみません、お待たせしちゃって…」

「いいよ、いいよ、私たちも来たばかりだから…」

「…あ、どうも、初めまして…桜塚と申します…」

「…あ、今日は…二階堂と申します…」

　二階堂は一旦、車を降りてから日本人恒例の堅い挨拶を披露した。

「…ちょっと話したけど、桜塚さんは裏稼業の相棒でね…例の不祥事事件を一緒に捜査していたの…だから連れてきても大丈夫でしょう？」

「…ええ、勿論よ、こんな所で立ち話もなんだからウチにどうぞ、さあ乗って～」

　サユミたちは、二階堂の車に乗り込んで彼女の自宅へと向かうこととなった。二階堂は、高台にそびえ立つ高層マンションに住んでおり、そこは通路側から景色を眺望出来て、何キロメートルも離れた都市部もはっきり見えていた。サユミたちは口をぽかんと開けたままマンション内を歩いた。

「お邪魔します～」

　サユミたちは二階堂の部屋に上がりこみ、そこはとても奥行きがあり、一人で生活するのには勿体ないほどの広い空間であった。

「…ちょっとまだ散らかっているんだけど…警察の人が出入りしている間は片づけられないのよ、ようやく落ち着いたわ」

　二階堂はそう言って、サユミたちを奥のリビングルームに招き入れた。

「…それで現状は？犯人の手掛かりは見つかったの？」

「……」

　サユミが訊ねると、二階堂は沈んだ顔を浮かばせた。彼女は二人におすすめのコーヒーを出して本題を話そうとした。

「警察から捜査結果を聞いたけど、有力な手掛かりがないでね…マンション内に設置された防犯カメラの映像を調べようとしたけど、犯人らしき人物は映っておらず、たまにフリーズしたそうよ…私は恐らく犯人が細工したと思うんだけど…」

「…僕もそう思う…犯人はかなり用心深い…この近辺で怪しい人物を見たという情報は？」

　桜塚は、二階堂の発言に大きく頷いて、彼女に質問した。

「……ないみたいです、犯行時刻は住人の出入りが少ない昼間の時間と推定されました…人目を避けて行動していることが明らかです…」

「完全なるプロの犯行だね、でも目的は金品ではなかったわけで…わざとは部屋を荒らしたわけだ…例の…パソコンのデータが盗まれたそうだが…警察はそのことを知っているのかい？」

「…いいえ、知らせていません、限られた者しか教えないと決めたので…警察の人でも教えるわけには…」

「成程…ちなみに僕は警察組織に属しているが特殊でね…サユミから聞いていると思うが…絶対に外に情報を漏らさない…約束するよ」

「勿論分かっています、あなた方のお陰で職場の悪事が暴けたわけですから…信用しています…犯人捜索に協力してもらえるんですか？」

　二階堂が助けを求めようとすると、桜塚は困り果てている様子であった。

「協力してあげたいのは山々だけど…泥棒となると管轄が違うんでね…堂々と捜査は出来ないんだよ…それに現在、厄介な案件を抱えていてね…」

「…そうですか」

　二階堂は、残念な返答を受けたことで背中が丸くなった。

「…愛美、心配しないで！私は協力するから、何でも言って！」

「ありがとう、サユミ…」

「…僕も出来る限りのことはするよ、こっそりとね……それで教えてほしいんだ、盗まれたデータ…例の劇薬のことを…僕は例の事件の担当者で被害者でもあるが真相を知らなくてね…是非、訊きたい…うちの相棒に何があったのか…」

「…分かりました」

　二階堂は桜塚の真剣な眼差しにやられて、真相を洗いざらい話そうとした。

「……そうだったのか、僕たちはとんでもない世界に足を踏み入れていたんだな…下手すれば死んでいたかもしれないからな…僕も…サユミも…運が良かったのか…でも、サユミのことに関しては、あなたに救われた…直接会って礼を言いたかったんです」

「…いえいえ、困ったときはお互い様ですよ、サユミと桜塚さんが事件の捜査に加わってなかったら職場の研究センターは悪い方向へ向かっていたかもしれません…」

「それはどういうことだい？」

「…あなたを病院送りにした奴のこと、覚えているでしょう？」

　その時、サユミがすかさず桜塚に訊ねた。

「ああ、薄気味悪い……〝鴉の眼〟と名付けたね…あれは結局、何だったんだ？」

「一連の事件の黒幕ですよ、元々は例の劇薬で変異した実験体ですが、反逆して自らの野望のために利用するだけ利用して、研究者など多くの人々を殺しました…その中には権藤さんも…」

「…奴の野望とは何なんだ？」

「…はっきり言って分かりません、私や先輩のリカさんを仲間に引き入れようとしていましたが…」

「…奴は君が倒したんだろう？」

「…いいえ、リカさんや先輩の方々が倒しました…私は奴に操られていたようで、その時の記憶がなかったもので…」

「…安藤の相棒か、本当によく彼女のことを耳にする…今でも交流が？」

「…いいえ、退団されてからは行方が分からず音信不通です…」

「そうか……まあ、それはさて置き…盗まれたデータのことだけど…管理しているのはあなただけなの？」

「ええ、職場には一切データは残っていません、セキュリティーは万全にしたつもりですが無駄でした…」

　その時、桜塚は、二階堂の様子を疑っていた。

「……大事なデータを盗まれた割には落ち着いているように思うんだけど…何か隠していない…？」

「…愛美」

　疑わしい目で見られた二階堂は、素直に話そうとした。

　一方、場所は変わり、関東の山岳地帯に位置する慈善組織〝セイズ〟の本部。代表である芽野輝弥は、部下数人を一室に集めて何やら密談しているようであった。

「…例の盗んでもらったデータ、全て確認した…膨大な量の研究の記録が保存されていたが……ただ、役に立ちそうにない…」

「…何か問題が？」

　芽野は、不満げな表情を浮かべ始めて部下たちに話を続けようとした。

「……私が探している物が見当たらないんだ……削除は意図的だと考えられる…彼女は権藤以上に切れ者のようだ…」

「…どうしますか？」

「…データは必ずある…カギを握るのは、やはり彼女だ…ここに連れてきてくれないか？」

「……少々強引でも構いませんか？」

　その時、一人の長身美形の構成員が芽野に訊ねた。

「…あまり乱暴にするなよ、目的を達せば好きにして構わない…お前に全て任せる…」

「了解しました…既に手は打ってあります…それでは直ちに…」
　長身美形の構成員は仲間を引き連れて、その場を後にした。

「…ふ」

　その時、芽野は不敵な笑みを浮かべて部下の帰りを待とうとした。

　一方、二階堂はサユミたちにあることを打ち明けようとした。

「……私の師である権藤芳雄が開発した新薬〝ルシフェル〟のことで…実は新事実が発見された

んです！」

「…新事実？どういうことだ？」

　桜塚は興味深く二階堂の話を聞いて、彼女に訊ねた。

「…例の不祥事事件発覚後、権藤先生の遺書が見つかったんですが、それと一緒にある物が添えてありました…」

「ある物とは？」

　すると、二階堂は首からぶら下げているペンダントをサユミたちに見せた。

「…この銀のペンダントだったんですが、よく調べると小型のＵＳＢメモリーが内蔵されていました…これは何かあると思い、中を調べました…」

「何が保存されていたの？」

　サユミは、そっと二階堂に訊ねた。

「……二つのデータがあって…一つは私宛の手紙だったわ、内容は私へのお詫び…読んでいる間、涙が止まらなかった…でも驚くことは他にあってね…もう一つのデータは機密と名前がついていて…話すより直接見た方がいいかも…どうする？」

「そうね…桜塚さんも見てみたいでしょう？」

「ああ、是非見てみたいね」

　すると、二階堂は立ち上がって自分の部屋に置かれているノートパソコンを取りに行こうとした。そして、パソコンを起動させて二人に問題の保存されたデータを見せようとした。

「……ではデータを開きます」

　二階堂が問題のデータを開くと、膨大な資料が目に焼き付いた。

「…これは？記号や方式が多いが…専門外でよく分からないけど、何かの研究データ？」

「…これは…例の劇薬〝ルシフェル〟の完成が記されたデータです！」

「…何だって？」

「…それって…未完成じゃなかったの？」

「…確かに未完となっていたけど、密かに権藤先生が完成させていたようなの…」

「でも…どうしてそのデータを愛美に？」

「…私宛の手紙にこう記されていたわ、信用出来るのは君しかいない…悪用されないよう、完成させた新薬を守ってほしい……どうか君の力で科学の未来に役立ててほしい…とね」

「…彼は自分の死を悟って、完成させた物をあなたに託そうとしたようだね…」

「…そのようです、先生はまだ正気を失っていませんでした…何者かに脅威を与えられて独りで戦っていたんです…可哀そうに…」

　二階堂は、涙が出るのを我慢して、師である権藤を称えた。それに対し、桜塚は不安がよぎって険しい表情を浮かべた。

「……これは推測だけど、あなたの家に侵入した犯人は、その完成データを狙っているかもしれないな…」

「そうですね…何処かで嗅ぎつけてきたのかも…どうも最近胸騒ぎがして…」

「…データを狙っている犯人は、誰なんだろう？」

「…さあ、見当もつかない…ライバル視している研究機関…産業スパイ…はたまた…」

　二階堂が犯人の姿が浮かばない中、桜塚はどうも心当りがありそうであった。

「…一人居るじゃないか、怪しい人物が…〝鴉の眼〟だよ…！」

「…え？でも…奴は死んだんじゃ…」

「…奴のような反逆者…関係者や後継者が居るとすれば…そいつらの仕業かも知れない…」

「……！」

　二階堂は、あまりの恐怖で体を凍りつかせていた。

「…ではまた…その連中がデータのためにやって来るってこと？」

「ああ…肝心のデータが盗めなかったから過激な行動を取るかも…部屋を荒らされるだけじゃ済まされない恐れが…」

「…愛美の身が危ないってことですか？」

　その時、桜塚はサユミの質問に対して、無言のまま頷いた。

「…私はどうすればいいんでしょうか？」

「…心配は無用だよ、我々があなたの護衛に就こう、二十四時間しっかりガードする」

「ありがとうございます…助かります」

「…それじゃあ私も護衛を…！」

「それは駄目だ！君には他に仕事がある、気持ちは分かるが与えられた仕事に専念してほしい…」

「…分かりました」

「…本当に大変ね、二足の草鞋を履いている人は…今度担当している事件も厄介なの？」

「…？」

　桜塚は二階堂の言葉に疑問を持ち、サユミも様子がおかしく慌てていた。

「…愛美！まずいって！」

「どういうことだ？サユミ君…」

　桜塚は、怖い顔をサユミに近づけて問い詰めようとした。

「…あの…実は…担当している事件の内容を彼女に話しておりまして…」

　サユミは、冷や汗を掻きながら桜塚に白状した。

「…桜塚さん、私、サユミから聞いたことは誰にも喋っていませんよ！秘密警察の情報は一切漏れていません、勿論、歌劇団との関係も…」

　その時、桜塚は怒りを通り越して呆れた様子であった。彼は、一度深く溜め息をついて気持ちを切り替えた。

「…もう喋っちゃ駄目ですよね…はは」

　サユミは、恐る恐る桜塚に声を掛けて彼の返答を待った。

「……やれやれ、お喋りめ、今回は僕が監視しているから喋っていいよ…余計なことを言わないようにな…」

　サユミは、桜塚の意外な言葉に対して安堵の表情を浮かべた。

「…ということで許可をもらったから話すね…今、ある慈善組織を捜査しているの…〝セイズ〟って知ってる？」

「…うーん、聞いたことあるような……テレビ…いや、新聞だったかな…？」

「…その組織の代表の名は芽野輝弥…以前は実業家だったみたいだけど…」

「…芽野！その人物のことは知っているわ、そうだったわね…彼、慈善団体を立ち上げたのよね～」

「やっぱり有名なんだ…」

「よく週刊誌や経済誌で取り上げられていたからね…慈善団体の代表になった時はさすがに驚いたけど……そういえば最近、彼の知り合いがうちの研究所に訪ねて来たわ……」

「…！！」

　桜塚は、二階堂の言ったことが引っ掛かり、一変して前のめりになって彼女の話を聞こうとした。

「…話を続けて」

「……はあ…えっと…それで何を話してたっけ？」

「芽野の知り合いが来たんでしょ？詳しく教えてよ、何しに来たかを…」

「…分かったわ、白いスーツを着た長身の男たちが来てね…彼らは芽野の遣いの者だと言って、ある契約を持ちかけてきた…」

「契約って？」

「研究費の援助や施設の提供とかよ……誘いには乗らなかったわ…何かうさん臭くて…彼らは納得してくれて帰ってくれたけど…全国の研究施設を回っているんだって…まあ営業ね」

「…そういえば組織の本部に研究施設があったな…エネルギー事業に携わっていて…助成も行っているって…」

「どうも怪しくないですか？うちの専門分野じゃないし…何を企んでいるのやら…芽野に会ったんですか？」

「ああ、潜入捜査でね、なかなか本性を現さない読めない男だったよ」

「そうですか…彼、慈善団体に関わってから良い噂を聞きませんね…当初は期待されていましたが、評判が悪くて…最近読んだ週刊誌にもボロクソに書かれていましたから…」

「ああ、我々は芽野の組織が悪事を働いていないか調べているところだ…危険なカルト教団の恐れもある…」

「…成程ね、確かにそうかもしれませんね、現在の彼の写真を見ましたが、まるで別人のようでした…思想が変わって彼のカリスマ性が失いつつあるような…」

　しばし、サユミたちは芽野の件で重い空気に包まれ、話題を変えて、それから数時間、他愛もない話を続けた。気づけば夕刻となり、サユミと桜塚はお暇することを考えていた。

「そろそろ失礼するわ、もう少し居たいけど、予定が入っていてね…」

「そうなんだ、ではこの辺でお開きにしますか…駅までお送りするわ」

「悪いわね…桜塚さん？」

　桜塚を見ると、彼は誰かに電話しているようであった。

「…おっと悪い悪い、行きつけのホテルに予約を入れていたんだ…」

「…ホテル？私たちは東京に帰らないといけないのでは…？」

「君だけね…僕は泊まりだ……二階堂さん、しばらくホテル住いになりそうなので着替えとか必要な物を適当にまとめて下さい…」

「え？どういうことですか？」

「さっき言ったでしょ？護衛するって…」

「…え？今からですか？急ですね…」

「当然だよ…どうも嫌な予感がしてね…不測の事態に対応するのが我々の仕事だ…忙しないが協力してほしい…！」

「…分かりました、用意するんで待って下さい…」

　二階堂は考える暇もなく、せっせと桜塚の指示通りに動いた。サユミも急なことで動揺が隠せなかった。

「…これから別行動ってことですか？」

「ああ、悪いな…君は東京に戻って例の作戦に取り掛かるんだ…僕が居なくても大丈夫だろう…君が指揮を務めて決行すればいい…出来るな？」

「…はい、やってみますが…それにしても随分と例の新薬のことに拘っているんですね…」

「ああ、色々と気になることがあってね…頭の中のもやもやが晴れない…誰かに弄ばれている気分だ…」

　桜塚は、浮かない表情で事の重大さをサユミに述べた。

「……じゃあ、また落ち着いたら、ゆっくり会いましょう…サユミ、気を付けてね」

「…あなたもね、桜塚さん、彼女のことを頼みます…！」

「ああ、任せておけ…また連絡する」

　二階堂の自宅の最寄駅でサユミだけ降ろされて、互いに別行動を取ることとなった。サユミは夜の極秘任務のために東京へ急いで戻った。

「……すみません、お手数を掛けて…でも、あなた方に相談して正解でした」

「お安い御用さ、これも何かの縁だろう…出退勤時も陰からガードするよ…」

「ありがとうございます…」

「…それと言っておきたいんだが、今はこの土地には住まない方が良いかも…確かに自然に囲まれて良い環境だけど、女性一人で住むとなると、物騒な場所だと思う…せっかくの夢をぶち壊してしまって悪いが…もう少し賑やかな場所に引っ越しした方が良いかもしれない…」

「……そうですね…薄々感づいていました、自宅から車で出勤するのも面倒だし、ちょっと買い物でも山を下りないといけないし…不便な面が多いですね…あと、桜塚さんの言う通りで、夜に一人で居ると何だか心細くて…今の私には早すぎたかも…仕事が落ち着いて……相手を見つけてから住み直そうと思います…」

「そうした方が良いよ、分かってくれてありがとう」

　桜塚と二階堂は意気投合して、車中は和やかなムードに包まれた。彼らはそのまま予約した宿泊先へと直行したのであった。

「……目標は都市部に向かいました…追跡を続行しますか？」

「…ああ、続けてくれ、隙を突いてかっさらって来い…目標以外は殺しても構わない…！」

桜塚たちは謎の刺客に付け狙われており、惨劇の夜は避けらそうになかった。

それから数時間後、すっかり夜は更けていき、関東空域で一機の輸送機が優雅に飛行していた。機内にはサユミ率いるチームが搭乗していた。

「…すみません、送って頂いて…」

「…全然構わないよ、ミチコさんは一班のトップになってから表の仕事の量が増えたからね…私たちは代打ってわけよ、ねえ？」

「ええ、困った時はお互い様です、今回の任務、面白そうですね～」

輸送機を操縦しているのは、サユミと同じ歌劇団兼秘密警察のメンバーであった。

一人の名はエリコ。歌劇団では中堅のベテランとして舞台に立ち、プロフェッショナルが集う班に異動となり、活躍の場を広げている。また、裏稼業では優秀な密偵として活動して、強行突入の際、恵まれた身体能力を発揮する。得意武術は功夫。使用する武器は鋼鉄製のヨーヨー等。

もう一人の名はアヤカ。エリコと同じくベテラン勢で構成された劇団班に属しており、シリアスな役からコミカルな役をこなす実力派の舞台人である。裏稼業でも巧みな演技力が活かされ、変装した潜入捜査を得意としている。時に一部隊の指揮を任されることがあり、その能力は長けている。

「お二人とも感謝します」

「どうも～あと五分程で目標地点上空に到達するから、準備しといてね～」

サユミは、仲間が待機している貨物室に戻り、指示しようとした。今回、極秘任務に参加するのはサユミと同じ班に属する歌劇団兼秘密警察要員であった。学年順にアキラ、フジコ、アン、サヤカ、シオリ、レイ、ミナミ、以上が参加メンバーである。

サユミたちは、直ちにパラシュート収納リュックを背負って、後部のハッチへと向かった。そして、ハッチが開かれて彼女たちは華麗に降下して行った。月の光を浴びて降下して行くサユミたちは、パラシュートを展開させて無事に地面へと足を着けた。目的地付近に降りた彼女たちは速やかにまとまって行動した。任務の内容は、慈善組織〝セイズ〟の悪事を暴くための潜入捜査であった。出発前に作戦会議を開き、サユミは指揮を任されていた。

「…警備は手薄のようだけど、注意して…あの研究所の内部の状況を徹底的に調べるのよ…！」

「了解！」

　サユミ率いる歌劇団部隊は、気づかれないよう〝セイズ〟本部を目指した。現場に到着すると、人気がなく、あまりにも静かなため、その影響で彼女たちの緊張は高まる一方であった。

「……あまりにも無防備すぎやしませんか？やはり罠でしょうか？」

「例え罠だろうと中断するわけにはいかないわ…何事にも立ち向かわないと…プロとしての自覚を持たないと…」

「…そうですね、すみません」

　サヤカは、サユミから注意を受けたことで弱気な気持ちを吹っ飛ばした。彼女たちは警戒しつつ謎の研究所へと向かった。何も問題なく研究所に辿り着いた彼女たちは、次なる策を練った。

「やけに静かね…中の状況は？セキュリティーの方の対策は？」

　サユミがそう言うと、フジコは専用タブレットを出して施設内を分析しようとした。彼女は黙々と作業を続けた。

「…発電所のシステムを一時的にダウンさせました…エラーはすぐに改善されますが、セキュリティーは機能せず、一時間程度なら相手の目を誤魔化せます…」

「ご苦労様、制限時間内に情報を集めないとね…ここからは皆、別行動よ、何か見つけたり、トラブルがあったらすぐに知らせて…念を押すけど、注意を怠らないで！」

　歌劇団部隊は、指揮を執るサユミの言ったことに対して、しっかりと頷いた。潜入メンバーはペアを組んでサユミだけ一人で行動することとなった。研究所内に設置された監視カメラには、サユミたちの姿は映っておらず、フジコの言った通り、警備は異変に気づくことはなく、歌劇団部隊の侵入を許した。

「…！」

　しばらく薄暗い研究所の通路を歩いていると、気配がして、サユミは咄嗟に壁に張り付いて様

子を窺った。彼女の近くを歩いているのは、研究員のようであった。サユミは、得物のダガーナイフを構えながら、そっと研究員が別の場所に移動するのを確認し、ほっと胸を撫で下ろした。それから彼女は慎重に前進して内部を捜索した。
　やがて、時間は過ぎていき、サユミは研究所の中心部へと足を踏み入れることとなった。彼女は順調に進んで行くが、ふと違和感を覚えて一旦立ち止まった。

「…こちらサユミ…誰か応答して！皆何処に居るの？」

　サユミは、無線で仲間の応答を待つが、一切反応がなかった。彼女は仲間の身に何かあったのではないかと表情を曇らせた。

「……随分とお困りのようだね？」

「…！！！！！？」

　その時、急にアナウンスが流れてサユミは驚愕した。彼女に届いた声は、聞き覚えがあるようであった。

「…君たちの潜入に気づいていないとでも思ったか？女スパイさん？」

「……芽野……！！」

「残念だが、わざと泳がせていたんだよ…さあ、奥に進むんだ…全ての答えがそこにある…！」

　サユミは芽野の声に導かれて、秘密の部屋に入ろうとした。

「…ここは！？」

　サユミが入った場所は予想以上に広く、吹き抜け構造で、見慣れない物が溢れており、そこはまるで近未来的空間であった。また、かすかに設置された機材の作動音が聴こえて、なんとも不気味な雰囲気であった。彼女はただ口をぽかんと開けるしかなかった。

「……ようこそ、ここはいわば生産工場だ、関係者以外で入ったのは君が初めてだ…」

「…それは光栄だわ、もうネタはばれているんだから姿を見せたら…？」

　サユミがそう言うと、中央の謎の装置が作動して、そこから芽野が姿を現した。

「これで満足かな？」

　芽野は不敵な笑みを浮かべながら話し、サユミは彼のそういう態度が気に入らなかった。

「…訊きたいことは色々とあるけど…まずここが何なのか知りたいわ…」

「さっき言ったはずだ、生産工場だと…」

「もっと詳しく教えなさい、まともなことをしていないことは見当がつくけど…」

「…いや、世間から称賛されることを我々は成し遂げようとしている…」

「勿体ぶらないで早く教えなさいよ！」

　サユミは、芽野に苛立つ一方であった。

「そう急かさないでくれ…夜は長い、じっくりとやろうじゃないか…見てもらった早いな…」

　芽野がそう言うと、室内に異変が起きて、サユミたちが居る付近の床から大型のカプセルのような物が浮き上がって来た。

「…何を見せようというの？」

「今に分かる…カプセルの近くに来るんだ…さあ覗いてごらんよ…」

「…！！？」

　サユミは芽野の指示に従い、目の前のカプセルを覗き込んだ。すると彼女の目は点になり、その場で体が凍りついた。カプセルの中には人間らしきものが入っていた。

「よく出来ているだろう？あと数時間で魂が宿り地に足をつける…」

「…普通の人間じゃないわね？」

「ああ、うちの組織で造ったんだ…自慢の最高傑作だ、凄いだろう？」

「…どうしてこんな物を造る必要が？どちらにしろ、常軌を逸しているわ…！」

「…今は批判されるだろうが、じき絶賛される時が来るだろう…計画は順調だ…」

「全て吐いてもらうわ、思った通り、ただの慈善組織ではなかった…本性を表しなさい！あなたがこの忌まわしい組織の親玉？」

　サユミが得物を構えて厳しく問い詰めるが、芽野の表情は一切変化がなかった。

「…私の悪事を暴きに来たわけか…以前、男性と二人で訪れたが、あれは偵察だったんだな…お互いの探り合いもここまでだ…こちらの方が一歩有利だということに気づいていないようだな？」

「…どういうこと？」

　サユミは、芽野の言っていることが理解出来ずにいた。

「…仲間の居所を教えよう…」

「…！！！」

　芽野がそう言うと、室内の壁に大型液晶ビジョンの電源が入った。サユミは映し出されたものを観て唖然としていた。彼女の仲間は手足を縛られて身動きが取れず、芽野の部下に甚振られていて何とも痛々しい姿になっていた。

「…まんまと罠に掛かってくれて嬉しいよ…うちの方が一枚上手だったようだね、あとは君一人だけだ…どうする？降伏するか？」

「……く！」

　サユミは、窮地に追い込まれて一気に威勢が無くなった。

「…ちなみに君が気づいていないことはまだある…もう少し洞察力が優れていると思ったが残念だ…もう笑いが堪えられないよ…」

「いちいち癇に障るわね、早く言いなさい！」

「…君は本当に目の前に立っているのが芽野輝弥だと思っているのか？」

「…え？」

　サユミは休む暇なく驚くばかりで、芽野に異変が起き始めた。芽野の体は不思議な光に包まれていき、サユミはあまりの眩しさで目がちゃんと開けられなかった。

「……久しぶりだね」

「…！！！！！？」

　やがて、謎の光は消えるが、サユミの前に何故か芽野の姿はなかった。ひょんなことから彼は別人に変わってしまったが、その人物とサユミとは顔見知りであった。

「……変装していたとはいえ、全く気付かないんで逆に驚いたよ…私のことはもう忘れちゃってかな？」

「……忘れるものですか、最近、あなたのことがよく話題になるわ…まさか生きていたとはね…」

「…そう簡単に死なないよ、確か…君は私に洗脳されていたからよく覚えていないだろうけど、君の仲間が邪魔をしたせいで、それまでの苦労が水の泡になった……あの…リカと言ったかな？彼女に殺されかけたが、どうにか生き延びて回復するまで休んでいたのさ…」

　サユミの前に突如現れたのは、かつて死闘を繰り広げた〝鴉の眼〟であった。彼は歌劇団と因縁の仲であった。

「復活した意図は？今度はどんな悪巧みを？私たちに恨みがあるとか？」

「そう睨むなよ、君たちに復讐することなど考えていないよ…逆に会えて感激している、リカはどうしている？」

「…さあ知らないわ、歌劇団退団後、音信不通でね…例え知っていたとしても教えないけど…」

「…そうか、それは残念だ、見せたいものがあったんだが…」

「随分とサプライズが好きなのね…さすがにもう驚かないかも…」

「さて、それはどうかな…本当なら二人揃ってから見せたかったが仕方ないか…というか会わせたかった…」

「…会わせたかった？」

　すると、サユミたちが居る生産工場スペースの一つの扉が開き、そこに人影があった。その人影は、ゆっくりと歩いてサユミたちに近づいた。

「……紹介しよう、私の忠実な部下であるリオンだ…」

　サユミの前に現れたのは、金髪で長身美形を誇る〝鴉の眼〟の部下であった。

「……今さら何故、部下の紹介を？」

「おいおい…本当に鈍いな、彼を見て何も感じないか？」

「…？」

　サユミは〝鴉の眼〟に言っている意味が理解出来ず、〝鴉の眼〟は彼女の反応の悪さに溜め息をついた。

「…彼は普通の人間ではなくてね、最新の科学技術で造られた人間だ…君も知っているはずだ…権藤という天才科学者を…彼の考案を基に実現させた…」

「…そんな！」

　サユミは権藤のことを耳にして気が動転していた。しかし、驚くことはそれだけではなかった。〝鴉の眼〟はそのまま話を続けた。

「……彼は新種の人間の第一号だ、私が眠っている間に実験は成功して誕生した…」

「…新種の人間とか…あなたの言っていることが理解出来ないんだけど…」

「無理に理解しなくていいさ…単なる自慢だ…これからリオンの秘密を教えよう……彼はある細胞を組み合わせてことで生まれた…何の細胞だと思う？」

「そんなの知らないわよ！」

「……君とリカの細胞だよ、細胞は、洗脳された君たちの血液から採取した…そうとも知らず、君たちは馬鹿みたいに傷つけ合っていたわけだ…」

「…え？」

　サユミは〝鴉の眼〟の予想だにしない発言で目が点になり、なかなか返答のための言葉が見つからなかった。

「彼の顔をよく見たまえ、君に若干似ているような気がしないか？体格はリカがベースになっているんだが…ちなみに彼と言っているが特に性別はない…私と同じく…ふふ…」

　サユミは、リオンの顔をじっと見て、たちまち鏡を見ているような気になった。

「…何てことを……やはり、あなたは頭がどうかしている…！」

「…確かにそうだな、でも私はもう人間じゃない、奇人変人を超えても仕方ない…リオンは口数が少ないが、君たちより利口で強い…もう多くの人間を拉致する必要は無くなったよ…苦しめて悪かったね、大変だっただろう…あの劇薬のことで…」

　サユミは〝鴉の眼〟の嫌味な言葉に怒りを露わにした。

「……丁度、良かった…何かすっきりしなくてね…私の手であんたに鉄槌を下したかった…！」

「…決意するのは勝手だが、今の状況をどう整理するつもりだ？どう見ても、そちらは不利だぞ…」

「…その得意げなあんたの顔をねじ伏せてみせるわ…私たちは諦めが悪くてね…」

　囚われの身となった歌劇団メンバーの目は死んでおらず、士気は下がっていなかった。

「何とも勇敢だね、これで最後になるかもしれない…何か質問があれば聞こうじゃないか…」

　サユミは、〝鴉の眼〟に恐る恐るある一つの質問をしようとした。

「……何故、芽野に化けていたの？本人は何処に居るの？」

「…彼か、彼ならゆっくり休んでもらっているよ……もう帰ってこないんじゃないかな…」

「……やはり！！」

〝鴉の眼〟の意味深な発言からサユミの嫌な予感が的中したようであった。

「……我々には大きな組織力が必要だった…そこで彼に目をつけたわけだ…彼の優秀な経歴、功績に惚れ込み、それを取り込もうと思った…」

「…彼の地位と名誉を利用するために殺したのね…その下衆な手口、全く変わってないわね…！」

「…野望を実現させるための尊い犠牲だ…今は栽培している農作物の肥料となって組織に貢献しているよ…」

「……その農作物の栽培やエネルギー事業の支援、その他の慈善活動は見せかけ…裏では犯罪を…全国の銀行を襲っているのも明確ね…」

「ああ、色々と金が要るんでね、大胆だが一番手っ取り早いんでね…」

「元々は健全な組織だったはず…あんたが乗っ取ってカルト教団に変えてしまったのね？」

「…その通りだ、君も先日、偵察した時に見たと思うが、信者は皆、恵まれた環境から奈落の底に突き落とされた弱者ばかり…私にとって、洗脳はお手の物だった…信者は増える一方だ…組織の操り人形となって役立っているよ」

「…確かに信者となった人たちの目に光はなく、曇っていたわ…案内してくれた秘書や幹部の人間も洗脳したの？」

「ああ…彼らは芽野の死に気づいておらず、私のことを彼だと信じ込んでいる、もう私を疑う者、刃向う者は居ない…完璧だ」

「…それで新たな組織を結成して、世界征服でもする気？」

「…そんな幼稚なことじゃない…もっと壮大な計画だ…我々で新たな歴史を築き上げる……！」

〝鴉の眼〟が野望を語ろうとする中、緊急の連絡が入り、彼は思わず無線イヤホンに触れた。

「…？」

その時、〝鴉の眼〟は何か有力な情報を手に入れたようで、不敵な笑みを浮かべた。
こうして、サユミと〝鴉の眼〟は睨み合い、熾烈を極めた戦いが展開されようとしていた。

第六話　暗雲と奇跡

　サユミは、歌劇団の仲間と共に慈善組織〝セイズ〟の裏の姿を暴こうと本部に侵入したが、罠にはまってしまい、因縁の敵、〝鴉の眼〟と対峙することとなった。彼女は仲間が囚われの身となったことで、迂闊に手が出せずにいたが、さらなる問題が降りかかろうとしていた。

「…ここで朗報だ…君にとっては悪いニュースかもしれないが…」

　〝鴉の眼〟は、何とも憎たらしい表情でサユミに話し掛けた。

「今度は何？…もう何を言われても、驚かないと思うけど…」

　サユミは呆れた表情で〝鴉の眼〟の発言を待った。

「……君の友人に用があってね……確か二階堂と言ったかな…？」

　サユミは二階堂のことを耳にして、一気に表情が強張った。

「……！！…彼女に何をしたの？」

「…彼女はまだ若いが優秀で、現在はスピード出世して、一つの大きなプロジェクトを任されている責任者……私の生みの親である権藤とも親しい仲だ…そうだろ？」

「……まさか！」

　サユミは嫌な予感がして、顔が青ざめていき、咄嗟に自分のスマートフォンを取り出して、桜塚に電話を掛けようとした。

「…一度、彼女の家に無断でお邪魔してね…探し物があったんだが、結局見つからなかった…しかし、直接会ったことで見つかったよ…」

　サユミは桜塚を呼び出そうとするが、応答することはなかった。

「…彼女は無事なの？」

「ああ、今のところはね、じき、ここにやって来るだろう……ただ、彼女の傍に居た者たちの状

態は分からない…ボディーガードのようだが、たいして役に立っていないね…うちの部下が少々手荒な真似をして申し訳ない…」

「…そんな……！」

　サユミはあまりの衝撃的なことで、頭の中が整理出来なかった。

「……災難続きで嫌になるだろう？降伏すれば命は奪わないと約束しよう、勿論、仲間も自由の身だ」

「…そんなの信じられないね……！」

　その時、サユミは呟いた直後、隙を狙って得物のダガーナイフを〝鴉の眼〟に放った。しかし、そこで予想外なことが起こって彼女は困惑した。

「……相変わらず油断も隙もないな、戦意喪失したと見せかけての奇襲は天晴だ、仲間に出来なくて残念だ…」

「…ちっ！」

　サユミが放ったナイフは何故か〝鴉の眼〟の体をすり抜けていって虚しく床に刺さった。

「…まんまと騙されたね、私は別の場所から君を見ている…最新の立体映像装置が大いに役立ったよ…残念だったね…」

「…やっぱりね、おかしいと思ったよ、あんたはその変な装置から離れようとしないし、主人が殺されそうになっているのに、そこの人形は微動だにしなかったからね」

「…抵抗は虚しく終わったね、手も足も出ないっていうことが分かっただろう？」

「……まだ抵抗は終わってないよ、油断大敵…自惚れるのも大概にした方が良い」

「…何だと？」

　サユミはまだ諦めておらず、何を狙っていた。

「……ドドドオゴンンンン！！！！！」

　突然、サユミたちが居る生産工場スペース内で大爆発が起こり、事態が大きく変化した。

「……本当なら、あんたに刺さって派手に花火が上がる予定だったのよ……」

　サユミが放ったナイフには、時限起爆装置が仕掛けられていた。爆発の影響で立体映像装置は故障した直後、非常事態の警報サイレンが鳴り響き〝鴉の眼〟の姿は大型液晶ビジョンに映し出された。

「……やってくれるね、これで決まったよ、君たちに未来はない…地獄に案内してあげるよ……相手をしてやれ…！」

　サユミの前にリオンが立ちはだかり、研究所内は一気に慌ただしくなった。

「…あんたが私の相手をしようっていうの？」

「……」

　リオンは、無言のまま構えてサユミと闘おうとした。

「…ヒュ…ヒュ…ヒュヒュ！！」

　サユミは華麗にナイフをリオンに目がけて放って行った。リオンは無駄な動きをせず、ナイフを避けていった。

「…どういうつもりだ？」

　高みの見物をしている〝鴉の眼〟は、サユミの行動を不可解に思った。彼女は積極的に攻撃しているように見えるが、何故か間合いを詰めず、リオンから遠ざかる一方であった。

「あんたと遊んでいる暇はないんでね…」

　サユミはそう言い捨てて、生産工場スペースから出ようとしていた。

「…そういうことか、リオン、逃がすな」

「…了解」

　サユミは捕まった仲間を救い出そうと、研究所内を捜索し始めた。〝鴉の眼〟は、彼女の動きを読んでリオンに命令した。

「…ドガ…バン……ボギャ！」

　サユミは研究所内を駆け回り、怪しい部屋の扉を次々と破っていった。

「…ドギャ！」

　好き放題に動くサユミは、背後からリオンの攻撃を受けて壁に激しく激突した。

「…いった～背後から攻撃するなんて卑怯じゃないの～」

「…試合放棄した方がどうかと思うが…それにここを破壊されては困るんでね…」

　リオンはようやくサユミの前で口を開き、彼女の破壊活動を妨害した。彼の声からは落ち着きと冷徹さを感じられた。

「……いいわ、あんたに仲間の居場所を訊くわ…大人しくしなさい！！」

　サユミはすぐ立ち上がって、リオンに立ち向かおうとした。

「…バキ…ボコオ…シュバ…ブン！」

　サユミは、休むことなく攻撃を続けるが、リオンに全て動きを見切られていた。彼女は大量の汗を掻きながら、ひたすら格闘術を披露するが、通用しそうになかった。

「…！！」

　　それまでほとんど防御に徹していたリオンであったが、ついに反撃に出ようとしていた。

「…ドゴ！！」

　その時、リオンの強烈な蹴りがサユミに浴びせられそうになり、彼女は防御しようとせず回避に転じた。その判断は正解だった。リオンの蹴りで壁がクレーターのように陥没していた。

「…何なの、こいつ…！？」

「…すまん、ちょっと力が入ってしまった…ちゃんと手加減するよ…」

「…あ？」

　サユミは、リオンの態度に対して怒りを露わにした。彼女は容赦なく標的に無数のナイフを放った。

「…ガキン…ガガガキキキキキ…キキキン…！！」

「…！！！」

　サユミが放ったナイフは、リオンの蹴りで全て弾かれ、弾かれた一本のナイフが彼女の頬をかすめた。

「…それで終わりか？」

　リオンは、冷めた表情のままでサユミを挑発した。それから彼女たちの格闘戦はしばらく続いた。

「……これって…？」

　サユミはリオンと闘っている最中、ふと、あることに気づいた。彼の格闘スタイルに違和感を覚え、彼女の頭に先輩のリカの姿が過った。まさしくリオンの格闘スタイルはリカと同じであった。サユミはそれで衝撃を受けて、リズムが狂い始めて押され気味となった。

「……どうした？たいして闘っていないのにお疲れのようだな…少し休憩しようか？」

「…はあ…はあ……いちいち言っていることに腹が立つ…身内の鴉の馬鹿と性格が似ているわ…」

「…よくその程度のレベルで張り合えるな…一度、うちのボスを負かしたことが信じられない…実に不愉快だ…」

「…まあ待っておいてよ、じきにその冷めた顔が子犬のように怯えている顔に変わるから…！」

「……私は待てないな、これ以上、大事な研究所を破壊されたくない…」

〝鴉の眼〟は痺れを切らして、ある作戦を実行しようとした。リオンは静かに頷いて、彼の命令通りに動こうとした。

「…あれ？どうしたの？何故止めるの？」

「…悪いが命令なんでね…これ以上遊んでやれないんだ…縁があればまた会おう…」

リオンはそう言い残して、サユミの前から去ろうとした。

「…ちょっと待って……？」

サユミはリオンを追い掛けようとするが、突如、一枚の壁が現れて彼女の行く手を阻んだ。現れた壁は分厚く頑丈で、サユミはその壁によって閉じ込められた。

「その防壁はいくら強力な爆弾でも破れない…諦めるんだな…」
〝鴉の眼〟は、何かを目論んでサユミを閉じ込めた。しばらくすると、サユミが閉じ込められた空間に謎のガスが発生して充満しつつあった。撒かれたのは催眠ガスで、サユミは、焦りながら脱出する方法を考え込んだ。しかし、良い策が思い浮かばず意識が朦朧としていた。たちまち、彼女はガスに包まれていって力が尽きようとしていた。〝鴉の眼〟は、サユミを生け捕りしようとして、彼女が沈黙したことを別室のモニターで確認した。

「…よし、しばらくしたら彼女を私の前に連れてくるんだ…」

「…他の侵入者は始末しますか？」

「……いや、まだ殺すな、利用価値がありそうだ……？」

〝鴉の眼〟は側近と話している最中に妙な気を感じていた。それはサユミが居る場所からであった。彼女は仕掛けられたガスで気を失ったかと思われたが、どうも様子がおかしかった。

「…ドバゴォン」

その時、とてつもない衝撃音が鳴り響き、防壁が破壊されたようであった。

「…何事だ？」

〝鴉の眼〟が驚愕する中、充満したガスは外に漏れていき、同時に人影が一つ見えた。

「……！！！！！！！？」

　謎の人影は、大柄で紅い眼と銀髪が目立つ人間とは思えない異形の化け物であった。

「……！？」

　引き揚げたリオンは、化け物の気配を感じて冷静な表情が崩れそうになった。非常事態となり、研究所は再び騒がしくなり、警備は化け物に応戦しようとした。

「…ぐは…ぐえ…！ぎゃ…！…！」

　しかし、警備は化け物の力に歯が立たず、無残に倒されていった。また、銃火器も全く効果がなくて対抗する術がなかった。そんな中、〝鴉の眼〟は例の化け物に心当たりがあるようで、若干笑みをこぼしていた。

気になる化け物は適当に暴れた後、出口を目指して研究所から脱出しようとした。

「……奴は一体？追いますか？」

「…いや、放っておけ、今夜は充分に収穫があった…祭りは終わりだ、後片付けをしておいてくれ…」

　〝鴉の眼〟は化け物を追跡しようとせず、退くことを部下たちに命じた。催眠ガスが撒かれた場所にはサユミの姿はなく、衝撃の事実が明かされようとしていたがそれはまだ先の話である。

「……はあ、はあ…」

　暗闇の山中、〝セイズ〟のアジトから一キロメートル近く離れた場所に人影があった。その正体はサユミであった。彼女はいつの間にか外に出ていて、かなり体力を消耗しており、何が起きたか把握出来ない状態であった。

「…ザザザ」

　その時、草を踏みつける音がして、彼女に危機が迫ろうとしていた。

「…！！」

　サユミは死を覚悟したが、予想外の展開が起きた。彼女の前に現れたのは敵ではなかった。

「……サユミ！大丈夫？」

「…エリコ…さん……」

　サユミはエリコに救助され、ひとまず安堵の表情を浮かべた。

「…現状報告は後で訊く…とりあえず今はここを離れよう」

「……ちょっと待って下さい、仲間が捕まったんです…！助けないと…」

「…悪いけど、それは無理だ…先に進もうとすると、妙な気配を多く感じる…やられるのがオチだ…一旦引き揚げるしかない…この先の湖でアヤカが待っているよ…」

　サユミは悔しさを滲ませて、エリコに従った。迎えの輸送機は麓の湖に着水させていて、サユミはそこで応急処置を受けた。

「…本当に助かりました、エリコさんに発見されてなかったらどうなっていたか…」

「その様子だと、かなり深刻な状況のようね？脱出出来たのは、あなただけのようだけど…」

「…私もよく分からないんです、どうやって脱出したか…もう驚くことが多すぎて整理出来そうにありません…」

「…死にもの狂いの末、記憶が一部飛んでしまったのでは…？」

「ええ…一種の錯乱状態に陥っている恐れも…気持ちを落ち着かせてから話した方が良い…アヤカ、離陸するわよ…」

　一方、〝セイズ〟司令部。

「……熱反応を捕捉しました、山岳区域から離れていきますが…」

「良いから放っておけ、無駄な労力を使わすな…後で返事を送っておくのだから…必ず戻って来るさ…」

〝鴉の眼〟は、頬杖をついて余裕な表情を浮かべてサユミたちを追跡しなかった。これにて一時休戦となり、悪夢の夜は去って行くのであった。

サユミは、徐々に落ち着きを取り戻していき、エリコたちは飛行中の輸送機を自動操縦にして彼女の話を聞こうとした。

「……そう…標的の黒幕が〝鴉の眼〟だったとはね…」

「…何ですか？その…鴉の何とかって…」

アヤカだけ話について行けず、一人首を傾げていた。

「…一年前に担当した事件の首謀者のことだよ、その時、あんたは居なかったね…私はミチコさんと密かに捜査してね…サユミの方が詳しいと思うけど…」

「…ええ、奴は人間ではありません、悪魔の実験で誕生した怪物です…先輩のリカさんに協力してもらい、奴の暴走を止めようとしましたが、失敗に終わったようですね…自分のミスで出くわすことになって、仲間を巻き込んで助けることが出来なかった…何とも情けない話です…」

サユミは、自らの不甲斐なさで涙を流そうとした。

「……ただ泣いているだけでは何も始まらないよ、うちの組織にそんな甘ちゃんは要らない…ミチコさんならこういう思うよ…」

アヤカは、そっとサユミの肩を叩いて励まそうとした。そんな中、エリコは何か言いたげそうな表情を浮かべた。

「…どうしました？エリコさん…」

「……嫌な報告が続いて悪いけど、さっき連絡が入ってね…あんたの相棒のことで…部下と一緒にホテルで護衛していたけど失敗に終わった…重要参考人は攫われて…彼らは重傷を負って神戸市内の総合病院に搬送されたわ…全員、緊急の手術とのことだけど…重要参考人はあんたの友人

よね…？」

「…はい、彼女は自分が所属する研究所の機密情報を管理していて、それが何者かによって悪用されると推測し、桜塚さんが機転を利かして護衛を請け負ったんです…後から分かったんですが、狙っているのは〝鴉の眼〟でした…」

「何処にでも湧くね～その〝鴉の眼〟とやらは何を企んでいるの？」

「さあ…とてつもない異常者ですからね…ただ言えることは、奴の陰謀のために数えきれない人々が犠牲になっているということです…」

「……でもさ、聞くところによると、奴は…彼女は化け物になる前、うちらと同じ歌劇団の人間だったんでしょう？」

「え？そうなんだ！何期生だろう？何処の班？後輩だよね～？」

　アヤカが冗談を連発する中、サユミは強張った表情が揺らぐことはなかった。

「…奴のことを微塵も歌劇団の劇団員とは思いませんよ…単なる宿敵です、今度こそ決着をつけないと…！」

「活気があるのは良いけど、力みすぎたら体が持たないよ、臨機応変に対応しないとね～」

「先輩たちみたいに平然としてられません、捕まった仲間がどうなっているか心配ですよ！」

「…大丈夫だよ、皆は無事だよ、奴の性格からしてゲームのつもりだ…ゲームオーバーになる時は、あんたが負けを認めた時だ…また来るのを心待ちにしているだろうよ…それに彼女たちも簡単にやられる軟じゃない、まずは作戦を練り直そう…」

「…分かりました」

　エリコは、興奮状態のサユミを宥めてアヤカと共に操縦席へと戻った。気づけば空は明るくなっていき、朝を迎えようとしていた。サユミたちは、仲間を救い出すため、作戦を立て直すべく、一旦帰還した。

　東京都多摩地域中部　軍用飛行場

決死の脱出で一人となったサユミは、宇浮かない表情のままであった。

「…！」

その時、帰還したサユミたちの目に前にスーツを着た屈強な男性が数人立っており、その中に紛れて一人の女性が仁王立ちで待ち構えていた。彼女はサングラスを掛けているが、鋭い視線がサユミたちに伝わっていた。

「…え？…ミチコさん…何でここに？」

「私たちが呼んでおいたんだよ、一連の事件を担当していたからね…状況を知らせて公演期間の合間に来てもらった…」

サユミたちは、ミチコに軽く会釈して歩み寄った。

「……」

ミチコは少々ご立腹のようで、サユミたちは恐る恐る話し掛けようとした。

「…すみません、任務は失敗に終わりました…」

「……そのようね、大勢で行ったのにあなただけ…惨敗ということね…済んだことは仕方がない…改めてやり直すしかないわ…次の準備は大体出来ているわ…ついて来て…あなたたちご苦労だったわね、後はこっちに任せて…」

「はい、了解しました」

サユミはミチコと行動を共にして、エリコたちと別れた。飛行場を出て駐車場に向かうと、二、三台の黒のクラウン二一〇系が送迎車として駐車されており、サユミたちはそのうちの一台に乗り込んだ。

「…何処に行かれるんですか？」

「…まあ楽しみにしといて、目的地に着くまで話したいことがあるの…」

サユミたちを乗せた送迎車は、軍用飛行場を後にして、東京都市部へと向かおうとしていた。

「……早速だけど、数時間前にこんなのが投稿されていてね…」

　ミチコは専用タブレットを開き、あるネット動画をサユミに見せようとした。

「…これは……！！」

　サユミはネット動画に目を通した途端に表情が一変した。

「…この吊るされているの、あなたの班のメンバーよね？かなり痛めつけられている…可哀そうに…音声はなく、字幕で〝お前の仲間はまだ生かしてある〟…と表記されているわ…それと別の映像が投稿されていて……あなたの友達でしょう？」

「……！！」

　ミチコの言った通り、新たな投稿動画には拘束された二階堂が映っていた。そして、映像が流れた後に背景が黒くなり、白い字幕で〝大事に預かっている〟と表記されていた。これでサユミはさらに動揺した。

「…酷な演出ね、彼女は神戸の優秀な研究者でしょ？重要な情報を持っているとか…まさかあの〝鴉の眼〟が絡んでいたとはね…リカちゃんが聞いたらどんな顔するかしらね…今度は何を企んでいるの？」

「…分かりません、慈善組織を乗っ取り、何か悪事を働いているようですが、詳しいことは…また多くの罪なき人々を殺めているようですが…」

「そう…仲間の救出も兼ねて、今度こそ仕留めないとね…あなたに出来る？」

「……はい、確実に仕留めます！」

　ミチコはサユミの目をじっと見て信用したようであった。そして、彼女は何か思い出した様子であった。

「……ああ、そうだ、あなたの相棒のことだけど、手術は無事に成功したそうよ、全員、命に別状はないけど長期入院が必要とのこと…この一件が解決したらお見舞いに行くといいわ」

「はい！」

　サユミはやっと吉報を耳にして、ひとまず肩の荷が下りたようであった。それから話に集中して時間を忘れそうになり、サユミたちを乗せた車は目的地に着こうとしていた。そこは歓楽街にある雑居ビルであった。サユミは、ミチコに先導されてビル内に足を踏み入れた。そこは人気がなく、静寂さが広がっていた。

「…何ですか…ここは？」

「地下にうちの隠れ家があってね…都内にはいくつも借り地が存在する、ほら、適性試験もこういう場所で受けたでしょ？」

「…はい、隠れ家のことは知っていますが、ここは初めてです…私が試験を受けたこと知っているんですね？」

「ええ、同じ境遇の劇団員は皆、知っているわよ、試験日が被ることはよくあるからね…受験者の視察を任されることもあるし…あなたは問題なく合格すると思ったわ…」

「ありがとうございます…それにしても、ミチコさんは現在どういった立場なんですか？表の世界では同じ舞台人ですが、裏の世界でははるかに遠い存在の人のように思います…」

　ミチコは、サユミの素朴な疑問に対して軽く笑みを浮かべた。

「……長くこの世界で生きていけば色々なことを知って経験するわ…そのうち落ち着いたら話すわ…」

　ミチコはそう返答してエレベーターのボタンを押すが、サユミと一緒に中に入ろうとしなかった。

「…ミチコさん？」

「私はここまでよ、後のことは地下に行けば分かる、それでは健闘を祈るわ、次は必ず遂行して…！」

「…はい！」

　サユミはミチコと別れ、緊張感を保ったまま地下の隠れ家に向かおうとした。地下フロアに着くと、薄暗い空間が広がり不穏な空気が漂っていた。壁を見ると矢印が表記されていて、サユミはそれを頼りに進んで行った。奥に進んで行くと古びた一室の扉があり、彼女は恐る恐る入室し

ようとした。すると物音がして妙な気配を感じた。

「……ワイワイ、キャッ、キャッ…！！」

　室内は予想以上に賑やかな空間で、煩すぎるほどであった。サユミを待っていた者たちは、用意された飲み物や料理を口にして、楽しそうにどんちゃん騒ぎをしていた。サユミは状況を把握するのにかなり時間が掛かりそうであった。

「……あれ？サユミじゃないの…やっと来たんだね～！」

「ようやく主役のご登場か～」

　その時、待ち侘びた女性二人が困り果てたサユミに話し掛けた。

「…これってどういうこと？皆、ここで何してんの？」

「…私たちも急に呼ばれたのよ、ミチコさんに…あんたの助けになってほしいと言われて召集されたんだけど…」

　サユミの前には六人の女性が居て、皆、彼女と同じ境遇の歌劇団員で同期であった。
　一人目はアヤコ。圧倒的な歌唱力を持ち、表現豊かな演技に定評歌劇団スターである。サユミの頼れる兄貴分として陰から支えていたが、別の班に異動となって新たな環境で活躍している。裏稼業では危険な敵地に乗り込み、日々、犯罪組織を撲滅している。
　二人目はヒコト。自然体な演技が彼女の魅力な中堅スターで、劇団仲間を陰から支える役割を担っている。また、裏の世界でも彼女の実力は認められていて、どんな危機的な状況でも冷静に対応出来る力を持っている。
　三人目はアヤ。歌劇団のアイドル的存在で、正義感溢れる熱血派かつムードメーカーの関西出身。歌劇団に入団する前は新体操をしていて、それが活かされ小柄な体格で驚異的な身体能力を具えている。裏の世界では優秀な密偵として活動し、潜入して敵の極秘情報を入手している。
　四人目はクミコ。恵まれた容姿と正統派な演技で注目された中堅スター。突如、異動となり、同班のアヤと共に舞台を盛り上げている。裏の世界でも優秀で、隠密活動を得意とし、数多くの危険な敵地に潜入している。使用する武器は旧式装飾銃。
　五人目はマイ。小柄で見た目は可愛らしい顔立ちだが声が低く、ギャップがある歌劇団スターとして注目される。裏稼業では、主にハイテク機器を駆使した手段で標的の情報収集を担当しているが、恵まれた身体能力も兼ね揃えていて戦闘に参加する場合もある。
　六人目はエリカ。長身で現代的な容姿で早くから舞台映えする歌劇団スターとして評価されている。各班に異動することでキャリアを積んでいき、同班のマイと二大巨頭として君臨している

。裏稼業では任務の指揮を任されることがあり、後輩に的確な指導を行っている。
　サユミは、突然の同期メンバーの集結で驚きが隠せなかった。

「まあ、こっちにおいでよ、私らはここで待機するよう言われてね、ずっと待っていたわけよ」

　アヤコは、優しくサユミの背中を押して中心の席に座らせた。

「まあ何か口に入れや、何も食べてないんやろ？」

　アヤはそう言ってサンドイッチを差し出した。

「…ありがとう、でもあまり食欲なくてね、昨夜に色々あって疲れちゃった…」

「…そのようだね、顔を見れば分かるよ、何があったか大体聞いたよ、後輩たちが捕まったんでしょ？」

　クミコは、サユミのためにカフェオレを持って歩み寄った。

「…ええ、かろうじて生きているようだけど…心配だわ、早く助けに行かないと…」

「そう慌てなさんな、焦っていては返り討ちに遭うだけだよ、冷静に作戦を立て直さないと…手伝ってあげるから…」

　続いてヒコトがサユミに話しかけて、意味深な発言をした。

「え？あなたたちが？」

「何のために集まったと思ってたの？確かに同窓会に見えるかもしれないけど…人手が足りないでしょ？協力するわ」

　エリカは、サユミの目をじっと見ながら肩を叩いて元気づけた。

「……嬉しいけど、標的のことを知ってるの？一筋縄ではいかないわよ…！」

「…そんなの分かってるよ、標的は〝鴉の眼〟でしょう？私は奴のことを知っている…元はうちらと同じ歌劇団の人間らしいけど…」

　アヤコは以前、〝鴉の眼〟と交戦した経験があった。

「ええ、今はただの化け物だけど…」

「サユミの宿敵ってわけね、相手にとって不足なし、面白そうじゃない～」

　エリカは、実に呑気であった。

「…変な奴だけど、頭は切れるわ、見透かす力は半端ないから注意しないと…」

「…私たちは修羅場を何度も潜って来たつもりだけど…その鴉の嘴をへし折ってやるわ！」

　クミコは、強気な発言をぶちまけた。

「…あった」

　その時、ずっと黙っていたマイが囁いた。彼女は、ずっと専用のパソコンで何か作業をしていた。

「何が見つかったの？」

　アヤコが訊ねると、マイはパソコンの画面を同期メンバーたちの方に向けて、説明しようとした。

「気になる投稿動画が更新されていてね…これに映っているの…話題になっている〝鴉の眼〟じゃない？」

　サユミは、〝鴉の眼〟に反応してパソコン画面を齧り付くようにして見ていた。問題の動画を確認すると、薄暗い部屋に一つの人影が映っており、しばらくすると音声が流れだした。

「……ザ……この映像は…ある限られた人物のために…公開して…いる…ザザ…私事ではあるが…ザ…ザ…非常に気分を害する……ことが起きた…ザ…」

　音声を確認すると、加工されて乱れが目立つが、どうもわざとらしい演出のように感じ取られ、サユミは〝鴉の眼〟の声だと悟っていた。

「ザ……私の城を…荒らした者に告ぐ…ザ…一緒に…忍び込んだ…仲間と科学者の友人は…ザ…

大事に預かっている…人質と…いうことだ…ザザ…取戻したければ…来るがいい……こちらは逃げも…ザザ…隠れも…ザザ…しない…これで終わりに…しよう…ザ…じゃないか…無謀にも…一人で…来ても…ザ…構わない…新たな仲間を…ザザ…引き連れてもいい…歓迎するよ、ふふ…ザザ…猶予は明日の夜明けまで…ザ…朝日が顔を出せば…ザザ…仲間は処刑されると…いうことだ…伝えたいことは…以上だ…ザザ…それでは楽しみに待っている…ザ」

　サユミたちは険しい表情を浮かべて、じっと〝鴉の眼〟の動画を観ており、さっきまでの賑やかな時間が嘘のようで、その場は静まり返っていた。

「……しょうもない…今のを観て、〝鴉の眼〟とやらの性格が手に取るように分かった、早よ助けに行こう！」

　アヤは、〝鴉の眼〟に嫌気が差し、自分の握り拳をぶつけ合って、いらいらを解消していた。

「まあまあ、時間はまだあるから落ち着いて行動しよう、リーダーのサユミの指示を待とう…」

「え？私がリーダー…？」

　サユミは、アヤコの発言で戸惑っていた。

「当たり前でしょう、あんたの班の件なんだから…同期で唯一のトップスターでもあるわけだし、しっかりしてよ、私たちの自慢なんだから…堂々と胸を張って指示をして！」

　サユミは、同期メンバーに励まされて、覇気を取り戻した。そして、彼女は生き生きとした目で同期メンバーに指示を出そうとした。

「……それでは、今から人質となった仲間の救出、〝鴉の眼〟の組織壊滅を遂行させるためにみんなの力を借りようと思います……でもその前に……」

「……？」

　同期メンバーは、サユミの妙な溜めに引き寄せられていた。

「…腹ごしらえしよう、パンケーキが食べたい！」

「……！！！！！！！」

　同期メンバーは、サユミの意外な発言に拍子抜けして、お笑い芸人のように派手にずっこけた。

「何か久々に皆の顔に会ったら嫌なこと忘れてお腹減っちゃって～腹が減っては戦は出来ぬっていうでしょう～でへ」

　同期メンバーは、サユミの変貌ぶりに呆れていた。こうして、歌劇団同期による食事会が再開されようとしていた。

　サユミはよほど空腹だったのか、用意された料理を常人以上の速さで平らげた。

「…ちょっとあんた、やけ食いは体に毒よ」

「…大丈夫だって、もぐもぐ…昨夜から飲まず食わずだったから…いくらでも入るわ…パンケーキまだー？パクハグ」

　アヤコは、サユミに呆れて頭を抱えていた。隠れ家にはキッチンがあり、ヒコトとクミコはサユミのために料理を作っていた。

「もうパンケーキ焼くの何枚目？」

「さてね、ひたすら焼いているからもう和分からんわ…異常な食欲ね、後で胸焼けしても知らないから…」

　ヒコトたちはぶつぶつ文句を言いながらサユミの専門シェフを務めていた。食事中、サユミは明るい表情を浮かべ、束の間の休息を味わうのであった。

　それからしばらくして、食事会を閉会となり、サユミたちは気持ちを切り替えて〝鴉の眼〟のアジトに潜入しようと作戦会議を開こうとした。

「……標的が居る場所はここ…関東エリアの〇〇県北西部の山岳地帯…慈善組織を乗っ取り、現在、〝鴉の眼〟がその土地を所有している…間違いないわね？」

「ええ…」

　アヤコが仕切ることになり、サユミに問いただした。アヤコは確認を取り、再び話を進めた。他メンバーは、関連資料に目を通しながら彼女の話を聞いていた。

「…衛星写真で所有地を確認すると、広大な土地だということがよく分かる…居住区には構成員…信者と言った方がいいのかな…が住んでいる模様、ここの警備は手薄ね…問題は研究施設…ブラックボックスとして謎に包まれている…中の様子はどうだったの？」

　アヤコは、再びサユミに質問した。

「…〝鴉の眼〟の罠にまんまとはまり、ある部屋に辿り着いてね…そこは広い空間で奴は生産工場と言っていた…」

「生産工場？何を生産しているの？」

「…大きなカプセルがあってね、中を覗き込むと人間が入っていた…！奴は自然の摂理に反した神の真似事を密かに行っていたのよ…！！」

　同期メンバーは、サユミの発言を耳にした途端、衝撃を覚えて心がざわめいていた。

「……それはつまり人間を造っていた…クローンってこと？」

　その時、ヒコトが挙手してサユミに質問した。

「さあ…詳しいことは話さなかった、そのうち世間に絶賛されて計画は順調だと自慢げな表情で話しただけ…ただ驚くべきことがあったわ…」

「それってどんなこと？」

「……奴の部下が一人現れてね…その部下の素性を聞いて動悸が激しくなった……部下は私とリカさんの細胞を組み合わせて誕生させた新種の人間だったのよ…」

　同期メンバーはサユミの発言に背筋が凍りついて、その直後に響きだした。先輩であるリカは同期メンバーと面識があり、驚きは倍増するのであった。

「あんたの言っていること、とてもついて行けないけど…事実なの？」

　アヤコは、代表してサユミに疑問を投げ掛けた。

「…信じられないけど、事実よ…名はリオン、よく見れば顔が私と似ている部分もあるし…抗戦

すると格闘スタイルがリカさんと一緒で手強かった…細胞は一年前の任務の際、私たちと接触した時に入手したようだけど…何とも悍ましいことだわ…！」

「…よく分かったわ、奴を野放しにしてはいけないということが…次は何を仕出かすか分からないから確実に仕留めないとね…」

「ええ、奴を倒さないと奴のために犠牲になった人たちが浮かばれないわ…！」

　サユミ率いる同期メンバーは、作戦会議を済ませて、早速、〝鴉の眼〟のアジトに向かうための準備に取り掛かった。秘密警察の隠れ家には多種多様の武器が揃っており、同期メンバーは適当に選んでいた。

「クミコ、武器はそれだけでいいの？」

「うん、私はこの装飾銃しか愛着湧かなくてね…骨董品だけど頼りになるよ」

　クミコは、得物の銃を大事にそうに構えてエリカに語った。

「…それで武器は何処に運ぶんや？油脂輸送機は用意してあるんか？」

「…生憎、輸送機の手配はしていなくてね、操縦免許があるミチコさん、エリコさん、アヤカさんは公演や諸事情で来れない…私たちの中で操縦出来る者は居ないし…」

「じゃあどうするんや？」

「ヘリコプターなら操縦出来るけど…」

「……空の移動は止めといた方が良いよ」

　ヒコトが役に立とうとしたが、そこにマイがそっと口を挟んだ。

「それはどういうこと？」

「…気象庁のサーバーにハッキングして数時間後の気象情報を調べているんだけど、大気が乱れていて、関東全域に集中して雷雨が降るそうよ…おまけに嵐のような風が吹くため、パラシュートでの降下は危険よ」

「じゃあ何で奴のアジトまで行くんや？」

「…車で行くしかないわね、渋滞が無ければ目的地までは三時間弱で着く…交通情報を調べたけど渋滞してないから大丈夫でしょう…」

「…ここの地下駐車場にＳＵＶとバンが数台駐車されている…それに乗って行きましょう」

「よし、私が運転するわ、フルスロットルで直行や～！」

「制限速度は守ってね、私たちは極秘捜査で動いていて一般人扱いだから違反切符切られて取り調べされる場合があるわ」

「がってん！」

　アヤは、アヤコの忠告を適当に聞いて駐車場の方へと駆けていき、クミコもそれについて行った。

「…やれやれ、相変わらずアヤたちの班は落ち着きがないね～…クミコも異動してから変わったような…」

　アヤコは、呆れた表情で去って行くアヤたちを見ていた。

「私はどちらにしろ、役に立ちそうにないね…車の免許持ってないから…」

「気にしなくていいよ、主力のあんたは着くまで休んどけばいいから…」

「ありがとう…」

　アヤコは、サユミを激励して一緒に駐車場に向かった。こうして、奇跡の共演が実現し、頼もしい仲間に囲まれたことでサユミは安心感と幸福感が高められた。

第七話　悪夢の構築

　サユミは、盟友かつ戦友である同期メンバーと奇跡的な再会を果たして、〝鴉の眼〟との最終決戦に挑もうとしていた。彼女は〝鴉の眼〟のアジトまで運転を同期メンバーに任せて出発しようとしていたが…

　サユミたちは、何故か都内の複合商業施設に寄り道して買い出しを行っていた。

「……えっと雨具は買ったし、テントセットも買った…あとは…」

　アヤコは呟いて、買う物を確認して、ヒコトが付き添っていた。

「…服装関連はエリカとマイが担当しているよ、プライベートの服で来ちゃったからね…残りは食料担当よ…」

「…まるでキャンプね、新人のコトが懐かしいわ…遅くならないように言っといて」

　アヤコたちは、買った物を運んで先に駐車場へと戻ろうとした。

　サユミ、クミコ、アヤは食料を担当しているわけだが、買い物籠をいくつも利用して、どれも積め込みすぎて溢れそうであった。周りの利用客は、それをもの珍しそうに見ているのであった。

「…即席麺や非常食は、こんなもんでいいか…せっかくバーベキューしようと思ったのに雨じゃあ仕方ないか…あとはお菓子とデザートくらいかな…」

　サユミたちは、分担して必要な商品を選んでいるようであった。思い存分商品を詰め込んだクミコは、サユミたちと合流しようとした。

「…皆の飲み物は買ったで～カセットガスコンロも買ったし、温かい物も飲めるし…アルコールはご自由に～」

「私は主にお菓子を…菓子パンにプリンやゼリー…牛乳寒天は私の…」

　サユミたちは、尋常ではない重さのカートを巧みに操ってレジで会計を済まそうとした。

「……何？そんなに買ったの？」

　アヤコは、戻ってきたサユミたちに驚愕していた。

「やっぱりこれだけ人数居ると、必要でしょう？ここ結構、充実しているね～」

「馬鹿たれ！完全に予算オーバーじゃないの！遊びに行くんじゃないんだよ！！」

「……ごめんなさい」

　サユミたちは、アヤコからお叱りを受けて子供のように拗ねていた。他メンバーは、楽しそうに囲んで彼女たちを見ていた。それは、これから戦場に向かう光景とは思えず、まるで緊張感がなかった。

　サユミたちを乗せた車が高速道路に入ろうとする頃、上空は分厚い雲で覆われており、いつ降ってもおかしくない状況であった。サユミは昨夜の疲れが溜まっており、目的地に到着するまで死んだように眠っていた。

　一方、サユミと因縁の関係である〝鴉の眼〟は、自ら所有する研究所の一室に人質である二階堂を招いていた。

「……やっと手に入った…君の上司は隅に置けないと分かっていたが…自分の命を犠牲にして教え子に託したか…」

　〝鴉の眼〟はそう言って、二階堂が隠し持っていたＵＳＢメモリーを研究室のパソコンに挿し込んだ。ＵＳＢに保存されたデータは問題なく開かれて、ついにパンドラの箱の全貌が明かされようとしていた。〝鴉の眼〟はこの瞬間を待ち望んでいて、ついに巡り合ったのであった。二階堂は、満足げな表情を浮かべた〝鴉の眼〟にそっと話し掛けようとした。

「……あなたが〝鴉の眼〟なのね、実際に本人を見るのは初めてだわ…普通の人間と大して変わらないわね…」

「…当然だ、元は人間だったんだから…顔や体格など自由自在に変えられたり、特殊な能力が具わっているが、それ以外は普通の人間と何も変わらない…万能でもないしね…」

「…そうね、太陽の光を浴びると細胞が破壊されるため、昼間はたいして活動出来ないはず…その割には元気そうね…どういった細工を？」

「…例の劇薬を強化させることに成功してね…それを投与することで一定時間、細胞が活性化して破壊されることはない…部下にも同じ薬を持たせている…」

「…成程、この研究所を少し見学させてもらったけど、かなり技術が進んでいるようね…世界的に有名な研究者や技術者も居たし…じきに各方面の人間が嗅ぎ付けるわよ」

「…心配御無用だ、日本政府の力では我々の野望を阻止することは不可能だ…もう世界を相手に出来るところまで近づいている…」

「…野望って何なの？」

「…話せば長くなるが、簡単に言えば新世界の創造だよ、君たちの時代は終わろうとしている…」

「…それはつまり…あなたが世界を征服するってこと？戦争でも始める気？」

「そんな陳腐なことでは済まされない、今住んでいる世界は大きく生まれ変わるんだよ、君たちは運命に逆らえない…このデータが大いに役に立つわけだ…」

「……権藤先生の力を利用して悪用するのは止めて！」

〝鴉の眼〟は二階堂の感情の変化に気づき、一旦作業を止めようとした。

「…彼の力は実に素晴らしい、利用ではなく跡を継いでいるだけだ…後継者は君ではなく
私だ…！」

「…何を言っているの？先生はあなたがしていることを望んでいないわ！」

「…いいや、彼は先に事を見越して、劇薬を開発して…私を誕生させたんだ」

「どういうこと？」

「…今の世界の状態を見て、何も感じないか？人口は果てしなく増加していき、貴重な資源を奪い合い、環境破壊を止めず、各地で醜い殺し合いをしている…このような状態がいつまでも続くはずがない…」

「あなたに世界を変える力が…？」

「あると思う…能無しの政治家よりは確実にね…」

「あなたの野望に興味あるわ、もう少し具体的に話せる…？」

「…いいだろう、サユミと同じで話していると楽しい……これを見たまえ…」

〝鴉の眼〟は、研究室に設置された大型モニターを起動させて二階堂にある物を見せようとした。

「…これは！！？」

「…丁度良かった、また一つ新たな命が誕生した…何度見ても感動するよ…」

モニター画面に映っているのは、サユミも目にしたカプセルであった。それは扉を開き、中から痩せ型の成人男性が裸姿で現れた。長時間、培養液漬けとなっていた裸の男性は研究者にバスローブを着せられて、彼らと共に一緒にその場を去って行った。二階堂は、その場面をただただ黙って見ていた。そして、彼らの姿が見えなくなってから、やっと彼女が口を開こうとした。

「…あれは何なの？」

「あれは…人間…の姿をした新種生命体だ、男性の姿をしているが特に性別はない」

「……あれは触れてはいけない…近づいてはいけない聖域よ…自然の摂理に反しているわ…」

「…確かに人間の世界なら反したことだが、私は人間じゃない、最新の科学技術で生を受けた…」

「…どういった技術を？クローン技術に近いようだけど…」

〝鴉の眼〟は、動揺している二階堂を面白がって、彼女の質問に答えようとした。

「……クローン技術を応用したものだ、第一にクローン体を造るには生命体の情報が必要だ、元の記憶がなくとも外見はオリジナルと同じだ…ただ、それだけでは面白くない、異なる情報を組み合わせて変異体を生み出すことも可能となった…」

「…ブレンドしたわけね、コーヒーやお米じゃないのよ」

「まあ聞け、君を攫った者たちも同じ類だ…サユミたち歌劇団の細胞が役立っている…さらに…」

「…？」

　二階堂は〝鴉の眼〟に驚かされてばかりだが、話にはまだ続きがあった。

「オリジナルの情報が無くても生命体を生み出すことが可能だ…自分のイメージ通りに造れる、まさに新種だ」

「…馬鹿馬鹿しい、いずれ実現出来たとしても、喝采を浴びず、非難の声が集中するでしょうね…」

　二階堂は〝鴉の眼〟の発言に呆れ始めていた。

「それでも構わない、旧人類である君たちが己の愚かさに気づいた時は我々、新人類に支配されているのだから…」

「何が旧人類、新人類よ、妄想を膨らませるのは勝手だけど、私たちを巻き込まないで…！」

「そんな言い方はないだろう皮肉にも私と接触したことで君は出世したんだ…」

「ふん…かえって大迷惑だわ、あなたのお陰で多くの人材と信用を失った…！あなたが権藤先生を殺したのね…！！」

　二階堂は怒りを露わにして、〝鴉の眼〟から真相を訊き出そうとした。

「ああ…私が殺した、彼とは意見が合わなくなってね…世話になったが、利用価値のない者は消えてもらうしかない…」

「…私は必要なデータを提供した…もう利用価値がないのでは…？」

「いや、まだある、君は大事な人質だ、もう少し付き合ってもらう、恩師の敵と一緒に居たくないと思うが…我慢してくれ」

「ええ、いくらでも我慢するわよ、私の手で敵を討ちたいところだけど、無理だからね…だから

代わりに彼女に敵を討ってもらう……」

「……サユミのことか？」

「…そうよ、彼女は報復するでしょう、怒らすと怖いわよ…！」

「それは楽しみだな、期待して待つことにしよう、憎っくき歌劇団部隊と全面戦争だ」

「……！」

　二階堂は今の〝鴉の眼〟の発言に引っ掛かる点があり、もの言いたげな目をしていた。

「何だ？言ってみろ」

「…確かあなたは人間だった頃、歌劇団の人間だったわね？」

「…ああ、そうだ、それがどうした？」

「元歌劇団の人間が同じ組織といがみ合うなんて変な話だと思ってね…」

「余計なお世話だ、もう関係ないことだ」

「……権藤先生が保管していた資料に実験台になった人のリストがあったけど、歌劇団出身者のものもあった…あなたの本名は確か……！」

　その時、〝鴉の眼〟は殺気を剥き出しにして、二階堂を睨み付けた。

「……それ以上、私のことを話せば人質といえども無事では済まないぞ…サユミの前で八つ裂きにされるか、恩師のように口内に羽根を押し込んで窒息死…死に方を選択させてやる…！」

　二階堂は〝鴉の眼〟の本気の目に怖気づき発言を止めた。そして、二人の激論会は幕を閉じ、彼女は監視役に独房へと連行された。

「……ボス、今よろしいですか？」

　二階堂が去った後、〝鴉の眼〟が居る研究室にリオンから通信が入った。

「…構わんよ、そっちの様子はどうだ？」

「…順調です、実験は成功して、あとは目覚めるのを待つだけです…夕刻頃になりそうです…」

　リオンが居る場所は生産工場エリアの一つでそこにはカプセルが七つ並べられており、周りには研究者が念入りに検査していた。

「そうか、利用価値のある物はすべて我が物にする…標的はこちらに向かっている頃だろう…そろそろ準備しておけ…」

「了解しました…報告終わります…」

　〝鴉の眼〟はリオンとの通信を切り、目を凝らして劇薬の極秘データの分析を続けた。

「……さ……ゆみ…起き……て……」

「……！！！」

　サユミは、かすかに聴こえる声に反応して、目をぱっちりと開けた。彼女の目の前にはアヤコが居た。

「…そろそろ目的地付近に着くよ、晴れていたら良い景色なんでしょうね～」

　サユミたちは、車中から〝鴉の眼〟のアジトがある山が見ようとするが、あいにくの悪天候で視界不良であった。運転役のアヤとクミコは慎重にハンドルを捌いて、山道へと進んだ。彼女たちは、山の中間地点にテントを張って、ひとまず待機しようとした。そんな中、サユミとアヤコは雨を浴びながら棺桶くらいの大箱を運んで適当な場所で降ろした。

「悪いね、付き合わせちゃって…」

「いいよ、力仕事なら任せてよ…これって何かの秘策？」

「まあね、プランＣってやつよ～…さあ、雨が激しくならないうちに片付けましょうか～手伝って…」

　サユミはそう言って、アヤコと共にせっせとシャベルで穴を掘って謎の大箱を埋めようとした。それから天候は悪化していく一方で、台風のような風が吹き、木々は折れそうなくらいに反っており、とてもテントで待機出来る状態ではなかった。そんな時、彼女たちは大きな洞穴を見つけて、そこを待機場所にして、それぞれ決戦のための準備を始めた。

　それから一時間近く経ち、サユミたちが居る洞窟付近に一つの人影が現れた。その正体はクミコで、彼女は吹き荒れる嵐の中、敵地の偵察に行って戻って来たのであった。

「う～えらい目に遭った…これだけ酷い天気も珍しいね～」

「ご苦労様～」

　クミコは洞窟に入ると、すぐさまズブ濡れの雨具を脱いで、仲間が囲んでいる焚火で暖を取ろうとした。そして、サユミたちに偵察で得た情報を伝えようとした。

「…奴のアジト周辺をざっと見てきたけど…ここ、居住区となっている場所には一般の信者はおらず、武装している見張りが何人か居たわ…それに狙撃手も潜んでいて対空への備えも万全…警備は厳重よ…」

　クミコは、地図を広げて敵地アジトの現状を説明していた。サユミは、眉間に皺を寄せて昨夜に忍びこんだ時と比較していた。

「以前と対応が違うわね、天気が良かったとしても、空から行かなくて正解だったかも…狙い撃ちされていたわ……研究所の近くには行ったの？」

「ええ、出入り口付近にも見張りが居て、無線で連絡を取り合っていたわ…慎重に研究所周辺を調べたけど、安易に忍び込めそうにないわね…」

「強行突破しかないってことか、仕方ないわね、皆、力を貸して！」

　サユミは利き手の手の甲を差し出し、同期メンバーはそれに続いて自分の手を重ねていき、団結力を高めて過酷な任務に挑もうとしたのであった。そして、彼女たちは行動に移る前に腹ごしらえをしてから出発し、荒れた山道を突き進むのであった。

しかし、歌劇団部隊は常人を遥かに超えた身体能力を持っているため、軽快な動きで目的地付近に辿り着こうとした。

一方、〝鴉の眼〟は司令室でサユミたちが来るのを待ち侘びていた。また、もう一つ気になることがあり、そちらの報告を待っていた。

「…ボス、お待たせしました、予定通り、夕刻に目覚めました、特に異常はないようです…どうしますか、早速働いてもらいますか？」

「ああ、勿論だ、そろそろやって来るはずだ…昨日より面白いショーが見られるぞ」

「…了解しました、私も持ち場につきますので…それでは…」

〝鴉の眼〟は、リオンからの吉報を受けて不敵な笑みを浮かべた。そして、監視映像で外の様子を窺った。

「……酷い景色だ、確か…あの時も同じような天気だったな…古傷が疼くよ…」

〝鴉の眼〟は、ふと一年前にサユミやリカと死闘を繰り広げた時を思い出した。その時も台風の影響で天候は荒れ模様となり、今回と同じように山中での対決であった。〝鴉の眼〟に苦い記憶が蘇り、気分を害して黙り込んだ。

それから時間が流れ、サユミたちは〝鴉の眼〟のアジトを目の前にして、どう攻めるかを話し合った。

「…あんたの班は、いつもどう動いているんや？」

サユミは、アヤに質問された。

「分かれて行動してるよ、それぞれ役割を決めて慎重に任務を遂行するけど…」

「私は以前、サユミの班に長いこと属していたから知ってるよ、その手で行く？」

アヤコが腕を組みながら頷き、他メンバーの意見を求めた。

「……別にそれでいいで、みんな一緒にくっついても仕方ないな…動きやすくていいわ…」

「私も異議なし……私も……わ…」

同期メンバーは即答して、サユミの班の侵入方法に満場一致であった。彼女たちは別行動を取

って侵入しようとした。

「……！？」

　その時、物音がして敵地上空を見ると、戦闘ヘリが二、三機飛んでおり、サユミたちに照明を当てて、さらには警備がその場を取り囲み、窮地に追い込んだ。

「ずっと待ち伏せしていたみたい…」

「……思ったより勘が鋭い連中だね、モタモタしすぎたかな？」

　エリカとヒコトは、淡々と感想を述べた。

「…まあ、こうなることは想定内だけど…どうする？やっぱり一緒になって戦う？」

　クミコは得物を抜いて、他メンバーに訊ねた。

「…時間稼ぎなのが見え見えだね、こんな所でちまちまと戦ってられないでしょう？二手に分かれた方が良いんじゃないの？」

　エリカは、一つ提案した。

「…そうした方が良いよ、分かれて行動した場合、かなり時間が短縮出来る…」

　マイは、専用端末を使って、独自で戦略を分析した。

「…決まりやな、私が囮になるわ」

「私も残るよ、外の方は思いっきり暴れられるからね…」

「…じゃあ私も残るよ、二人が無茶しないように見張ってないと…」

　アヤ、クミコ、ヒコトは挙手して囮になることを決意した。

「…じゃあお願い、残りのメンバーは研究所に向かうということで…」

　サユミは同期メンバーに指示をして、強行突破しようとした。

「…ドババババ、パパン…ドドンドン…！」

　その時、山中で銃声や爆音が鳴り響き、その場は瞬く間に戦場と化した。

「…相手の数はざっと百五十人弱…一人につき五十人ってところかな…」

「調子に乗って、もっと倒しちゃうかもしれへんで～」

「油断は禁物よ、何か嫌な予感がする…」

　囮役の三人は気合を入れて、目の前の敵に挑もうとするが、ヒコトの言ったように妙な影が潜んでいるようで戦いの行方は掴めずにいた。どうにか包囲網を突破したサユミ率いる侵入班は、囮となった仲間の無事を祈って前に進むしかなかった。

　一方、〝鴉の眼〟は司令室で監視映像を気にしつつ、各方面からの報告を心待ちにしていた。

「……ボス、ご覧になっていると思いますが、現在、森林Ｂエリアで交戦中…警備の相手をしているのは三人とのことです…目標を含めると合計七人…参戦していることに…」

「…また新たな助っ人を呼んだようだが、たった七人で何が出来る？サユミ以外は殺しても構わない、徹底的に潰せ」

「了解しました、進展があれば報告します」

　〝鴉の眼〟はリオンの報告を受けて余裕の表情を崩さなかった。

「…人質の女をここに連れて来い、助けに来た仲間の死にざまを見せてやりたい」

　〝鴉の眼〟は勝利を確信し、二階堂と共にサユミたちの死闘を見届けようとした。

　サユミはひたすら前に突き進み、後に続く仲間たちは彼女を必死に援護した。気づけば研究所を目の前にして、彼女たちの神経の高ぶりは簡単に治まりそうになかった。彼女たちは警備を蹴散らして、ついに悪魔の研究所に足を踏み入れようとした。

「…何度来ても慣れないね、嫌な空気が漂っている…何が起きてもおかしくない…」

「迷路みたいになっていないだろうね？一度来たあんたが頼りだよ……」

「…さて、私も攻略したわけじゃないからね…別の場所に思えてくるよ……？」

　サユミとアヤコが緊張感を持つ中、マイは何か困っている様子であった。

「…どうしたの？」

「……ここのセキュリティー環境のハックが上手くいかなくてね…誰かが裏で操作しているみたい…」

「…おかしいね、昨夜はフジコが対応して上手く出来たみたいだったけど…」

「…悪いけど、調べさせて、直接システムを管理している場所に行くしかない…」

「…良いけど、一人で大丈夫なの？」

「私が付添うよ、雑魚は外に集中しているようだし、二人なら大丈夫でしょう？」

　エリカが一つ提案して、サユミたちはそれに同意した様子であった。

「施設内のマップはひと通り閲覧出来るから、そう迷子にならないでしょう、用事を済ませたら合流して…外の三人にも伝えてある…」

「…武運を祈っているわ、それじゃあ行きましょうか…！」

　こうして、二手に分かれることとなり、マイ、エリカはサユミたちから去って行った。

「…やはり人数が減って行くと、静かになるもんだね～こうして二人で行動するのも久し振りだね～…それで私たちはどうする？リーダー…」

　アヤコは、サユミの指示を待った。

「…うーん、捕まった後輩や愛美が居る場所を突き止めたいけど、難しそうね…とりあえず中央エリアに向かいましょうか…生産工場があるはずよ、奴が現れるかもしれない…！」

　サユミたちは、〝鴉の眼〟と接触するため、中央を目指して駆けて行った。

　同じ頃、囮となったアヤ、クミコ、ヒコトは敵の数に圧倒されつつも、まだ劣勢にはなっていなかった。相手が全滅するのも時間の問題であった。

「……少ししぶといけど、どうにかなりそうだね…何人倒した？」

「そんなのいちいち数えてられないよ、皆同じような顔して不気味ね…まるで人形みたい…これが例の自然の摂理に反して生まれた人間？」

「…そうみたいや、目は死んでいるけど、良い動きしているわ、久々に楽しめそうや」

　アヤたちは〝鴉の眼〟の兵隊に怯むことなく戦い続けた。

「…ドルルルルルルル…ドバ…ドルル…」

　その時、戦闘ヘリがアヤたちに襲い掛かって動きを封じようとした。

「目障りだね、そろそろ墜とすか…」

　クミコはそう言って装填した後、高木に飛び移った。そして、彼女は目標に照準を合わせて、自分のタイミングで引き金を引いた。

「……ドン……ドドン」

　クミコが撃った弾は、見事にヘリのエンジンとリアローターに命中した。そのヘリは、エンジン破損に加えて操縦不能となり、そのまま墜落していった。アヤとヒコトもそれに続いて反撃しようとした。

「さあ～かかって来い！」

　アヤもクミコと同じように高木に飛び移って、ヘリが接近してくるのを待った。

そして、彼女は大胆にもムササビのように滑空して、ヘリの前方に貼りついた。パイロットたちは錯乱状態となり、操縦を誤った。アヤは、Ｃ―４（プラスチック爆弾）を仕掛けて、その場から去って行った。

Ｃ―４を仕掛けられたヘリは木々に絡みついて爆発を起こした。

「私も格好良く決めよ～」

　ヒコトはそう言って、高木で待ち構えていた。残り一機のヘリは機関砲を乱射するが、彼女は一切怯まなかった。

「…！キン！」

　ヒコトは、ヘリの下部に目がけて超人的な跳躍力で飛んで抜刀した後、エンジン部分に尋常じゃない破壊力の突きを浴びせた。彼女の攻撃はそれで終わらず、突いた後に剣を抜かず、そのまま一直線に進んでヘリを斬った。勿論、そのヘリは無事では済まなかった。これでヘリ部隊は全滅したのであった。

「すっきりした～これで戦力は不利になったはず…残りを片づけようか……！？」

　ヒコトは、ひとまず安堵の表情を浮かべるが、それも束の間、ある異変に気づき始めた。アヤとクミコもその異変に気づいていた。少数となった警備はいつの間にか姿がなく、さっきまでの騒ぎが嘘のように静まり返っていた。しかし、完全に人気が無くなったわけではなかった。彼女たちは、妙な気配が感じ取って動揺していた。

「…新手か？さっきまでの相手とは違うで…！」

「ああ、ここからが本番のようだね」

　アヤとクミコは武者震いしながら山中の暗闇に潜む標的を待ち構えた。

「……！？……そんな……！」

　同期三人組は、目の前に現れた人物を見て度肝を抜かれることとなった。

　一方、マイ、エリカ班は、研究所のセキュリティー環境にハッキング出来ない原因を突き止めるために管理している場所へと向かった。

「……この先にある監視室に行けば何か分かるかも…」

「そこの突き当りを右ね……ってあれ？行き止まり…？」

　マイたちは、専用端末に保存されたマップを頼りに探索するが、何故か思った道と違っていていた。

「…道は間違っていないはずよ、この先に道があるはず…こんな所に壁なんて…」

「サユミも嫌な顔してたけど、まさに迷路ね…時間を無駄に使っているわ」

　エリカが苛立ちを隠しきれない中、マイは入念に行き止まりの場所を調べた。

「……！」

　マイは、壁に触れた途端、表情が一変して何やら作業を始めた。

「あんた何やってんの？自棄になって破壊活動でもする気？」

「…いいから、いいから、ちょっと離れて」

　エリカはマイの行動が読めないまま指示に従った。マイは問題の壁に小型爆弾を仕掛けた。

「…ドガ！」

　マイは淡々と起爆スイッチを押して、壁を爆破させた。エリカは相方が血迷ったのではないかと心配したが、予想外の結果が展開しようとしていた。

「…ん？この壁、おかしい…奥に空間がある…これって…」

「…ダミーよ、張りぼてで道を塞いでいたのよ、私たちの進路方向を読んで事前に設置しているんでしょう、これも時間稼ぎのため、私の目は誤魔化せないわよ」

「からくり屋敷みたいね、馬鹿馬鹿しいけど、まんまと騙されたわ…これで安心して進めるね…」

「早く私たちを罠にはめた奴の顔を拝みたいわ…」

　マイたちは姑息なトリックを見破り、先へと進もうとした。セキュリティーの管理者は若干焦りの表情を浮かべて、次の手を打とうとした。彼女たちは急いで目的地を目指そうとするが、また新たな困難に直面しようとした。ダミーの壁を気にせず、突き進む彼女であったが、また道

に迷っている様子であった。

「…あれ？ここを曲がるとエレベーターホールがあって非常口の階段があるはずだけど…今度は本当に間違った？」

　またもや、進路を妨げられた二人であったが、マイは既にトリックを見破っていた。

「……これもダミーよ、さっきの壁に違った景色の映像を映しているだけ…たやすいことよ」

「成程、映像のトリックか、あほらし…」

　エリカはそう言って、ダミーの壁を愛用しているサーベルで叩き斬った。すると、本当の道が現れた。彼女たちはそのまま宇上のフロアに進もうとするが、また、ある異変に気づいた。かすかに物音がして、それは徐々に大きくなって二人に接近していた。

「…あれって…！？」

　マイたちの前に突如現れたのは、小型無人機であった。それは知能がある獣のようで獲物の二人を捉えた。

「何か…やばいんじゃないの？ここは…」

「逃げた方が良いかもね…！」

　マイたちは無人機の相手をせず、逃げることに集中した。

「…ピピ」

　小型無人機はマイたちを攻撃目標にして、装備された銃火器を発射した。彼女たちは死にもの狂いで階段を駆け上がるが、小型無人機は飛行速度を上げて、しつこく追跡した。彼女たちは一切反撃せず、攻撃を避けながら監視室へと向かった。

「……ドカ…！！」

　マイたちが突き当りを曲がると、何か障害物に衝突した。それはダミーの壁ではなく、人のようであった。

「いてて…何よ、この忙しい時に…！」

「……！！？」

　その時、マイは衝突した者と目が合い、冷静さを失いつつあった。

「……何で？」

　エリカは唖然として、目の前に現れた人物に疑問を投げ掛けた。後方の小型偵察機も追い着き、彼女たちは予想しなかったことを体験することとなった。

　一方、サユミ、アヤコは中央の工場エリアを目指して、無事に辿り着こうとしていた。彼女たちも進路を妨げるトリックに気づいており、何も問題なかった。

「…にしても質が悪い悪戯だね、子供騙しだわ、私たちをなめすぎよ」

「……そうとも限らないんじゃない？私たちだから見破れられたけど、経験が浅かったらどうなっていることか…恐らく、捕われた仲間はこの罠にはまったのよ、ここのあらゆる仕掛けに翻弄されて錯乱状態となったかも…」

「…成程、そういえば私も奴に誘導されてこの辺りまで辿り着いたわけだから偉そうなこと言えないわ…」

「…長年の経験がものを言うってことよ、表の世界に関しても私たちの方が長いわけで…修羅場の数も私たちの方が多く潜り抜けているからね、良いお手本にならないと…」

「上に立つ人間なのに面目ない…」

　サユミは、改めて大切な仲間を奪われたのを恥じて深く反省していた。彼女は失敗をバネにして仲間の救出に取り組もうとした。だが、禁断の場所に着く前に予期せぬ障害が彼女たちを襲おうとした。

「……何か近づいて来る、警備の者？」

　サユミたちは迫ってくる気配に用心して思わず足を止めた。人影は二つあり、どうやら警備ではないようであった。やがて、謎の人影は彼女たちの前に姿を現して衝撃の展開が待ち受けることとなった。

　サユミたちが〝鴉の眼〟のアジトを襲撃してから数時間経ち、気づけば激しい雨は止んで風も弱まっていき、分厚い雲から月が顔を出そうとしていた。気候が安定して、穏やかな夜に変わろうとしていたが、アヤ、クミコ、ヒコトは休む暇がなかった。彼女たちは、新たな敵と相見えることとなり、戦闘を繰り広げることとなった。

「…一難去ってまた一難…なかなか味な真似してくれるね…」

　ヒコトは、呟きながら謎の敵の銃撃を避けていた。

「……全くや、奴はかなり根性悪いで…」

　アヤは無線でヒコトに語りかけて、猿のように木を渡っていき、謎の敵と闘おうとした。

　クミコは無言のまま気を集中させて、新手の場所を探っていた。彼女は、味覚以外の感覚機能を最大限に働かせて山路を歩いていた。

「……」

　謎の敵の方だが、完全に気配を消して木上に潜んでいた。クミコはそれに気づかず、そのまま捜索を続けていた。謎の敵は、気配を悟られないよう注意して、攻撃する機会を窺った。

「……！！？」

　クミコは頭上に居る謎の敵の存在に気づかず、後方から奇襲を受けた。謎の敵は彼女にヘッドロックを掛けて殺めようとした。

「……ぐえ！！」

　クミコは、ヘッドロックを掛けられた状態で後方に謎の敵を押し出した。謎の敵は後方の木に叩き付けられて、ヘッドロックは解かれた。彼女はヘッドロックを解いた後、一旦謎の敵から離れて得物を構えた。

「…けほ……今の奇襲はなかなか良かったよ、何の迷いもなかった…どうやら本気のようだね…」

　クミコは、冷静さを保ちながら新手に話し掛けた。彼女は謎の敵と顔見知りのようであった。

こうして、同期三人組は衝撃の第二幕に突入しようとしていた。他メンバーも同じようなことを体験することになって混迷を極めていた。

「……まさか…こんなことになるとはね…気が進まないけど、相手になるよ」

　エリカは動揺を隠せないまま、目の前の新手と闘うため、得物のサーベルを抜いた。

「……そっちは任せるよ、相手は手強いよ、手加減はしない方が良いかも…」

「……心遣いどうも、そっちも気をつけてね…あの小さなストーカーは任せた」

　マイは頷いて、追跡する小型無人機の相手をしようとした。

「…それではまた後で…」

　同期二人組は一旦別れを告げて、それぞれの敵と対決することとなった。

　最後にサユミ、アヤコ同期二人組は、目の前に立っている二人に人物に驚きが隠せなかった。

「…どうしてこんな所に？捕まったんじゃなかったの？丁度捜していたの…」

　サユミたちに前に現れたのは、後輩で歌劇団部隊のシオリとミナミであった。サユミたちは突然の再会で安心と興奮が入り混じった。

「…私も以前、あんたの班に居たから、この娘たちのことを覚えている…見違えたわね、成長したことが分かる…」

「……」

　先輩たちが救出したのにも関わらず、シオリたちは少しも表情を変えず、声を発することなかった。サユミたちはそんな二人を不審に思い一歩下がった。

「彼女たちの様子がおかしいわね、まさか偽物？」

「…本物に違いないけど、彼女たちの気が感じられないわ…まるで抜け殻のよう…無闇に近づかない方が良い…」

　サユミたちが話し合っていると、シオリたちは怖い顔でゆっくり前進して、殺気を発していた。

「…別の意味で歓迎しているみたいね、ここは簡単に通してくれそうにないわ…」

「…ちっ、何処までも汚いわね……！！」

　サユミは、ふと以前受けた適性試験のことが頭の中に過った。シミュレーションテストの任務で現れた敵が同じ歌劇団のメンバーだったことを思い出したのであった。彼女はあまりのショックにより、現時点で巻き起こっていることを受け止められそうになかった。

「……ユミ…サユミ、大丈夫？ぼけっとしてられないよ…！」

　サユミはアヤコの声で我に返った。シオリたちは、フォーメーションを取り、攻撃を仕掛けようとした。

「…♪～」

　シオリは、武器として使用しているハープを奏でた。美しい音色であるが、それは地獄に招く罠であった。当然ながらサユミたちは彼女の戦法を読んでおり、恐れることはないように思われた。続けてミナミがサユミに襲い掛かろうとした。

「…おっと今はこっちの大将なんでね、手荒な真似はよしておくれ…」

「アヤコ…！！」

　アヤコがサユミを庇って、ミナミを押さえこんだ。歌劇団部隊の力自慢対決となり、手に汗握る勝負が実現した。

「…ボゴ！」

　アヤコは、ミナミに思い切り体当たりをして、後方のシオリを巻き込んだことで、ドミノ崩し状態を起こした。

「よし、ここは私に任せな…あんたはこの先を進むんだ…！」

「…え、でも…」

「考えている暇はないよ、あんたの手で奴を倒さないといけない…私たちは放っておいても大丈夫だよ、必ず後から駆け付ける、皆、同じ気持ちだよ…」

「……分かったよ、皆の無事を信じている、その娘たちを元に戻してあげて…」

　サユミは、苦渋の決断で仲間を見捨てて、その場から去ろうとした。シオリとミナミは攻撃対象をアヤコに定めて、再度、フォーメーションを組んだ。

「さあ、稽古をつけてあげるよ」

　アヤコは何の迷いもなく、敵となった後輩と闘おうとした。彼女は手加減する気はないようであった。これでサユミたちに立ちはだかる謎の敵の正体が明らかになろうとしていた。外でアヤ、クミコ、ヒコトが闘っているのも捕われた後輩の歌劇団部隊であり、アヤはレイ、クミコはアン、ヒコトはアキラを相手に死闘を繰り広げていた。また、エリカと闘っているのはサヤカであり、マイを攻撃する小型無人機を操作しているのは、フジコであった。彼女たちは思いがけない再会を果たし、敵対する関係となっていた。勿論、同士討ちを演出したのは〝鴉の眼〟であった。

「……お手並み拝見といこうじゃないか、これからが見応えあるものになる…」

　〝鴉の眼〟は、監視室でサユミたちの苦しむ姿に酔いしれてモニタリングしていた。それに対し、二階堂は見るに堪えず、俯いた状態になっていた。

　独りとなったサユミは、苦悩しつつも中央の生産工場を目指した。こうして、サユミと〝鴉の眼〟の決着の時が刻々と迫っていた。

第八話　蒼眼の騎士

　サユミ率いる同期の歌劇団部隊は、人質となった仲間を救うべく、宿敵〝鴉の眼〟に立ち向かおうとした。その夜、長時間、大荒れの天候に見舞われて、〝鴉の眼〟のアジトがある山中は多大なる被害に遭っていたが、ようやく治まっていき、静寂を取り戻そうとしていた。

　ただ、サユミたちの任務はまだ遂行出来ておらず、難航して悪化の一途を辿っていた。同期メンバーの目の前には、それぞれ救出すべき歌劇団部隊のメンバーが現れて、彼女たちは血迷ったのか、助けに来た先輩に牙を剥けた。今の同期メンバーに彼女たちを救う策はなく、応戦するしかなかった。

　サユミは仲間の心配をしつつも、中央の生産工場スペースへと向かった。

「……ここね」

　サユミは、問題なく生産工場へと辿り着き、扉は彼女を導くようにして開かれた。

「…！！」

　サユミが中に入ろうとすると、降りるための階段があり、研究のための機材や設備は一切存在せず、以前と違って様子が変わっていて殺風景であった。彼女は困惑しつつ階段を降りていった。

「**……**ようこそ、前来た時と環境が違うから驚いただろう？ここには大事なものがあるんでね**…**壊されては困るので片づけさせてもらった」

　突如、〝鴉の眼〟のアナウンスが流れ、サユミの表情は険しさを増した。

「…隠れてないで出て来なさい！あなたには訊きたいことが沢山ある…！」

　サユミの覇気のある声が室内に響くが、〝鴉の眼〟は姿を現そうとしなかった。

「悪いがまだ会うわけにはいかない、声でだけで勘弁してくれ、そのかわり、いいものを見せよう**…**」

　〝鴉の眼〟がそう言うと、サユミの目の前の壁一面に映像が流れて、それには〝鴉の眼〟と硬

い表情の二階堂が映っていた。

「愛美…！」

「君の友人は今のところ、大事に預かっている…彼女と一緒に君たちの成り行きを見学しようと思う…」

「…愛美に何かすれば、ただでは済まないわよ…！」

　サユミは、目の前に映る〝鴉の眼〟を殺気立った目で睨み付けたが、彼は全く動じず鼻で笑った。

「ふ…君にはやるべき課題がたくさんある…もうゲームは始まっているんだ…」

「…！！」

　サユミは、ある映像に切り替わったことで表情が一変した。

「…君の仲間はもうゲームに参加している…君にとっては地獄絵図だろう…」

　サユミは、同期メンバーと後輩メンバーが敵対して死闘を繰り広げているのを目にした。

「酷いことを……！後輩に何をしたの？」

「君たちの助けを静かに待っているだけでは退屈かと思ってね…私の兵隊として働いてもらうことにした…」

「…洗脳したのね…？」

「ああ、ただ、私の力ではない、新薬を試した、例の劇薬のように変異効果はないが、通常以上の身体能力が身につき、潜在能力が開花される可能性が高まる…何といっても洗脳効果は抜群でね…私とリオンの声にしか反応しない…優秀な操り人形だよ…」

　〝鴉の眼〟は、後輩メンバーを洗脳した経緯を得意げに話して、サユミの苛立ちは頂点に達していた。

「…同士討ちか……確か、以前も同じようなことをしていたわね、その時は私を洗脳してリカ先

輩と闘わせた…よほど気に入っているのね、安っぽい演出だけど、三流にしては上出来だわ…」

「**…**褒め言葉として受け取っておこう、君たちの潰しあいを見ていると、実に愉快なんでね**…**それにいっぺんに片づけるには手っ取り早い」

「…まあそうね、自分の手を汚さず、邪魔者を消す…あなたらしい卑劣な手口だわ」

「そろそろ君にも参加してもらうよ、とっておきのカードがまだ残っている**…**！」

〝鴉の眼〟がそう言うと、サユミが居るエリアに一つの人影が現れた。

「…あなたは！」

サユミの目の前に現れたのは、リオンであった。

「君にはリオンの相手をしてもらおう、前回の決着がまだだろう？友人に会いたいのなら、まず目の前の標的を倒すことだ」

「…いいわ、ゲームに付き合ってあげる、こんな人形なんてすぐに片付けるわ…」

「…聞き捨てならないな、私もれっきとした人間だ、君たちより優れているしね…」

「…喋り方までボスに似てきたわね、私たちの細胞で造られたのならもう少し性格格が良いと思ったけど残念だわ…」

「こちらも君を姉として接しようとしたけど、それも実現出来そうにないな…」

「うちは兄弟居なくて欲しいと思ったことあるけど、あんたみたいな化け物はお断りよ、性別も分からないんじゃね…」

「では、お互い敵として迎えるしかないようだ、今度は容赦しない、仲間と一緒に黄泉の世界に送ってやろう」

「そっくりそのままお返しするわ、ここはあんたたちに相応しくない場所よ…」

サユミは、自分の分身ともいえるリオンに立ち向かうこととなった。

一方、同期メンバーと洗脳された後輩メンバーは熾烈な戦闘を続けていた。

アヤ対レイ戦

アヤとレイはお互いの身体能力を活かして森中で格闘していた。

「……結構すばしっこいな、ちゃんと鍛えているのがよく分かる…その動き、体術、パルクール…これはちょっと厄介かな？」

アヤは、相手のレイの動きを分析して呟いていた。レイは彼女に応答せず、攻める一方であった。

「…ちっ愛想がないな、これでも先輩やで～動きは良いけど魂がこもってないで～」

アヤはそう言いながら木を渡っていき、レイの攻撃を紙一重で避けていた。

「…！」

その時、レイの目つきが鋭くなり、動きに変化が起きた。

「…あらら、ちゃんと話聞いてるやん～向きになっちゃって可愛いな～」

「…バゴ！」

その時、アヤは油断してレイの強烈な蹴りがクリーンヒットした。アヤはそのまま落下して地面に叩き付けられた。

「…いてて、今のはちょっと効いたで…！」

レイは攻撃を止めず、そのままアヤの方に落下しようとした。アヤは咄嗟に転がっていき、体勢を立て直した。

「油断も隙もないとはこのことやな、こっちもぼちぼち本腰入れるか…」

アヤは、そう言って顔つきが変えて戯言を呟くことはなかった。レイの猛攻は止まらず、至る場所から襲いかかり、アヤを翻弄した。しかし、アヤは怯まなかった。

「さっきのお返しや…」

　アヤは大木の枝にしがみつき、そのまま鉄棒の演技のように回転させ、伸ばした両足を向かってくるレイに目がけて当てた。

その攻撃の威力はレイに蹴り技以上で、かなりのダメージを受けたようであった。

「……！！」

　レイは、なかなか起き上がることが出来ず、アヤは攻撃をせず、彼女の反撃の時を待っていた。

「…ザザ」

　レイは再びアヤに襲い掛かろうと素早いフットワークを見せるが、アヤは全く動じず、冷静に彼女を目で追っていた。そして、アヤはある物を用意した。それはフラフープでふざけていると思えるが、彼女は至って真剣でそれを例に向けて投げた。

「…！！」

　レイは、アヤが投げたフラフープの輪に入り、それは縮まっていって彼女を締めつけようとした。

「はい、いっちょあがり～♪」

　アヤは勝利を確信して、身動きが取れないレイに近づいて行った。アヤの武器であるフラフープは百キログラム以上あり、レイは抵抗出来ず、体力を奪われて大人しくなった。

「…チャキ」

　その時、アヤは小銃を取り出して、殺気が薄れていくレイにそれを突きつけた。

「…悪いね」

　アヤがそう言って弱ったレイに引き金を引いた。

　クミコ対アン戦

「…ドンドン…キン…ガキン」

　クミコとアンは、互いの得物を使って闇の森にまだらな光を与えて戦闘を続けていた。

「成程、あんたが専門にしているのは隠密体術…つまり忍術…時代の流れで失いつつあるけど、私たちの戦法の基となっている…鍛練を積んで極めつつあるね…」

　クミコは、アンの動きを分析しつつ、感心していた。アンは口を利かず、血眼になってクミコを追跡していた。

「…ピン……！？」

　その時、クミコはワイヤーのような物に触れて、その直後、彼女に向かって手榴弾が二、三個放たれた。それは大爆発を起こして周りの木はなぎ倒されていき、クミコの姿はなかった。アンは表情に出さないが、密かに優勢であることを思った。

「……ドン！」

　その時、銃声が鳴り響き、油断したアンは弾を避けようとするが、右肩にそれが掠った。彼女が振り向くと、銃を撃ったクミコの姿があった。

「トラップか…この森はあんたの領域…私に逃げ場はないってことね…」

　アンはクミコに恐怖心を植えつけられ、表情が歪んだ状態でその場から逃げようとした。クミコはすぐに追わず、何か目論んでいる様子であった。

「…今度は私が鬼か…そろそろ終わりにしようか…」

　クミコはそう言って、平然とアンを追跡した。アンはクミコからかなり離れた場所に居て、ひとまず物陰に隠れて様子を窺っていた。そして、アンはクミコの姿を捉えて、徐々に距離を詰めて行った。彼女にはまだ秘策があるようであった。

「…ピン……！！？」

　その時、クミコはまたアンのトラップに掛かり、ワイヤーに触れた途端、彼女に目がけて四方八方から無数の苦無が放たれた。アンは、標的に苦無が突き刺さる音を耳にして、今度こそ勝利

を確信したようであった。アンは、クミコの状態を確認しようと姿を見せた。

「…？」

　今度は確実に仕留めたと思ったアンであったが、何故か彼女は浮かない顔であった。クミコは苦無の餌食にされたと思われたが不審に思い、アンは自分の目で確かめようとした。

「……！！？」

　アンは倒れ込んだクミコの姿を目にして、飛び上がりそうになっていた。苦無が突き刺さっているのは本人ではなく、彼女の上着を着せられた丸太であった。

「…チャキ」

　気づけば、アンの背後には装飾銃を突きつけるクミコの姿があった。

「…私も忍びの心得があるんでね、まだ続ける？」

　アンは悔しさのあまり、クミコの挑発に乗ろうとした。

「…？」

　アンは反撃しようとしたが、体に異変が起こって苦しさを訴えた。

「ようやく効いてきたか…」

　クミコは、アンの体の異変の原因について知っており、得物を静かに下ろした。一発の銃弾がアンの体に掠った時に勝敗は決まっていた。それには神経を麻痺させる薬物が含まれていた。

「そちらは五感に頼り過ぎたね…こっちは経験を頼りに…って聞いてないな…」

　アンは体の自由を奪われて、そのまま気を失った。クミコは得物を納めて勝利を手にした。
　ヒコト対アキラ戦

　ヒコトとアキラの戦闘区域は、炎が広がり、森を赤く染めていた。その原因はほとんどアキラで、彼女は重火器をいくつも装備していて、それでヒコトを追い詰めようとした。

「……やれやれ、ここは紛争地域じゃないのよ…好きに暴れちゃって…山火事にでもなったらどうするんだ…」

　ヒコトは茂みに隠れて様子を窺おうとするが、アキラは暗視ゴーグルや熱源探知装置を備えているため、彼女の姿は丸見えであった。

「……ずるいぞ～！」

　　ヒコトはすぐに見つかり、文句を言いながら銃弾の雨をひたすら避けていった。

「…こっちは刀一本で相手しているっていうのに…先輩なんだから少しは労わらんかい！」

　アキラはヒコトの言ったことに無反応であった。さらに彼女は戦闘機をも撃ち落とせるミサイルランチャーを構えていた。

「何処から持って来たんだ？そんな物騒な物……あんたは私と一緒で一番まともな人だと思ったのにな～」

　ヒコトは落ち込んだ振りをしているが、アキラは容赦せず、本気で彼女を始末しようとしていた。

　アキラは、ミサイルを発射して止めを刺そうとしたが、ヒコトは怯まず、一歩もその場から離れようとしなかった。

「…私をその気にさせるからいけないんだよ～」

「……！」

　アキラはヒコトに押され気味になるが、気を取り直して照準を合わせた。

「…度胸あるけど、今のあんたに勝ち目はないよ…」

　ヒコトはアキラに忠告して、居合の構えをした。

「ビュオアアアアアアアア！！」

　ヒコトはミサイルが発射される直前に抜刀して斬撃を放った。彼女の斬撃は、森中の広範囲の

炎をかき消して竜巻を発生させる程の威力であった。アキラはその竜巻に飲みこまれて、ダメージを受けながら上空で舞っていた。ヒコトの起こした竜巻は、徐々に勢力が治まっていった。宙に舞ったアキラはようやく解放されて地に着こうとするが、ヒコトの攻撃はまだ終わっておらず、第二波が迫っていた。今度は前方に斬撃竜巻を起こして、アキラは抵抗できないまま、岩壁に叩き付けられた。彼女はちゃんと息があり、気を失ったようであった。

「あっいけね、やりすぎた…」

　ヒコトは我に返り、愛刀を鞘に納めた。これで外の戦闘は幕を閉じようとした。

「…こちら、クミコ…そっちは片付いた？」

「……ええ、今終わったところよ、そっちは問題ないの？」

「問題ないわ、ちょっと強引だけど、仲間を救出したわ、アヤも一緒に居るわ…」

「かなりのじゃじゃ馬だったけど、特注の麻酔弾でやっと静かになったわ～」

「こっちもやっと大人しくなったわ、手間が掛かる後輩ね～」

「外は完全に沈黙したわ、あとはあの研究所だけ…加勢に行きましょう」

「了解…合流するわ」

　アヤ、クミコ、ヒコトは気を失った後輩を連れて、研究所の方へと向かった。

　同じ頃、研究所内でも同期メンバーと後輩メンバーの激闘が繰り広げられていた。
　エリカ対サヤカ戦
　エリカは、サヤカの特殊能力で体が自由に動けずにいた。

「怖い顔で見ないでよ、可愛い顔が台無しよ、あんたのことはサユミやマイから聞いているわ…マイと班が一緒の時があったんでしょう？新人の時から注目されて…表でも裏でも活躍しているようね…」

　エリカは世間話をする余裕があり、サヤカは彼女の話を聞いていないようであった。

「カラン……」

　エリカの体にさらに異変が起こり、体に全く力が入らず、握力が無くなって思わずサーベルを落としてしまった。

「…？」

　その時、サヤカはエリカが落としたサーベルを拾おうとした。

「ありがとう……って返してくれなさそうだね…」

　サヤカは拾ったサーベルを自分の物のように扱って、エリカの前で構えた。

「…成程、それで串刺しってことね」

　エリカはこれから起こることを把握していたが、手も足も出ず対処出来なかった。

「…ヒュン！！」

　サヤカは、奪い取ったサーベルの刃をエリカの急所に目がけて突き刺した。

「…！？」

　これで勝負は決まったように思われたが、予想外の展開が起ころうとした。

「…よく狙わないと駄目じゃない～こんなチャンスもうないよ～」

　エリカの体の異常は無くなり、サヤカは動揺が隠せず後ずさりした。

「…おっと、それは返してもらおうか…！」

　エリカは隙を突いて、サヤカからサーベルを取り返した。

「……あんたの戦法が分かったわ、マイは私に教えようとしたけど、聞かないことにしたわ、出来るだけ自分で突き止めるのが性分なんでね…うちの班はそういう連中が多いよ…」

　エリカは、取り戻したサーベルをサヤカに突きつけて追い詰めていた。サヤカは、無言のまま冷や汗を掻いていた。

「あんたの能力の正体…それは暗示ね…相手の思考、感覚、行動を操作・誘導する心理攻撃の一種…あんたと目を合わせると一定時間、体の機能が停止して対象者は体の異常に一切気づかない…その隙に敵の得物を奪うわけね…」

　サヤカはエリカに能力を見破られて、さらに顔色が悪くなった。

「…一見、汚い手段のように思えるけど、丸腰で相手の動きを封じることは簡単なことじゃない…長年の鍛練で生み出された究極の戦法…でも、まだ未完成…中途半端では通用しないよ…！」

　エリカはサヤカの能力を分析した後、何故かサーベルを鞘に納めた。

「？」

　エリカは得物を納めた後、豹変して、サヤカを強く突き刺さるような目つきでじっと見た。

「…！！！！！！！？」

　その時のサヤカは、まさに蛇に睨まれた蛙で何一つ抵抗出来なかった。やがて、サヤカは戦意喪失して敗北を喫した。エリカはサヤカと同じような能力を披露して見事に勝利した。

「…悪いね、私も大人げないな、皆は上手くやっているかな～」

　エリカは、倒れそうになるサヤカを支えて元の穏やかな表情を浮かべた。
　マイ対フジコ戦

　洗脳されたフジコは、監視室の責任者を任されており、自慢のセキュリティーと小型無人機でマイを追い詰めていた。マイの方も黙っておらず、密かに反撃の時を狙っていた。

「…場所は近いな、そろそろゲームを終わりにしますか…」

　マイは、涼しい顔で専用端末を手際良く操作して、反撃を開始しようとした。

「…まず、あの煩いのを…」

　マイは、専用端末を追跡してくる無人機に向けた。すると、その小型無人機に異変が起こり、焦げ臭い煙を出した直後にそのまま墜落した。フジコ率いる監視チームは響きだして、事態は大

きく動くのであった。彼らはすぐさま監視カメラでマイを捜索しようとするが、何故かフリーズ状態となって対処出来なかった。

「……！」

　その時、フジコたちが居る監視室の外で物音がして、ロックされた扉が勝手に開いた。そして、テニスボールくらいの大きさの球体が数個放り込まれた。

「…何だ、これは…？…げほげほ…」

　放り込まれた謎の球体はガスを発して、それは瞬く間に室内を覆った。監視チームはガスを吸ってバタバタと倒れていき、しばらく目覚めることはなかった。撒かれたガスは催眠効果があるものであった。

「…シュコーシュコー」

　やがて、謎のガスは晴れていき、二つの人影があった。二人はガスマスクを着用しているため、催眠効果を防いでいた。

「……おっ用意周到だね～そうじゃないと面白くない～」

　ガスマスクを着用していたのは、マイとフジコであった。マイは奇襲を掛けて、形勢逆転したようであった。フジコは、表情を曇らせて言葉を発することはなかった。

「…気分を悪くさせたのなら謝るよ、ただ、こっちも負けられないからね…あの無人機が仇になったね…あれの電波を辿り、送信場所のここを突き止めたのよ、監視カメラは細工しといたわ、防御に徹すると見せかけて先手を打つ…裏を掻くことはうちでは当然のこと…あなた、賢い方だから悔しいでしょう？」

　フジコは淡々と話すマイが気に食わないようであった。

「…！！」

　フジコは腸が煮えくり返り、鬼のような顔をして、マイに襲い掛かろうとした。

「…ボゴ！」

　その時、一撃の殴打を浴びられたが、それはマイではなかった。殴打されたのはフジコで、彼女は倒れ込んで気を失っていた。

「……あれ？もう終わり…？軽くしたはずだけど……デスクワークばかりしてないで、たまには体鍛えた方は良いよ…」

　マイは気絶したフジコに忠告して、監視室を制圧した。
　アヤコ対シオリ･ミナミ戦
　アヤコは、シオリ･ミナミの連携攻撃に苦戦しているようであった。

シオリの奏でる美音と美声で心地良くなったと思ったら、隙が出来て、ミナミの猛攻を受けることになり、まさに飴と鞭であった。アヤコは、後輩の計算された攻撃に為す術がないようであったが、何故がうっすらと笑みを浮かべていた。

「へへ、よく可愛がってあげたのに恩を仇で返すとは…大した後輩だね～」

　アヤコは、口内に溜まった血を吐きだして愚痴っていた。シオリたちは、冷たい目で彼女を見たままであった。

「……悪いが、いつまでも遊んでられないんでね…次はこっちの番だ…」

　痣だらけのアヤコの目はまだ死んでおらず、反撃の体勢を取ろうとした。シオリたちは動じず、再度、連携攻撃を仕掛けようとした。

「♪～」

　　シオリの催眠攻撃がアヤコに迫ろうとするが、彼女には特に変化はなかった。

「？」

　シオリはしぶとく攻撃を続けるが、やはりアヤコに効果がなかった。彼女は平然と前進してみせて催眠攻撃が効かないことをアピールした。

「…歌の方は私も自信があるんでね…特別に披露するよ…」

「♪～」

　アヤコは、気持ちを落ち着かせて深呼吸した後、口を開いて歌い出した。彼女は低音の歌声をシオリたちに聴かせた。

「…！？」
　まず、シオリに異変が起こり、彼女が武器として使用するハープの弦が切れてしまい、演奏が出来なくなった。

「悪いね…壊しちゃって…」

　アヤコは、シオリに軽く謝って彼女の懐に入った。

「…ぐは」

　シオリはアヤコに腹部を殴打されて、そのまま気絶した。次にアヤコはミナミをじっと見て立ち向かおうとした。

「うおおおおお…！」

　ミナミは気合を入れて、アヤコと取っ組み合いをして怪力を見せつけようとした。

しかし、アヤコの表情は歪むことはなく余裕があった。そして、彼女はミナミを押し出して壁に叩き付けた。

「…私は力比べにも自信があってね…同期では私が一番の力持ち…まだまだ後輩には負けないよ～」

「…う…が」

　アヤコは、怯んだミナミに正拳突きを撃ってダメージを与えて気絶させた。それは一瞬のことであった。

「ふ～、いっちょあがり～」

　アヤコは、気絶したシオリたちを並べて寝かせて仲間と合流しようとした。こうして、歌劇団部隊による同士討ち劇場は閉幕したのであった。

「……これはどういうことだ？」

〝鴉の眼〟は洗脳した歌劇団部隊が全滅したことで顔色を悪くしていた。

「…どうやら作戦は失敗のようね、同士討ちは彼女たちに通用しないわ…」

「…黙れ！人質らしく大人しくしていろ…まだ注目のカードは残っている…！」

〝鴉の眼〟はどうにか気持ちを切り替えて、サユミとリオンの対決に集中した。

血統の場と化した生産工場スペースでは、彼女たちの激闘が繰り広げられて、若干サユミの方が押されていた。

「…どうした？さっきまでの威勢は何処に行った？人形にコケにされて悔しくないのか？」

「…煩いな、これからが本番だよ…」

「……君の力はこの程度ではないはずだ、昨夜、侵入した時…君は逃げ場を失って脱出は明らかに不可能だったはず…しかし、脱出出来た…どんな魔法を使ったか説明してほしいんだが…」

〝鴉の眼〟は、サユミに意味深な質問を投げ掛けた。サユミは当初、困惑していたが、徐々に昨夜起きたことを思い出そうとした。

「……私にもあの時、どうやって助かったか分からないわ…気づけば外に出てて……！！」

話している途中にサユミの体に異変が起こり、彼女は胸を押さえて苦痛を訴えた。

「……これは……この気だ、あの時と一緒だ…やはり…彼女のだったか…！」

「…ほほう、これはまた面白くなりそうだ、私の勘が正しければ、彼女は期待以上の展開を演出してくれる…！」

〝鴉の眼〟は気持ちが高ぶって行くばかりで、傍に居る二階堂は不安げな表情を浮かべた。

「……うわあああああああ！！！」

サユミは張り裂けそうな声で叫びだして、彼女は筋肉隆々の体型になり、さらには背が二メートル近くまで急激に伸びて、青みがかった白長髪、目つきは野獣のように鋭く、紅い瞳が特徴的

であった。二階堂はサユミの変わり果てた姿を愕然と見ていた。

「…あの姿はまさか劇薬の力？…そんな…完全に除去したはずなのに…！！」

「〝ルシフェル〟の力を完全に除去する方法など存在するものか！彼女は再び悪の化身に覚醒したのだ！」

「……そうか、あのリオンとかいう部下と接触したことで共鳴して、サユミの体内にある微量の変異体細胞が呼び起こされたのね…！」

〝鴉の眼〟が歓喜に沸く中、二階堂は密かにサユミが覚醒した原因を分析していた。怪物に変異したサユミは、リオンと目が合って、彼を攻撃対象と認識したようであった。

「…ついに本性を表したな、さて、続けるか…」

リオンは武者震いを起こし、期待と不安の中、変異したサユミを迎え撃とうとしていた。変異したサユミは容赦なリオンに襲い掛かろうとした。しかし、彼女の攻撃はあっさりと避けられてしまった。

「…劇薬の力に追いついていないな、自分のモノにしなければ実力は発揮出来ないぞ…」

リオンは冷静に忠告するが、今のサユミの耳には一切届かなかった。リオンは彼女に幻滅している様子であった。

「…制御など不可能だ…そのまま劇薬の力に弄ばれて、じき、力尽きるだろう…彼女は醜い姿で一生を終えるのだ…！」

〝鴉の眼〟はサユミの運命を読み解き、ご満悦な様子は変わらなかった。

「……ふう…ふう…はあ…はあ…」

変異したサユミは〝鴉の眼〟たちが察した通り、無駄に体力を消耗していき、今にも倒れそうなくらい、ふらふらであった。

「…おっと、休憩はまだ早いんじゃないか？もう少し楽しませろよ…」

リオンは、よちよち歩きのサユミの胸ぐらを掴んで、ぼちぼち反撃に移ろうとした。彼女に抵

抗する力はなく、地獄のフルコースが待ち受けていた。二階堂はその映像を直視出来ず、目を閉じながら絶望感を味わっていた。

　一方、場所は変わり、〝鴉の眼〟のアジトから南東へ一キロメートル以上離れた山道。そこはサユミとアヤコが謎の箱を埋めた場所であった。

「ピー…」

　謎の箱は、信号を発しながら赤いランプを点滅させていた。そして、自動的に掘り起こされて箱の蓋が開いた。

「…ジュゴ！！！！！」

　その時、箱の中身が爆音を発して射出された。それはまるでミサイルのようで、謎の飛行物体は超音速で〝鴉の眼〟のアジトを目指そうとした。

　同じ頃、アヤコたち同期メンバーは、気を失っている後輩を担ぎながらサユミが居る生産工場スペースに向かっていた。

「…こっちで合ってるの？」

「うん、セキュリティーの電源は切ってあるから妙な仕掛けを気にせずに進めるはずよ…安心して」

　マイとエリカは現場に向かわず、フジコとサヤカを見張りながら監視室から同期メンバー四人を誘導していた。

「……ん？アジト付近に反応が…何だろう？……これって……！」

「どうしたの？」

　マイは、謎の反応を調べ上げて思わず大きく口を開いて驚愕していた。彼女が発見した謎の反応が今後の展開の鍵を握っていた。

「…ここか、サユミが居る場所は！」

　同期メンバー四人は、無事に生産工場スペースに辿り着き、サユミの状態を確かめようとした

。

「サユミ…！？」

　同期メンバー四人の目に映っているのは衝撃的な光景で、自分たちが知っているサユミの姿がなく、怪物がリオンのサンドバックになっているという状況であった。

「…おや、お客さんのようだね、サユミの頼もしい仲間か…丁度良い時に来たな」

「あの人は確か…サユミと一緒に居た…」

　二階堂は、アヤコだけ知っているようであった。

「…ちょっと今の状況を把握出来ないんだけど…一人は例のサユミの細胞から誕生したリオンだよね？」

「そうやろな…何処となくサユミに似てるから…でも、あのごついのは誰や？」

「……サユミだよ」

「え？」

　同期メンバー四人は、アヤコの発言に対して自分の耳を疑った。

「ちゃんと話してなかったね…彼女は〝鴉の眼〟に妙な薬を投与されて、その結果、あの化け物に変異する能力を身につけるたってわけよ…でも確か解毒剤とかで薬の効果を除去したって聞いたけど…」

「……アヤコの説明でサユミだと分かったけど、何かやばそうよ、リオンとかいう奴、止めを刺そうとしているわ…！」

　変異したサユミは、リオンに裸絞めされていた。リオンはそのまま力を込めて彼女の首の骨を折ろうとしていた。

「…今は苦しいと思うが、じき、楽になるよ…美しい姿のままで葬りたかったが仕方ないな…もう終わりにしよう」

「…わ……たし……を…み……くびるな」

　変異したサユミは何かを言いかけていたが、まともに話せる状態ではなく、死期が近づいていた。アヤコたちは、絶体絶命のサユミを助けようと必死に彼女のもとに向かった。

「……！！？」
　これでサユミの運命が決まろうとしたが、突如、事態は変動していき、予想外の展開となった。

「…ドバゴォオオォ！！！！」

　その時、生産工場スペースの壁が破壊され、近くに居た同期メンバーがその衝撃波で吹き飛ばされた。壁を破壊した物体はまっすぐサユミとリオンが居る場所に突っ込もうとした。

「…ちっ、何だ、こんな時に……！！？」

　その時、弱ったサユミは力を振り絞ってリオンの裸絞めを解いた。そして、謎の物体の方へと向かった。

「…ド…ゴゴゴ…ンン！！」

　謎の物体は、とてつもない衝撃音を響かせてサユミたちが居る付近に落下した。

「…何事だ？監視室！状況を知らせと！」

　〝鴉の眼〟は監視室に報告を求めるが、マイに制圧されているため、彼の声が届くことはなかった。

「……いてて、急に何よ…？本当に危なっかしい場所ね…」

「…変な仕掛けが作動したんか？…サユミは…サユミはどうなった？」

　サユミを心配する仲間たちの視線の先には、煙が蔓延しており、視界が悪くなっていた。

「……これは一体？もう少しであの女の息の根を止められたのに…実に不愉快だ」

　リオンは不満をぶちまけて辺りを見渡した。

「……！？」

　室内を覆う煙は晴れていき、その場に居た者はただただ驚くしかなかった。

「…何と…これは現実なのか…？」

　リオンは予想外のことに遭遇して、珍しく緊張が高まっていた。それは彼の前に現れた者が原因であった。

「……危ないところだった、あと数秒遅れていればご臨終だっだよ…」

　リオンの目の前に居るのは、正真正銘、サユミであった。しかし、どうも雰囲気が違っていた。体型は元の彼女と同じだが、それ以外は化け物と変わらなかった。ただ、瞳の色は紅色から蒼色に変わっていて穏やかな眼であった。また、彼女の傍には主力武器である〝一角獣の槍 ユニコーンランス〟が刺さっていた。突然、飛び出してきた物の正体がそれであった。

「…何が起きた？訊きたいことが沢山あって、頭がどうにかなりそうだよ…説明してもらおうか？」

「いいよ、あらかじめ対策を練っておいて正解だった…ぶっつけ本番だったか冷や冷やしたよ…」

「…奥の手というわけか、勿体ぶらないで話せ…」

「はいはい、まず、あんたや嫌味なボスは思い違いをしているわ、私は劇薬の力に翻弄されていない…この一年、そちらの状況も変わっただろうけど、こちらも変わったね…今の私の体内にはいくつも不発弾があるようなもので、対処するには自身を鍛えるしかなかった…少し苦労したけど、制御することに成功したわけよ…」

「そうか、我々を欺くとは大したものだ、前に脱出した時も演技していたわけか？」

「…まあね、あの状況では劇薬の力に頼るしかなかったからね…救出に来た仲間も欺いたことになるかしらね～」

「…さっきと若干姿が違うようだが…」

「さっきの姿は無駄に力を消耗して、体に負担が掛かるから正直しんどくてね…それでアレンジしてみたの…この姿なら楽ちんだからね…ただ、変身するまでかなりの時間が要るから、それが悩みの種でね…」

「…素晴らしい、ルシフェルの力を自分のものにするとは…やはり彼女は天性の才能の持ち主だ…どうにか同士に出来ないものか…」

〝鴉の眼〟はサユミに惚れ込み、目を輝かせていた。

「…その馬鹿でかい槍はどう説明する？」

「ああ、これね…この槍は強力な武器だけど、持ち運びが不便でね…そこで必要な時に使えるよう考案したの…」

「考案？」

「そう、私が窮地に追い込まれたり、心拍数、血圧、血流、内蔵機能など、体に異常が起きた際、危険信号が送られてこの槍が遠方から射出される装置よ…完成が予定より遅れてようやく完成してね…早速、本番で試そうとしたわけ…」

「…成程、その変身と槍が奥の手というわけか…」

「ええ、それではゲームを再開しましょうか…？」

「…そうだな、さっきより楽しめそうだ」

普段、ほとんど無表情のリオンだが、少しだけ朗らかな表情を浮かべた。駆けつけた同期メンバーは固唾を呑んでサユミの闘いを見届けようとした。

「…準備は良いか？」

「…ええ、いつでもどうぞ」

リオンはサユミと再び闘おうとするが、利き腕を差し出して何を始めようとした。彼の手に集中すると、物質が現れて、それは見る見ると鮮明になり、ある物を具現化していった。

「…あれは！」

　リオンが具現化させたのは、サユミが使用している槍と似た形状の物であった。

「これでフェアになった、構わないだろう？」

「ええ、さっさと来なよ」

　リオンは、サユミの予想外の冷たい態度に少々がっかりしていた。

「…！！」

　リオンがまず先手を取り、サユミに向けて槍を突き刺そうとした。

「…ガキン！！」

　その時、リオンの攻撃はいとも簡単にサユミに防がれた。リオンは一旦サユミから離れようとした。

「…確かに以前より能力が向上しているようだな…」

「…つべこべ言ってないで、かかってきな」

　さらなる変異を遂げたサユミは、冷徹さが滲み出ていた。リオンは苦い表情を浮かべて、サユミに挑もうとした。

「…ガキン…ガガキン…キンキンキキン」

　サユミとリオンの槍のぶつかり合う音は鳴り響き、手に汗握る対決が展開されようとしたが、それも長く続きそうになかった。サユミは顔色一つ変えず華麗な槍捌きを披露しているが、リオンの方は動きにキレが無くなっていき、防ぐのがやっとであった。

「リオン…どうしたというのだ？」

　〝鴉の眼〟は不安げな表情を浮かべてリオンを気に掛けていた。

「…はあ、はあはあ…」

リオンは、ついに息が上がってしまい、膝をついて動かなくなった。

「…どうやら勝敗は決まったようね」

サユミは、倒れ込んだリオンに槍を突きつけた。リオンは反撃する素振りを見せず観念したようであった。

「……これほど、実力に差があるとはな…悔しいが勝利を譲ろう…」

「…随分と往生際が良いわね、もう少し続けたかったけど…」

「…さすがに疲れてきた、もう楽になりたい……早く止めを刺せ…」

「え？」

サユミは、リオンの発言で動揺していた。

「…どちらか死ななければ勝敗は決まらない…今がチャンスだ、終わらせろ…」

「…それは出来ないわ、生きたまま罪を償ってもらうわ」

「…まだまだ甘いな、姉さんは…」

「……！！？」

その時、リオンは躊躇するサユミに襲い掛かろうとした。

「…ザバ！」

槍が突き刺さる音が室内に響き、サユミとリオンの勝負の行方が明らかになろうとしていた。

終章　希望の行き先

　サユミと〝鴉の眼〟の因縁の対決は、最終局面に突入していた。サユミは以前、〝鴉の眼〟に無理やり投与された劇薬〝ルシフェル〟の力を制御することに成功して、新種変異体のリオンに実力の差を見せつけた。サユミは敗北を認めたリオンを生け捕りにしようとしたが、不意を突かれて彼女は奇襲を受けた。しかし、それは予想外の結末になろうとしていた。

「……何で？」

　奇襲を受けたサユミは無事のようであるが、何故か顔色が優れなかった。彼女の槍先を辿ると血で赤く染まっていた。リオンはサユミに腹部を深く刺され、致命傷を受けていた。

「……こ…これで良い…私の役目は終わった…君と…闘えて…よか…った…」

「…あなた、わざとやられたわね…？」

「…ああ、そうでもしないと…いつまで経っても……止めを刺さない…だろう…？」

「…私たちは敵であっても無闇に殺さないわ…況して闘う意志がない者に止めを刺すなんてこと……」

「…よく……それで…今まで生きてこられ…たな…強力な…力を身につけても…完全に…非情にはなれ…ないようだ…な」

「…裏の世界だけで生きていれば、あなたのようになっていたかもね…」

　サユミは弱って行くリオンを優しく抱え上げながら話をした。駆けつけた同期メンバーはそっと二人を見守っていた。

「……そうか、君は…二つ…の世界で…生きていたん……だったな……一目舞台に立つ君の姿が……見たか……った…」

「…見れるわよ、あなたはタフそうだから、ちょっと休めば済むことでしょう？」

「……いや…無理だな…私とて…不死身ではない…君との戦闘で……力を消耗して……体内の…さ…細胞が死滅…して…いく…一方…だ…もうおわ…か…れ……」

「…リオン！？」

　サユミは初めて彼の名を呼ぶが、声が届かず、リオンは喋ることが困難となり、やがて、彼の体は風化して存在が消えようとしていた。

「……ボス……先に黄泉の…世界でお待ちしてお…ります……」

　リオンは〝鴉の眼〟に別れの言葉を言い残して、この世から姿を消した。

「…とても…信じられん……最高傑作の彼がやられるなんて…」

　〝鴉の眼〟はリオンの死で絶望感を与えられて立ち直るのに時間が掛かりそうであった。一方、リオンを倒したサユミは、

ばらばらになった仲間と再会して、ひとまず一息ついた。

「…凄い格好やな～そのまま舞台に出れるで～」

「いや～全く～全く～」

　アヤとヒコトは、変異したサユミに興味津々で彼女を観察していた。サユミは、恥かしそうにして、じっと固まっていた。

「…それにしても皆、ちゃんと後輩を救出してくれてありがとう…信じていたわ！」

「…少々手こずったけど、この通り、ぐっすりよ…ただ、気になることが…」

「どうしたの？」

　救出した仲間の異変について、アヤコと代わってクミコが話そうとした。

「…今のところ、彼女たちは昏睡状態だけど、心音が弱くなって、体温が下がっているのよ…洗脳されたことから推測して、奴が関係しているんじゃないかと思って…」

　サユミはクミコの発言に対して、心当たりがあった。

「……奴に妙な薬を投与されたのよ…私に投与したのとは違う物らしいけど…原因はそれね…」

「このままだと彼女たちは死んでしまうわ！何か手を打たないと…！」

「**……**その必要はない」

「……！！？」

　その時、サユミたちが居る場所に〝鴉の眼〟の声が響き、ついに彼女たちの前に姿を現そうとした。

「…愛美！！」

　〝鴉の眼〟は、見張り付きで二階堂を連れてきた。

「もう楽しいゲームを終わりにしよう…あのリオンを倒すとは…さすがだな…」

「…私が倒したわけじゃないわ、彼は最期、人間らしかった…体の半分を失った感じになったわ…血はつながってないけど、確かに姉弟のように思えた…大したものね、科学の力は…」

「そんな感想など望んでいない…これで思い描いていたシナリオを修正しないといけなくなった…」

　〝鴉の眼〟はそう言って、二階堂を解放しようとした。サユミたちは、意外な行いに驚きを露わにした。それは罠ではないようであった。

「…どういうつもり？」

「…そう睨むな、もう彼女に利用価値はない…黙って受け取れ」

　サユミは二階堂と抱擁して、安堵の表情を浮かべた。

「…怪我とかしてない？あいつに酷いことされなかった？」

「大丈夫よ…それにしても凄い姿ね、あの劇薬の力を自分のものにするなんて…」

「いや～そのうち話そうと思ったんだけどね～苦労が報われたよ～…」

　サユミは二階堂と軽く会話をした後、宿敵と目を合わせて決着をつけようとした。

「……ここまで君たちは数々の難関を突破してきたが、まだクリアまで程遠い…」

「…降伏する気はないのね？」

「当然だ…お気づきのようだが、可愛い後輩の命はこちらが預かっている…！」

「…妙な細工のせいね、彼女たちを元の体に戻す方法を教えなさい…！」

「…ここの設備を利用すればいい、たた、タイムリミットはあと一時間もないぞ…太陽が尾を出せば、大事な仲間は天に召されることとなる…」

「…何ですって！？」

「…今の聴いた？彼女たちを救う手立てが判明したわ…」

「ええ、鍵を握るのは、サユミたちが居る場所よ、あの場所には大掛かりな研究設備があったはず…元に戻さないと話が進まないわ…」

　監視室に居るエリカとマイは、〝鴉の眼〟の話を注意深く聴き取り、瀕死状態の仲間を助ける方法を考えていた。

「…！？」

　その時、エリカたちは夥しい邪気を感じ取っていた。監視室の外廊下には〝鴉の眼〟直属の残存部隊が集結しており、彼女たちを包囲していた。

「…絶妙なタイミングね、私たちを見逃す気はないようよ…」

「私はハイテクとかに疎い方だから、捜査はあんたに任せるわ…私は時間稼ぎを…どれくらい掛かる？」

「厳重そうだから結構手間が掛かりそうね…こっちが済んだら、すぐに加勢に行くから…！」

「…了解、物足りなかったから丁度いいわ」

　エリカとマイは、分担して動こうとした。

「…スー…ジャキン！」

　　エリカは躊躇うことなく、敵陣に突撃していった。マイは早急に仲間を救うため、隠された研究施設を起動させようとした。

　〝鴉の眼〟にはまだ秘策があるようで、サユミたちにじっくりと披露しようとしていた。

「…さて、夜明けになる前に決着をつけるわけだが…結果は目に見えている、君たちに勝利はない…断言しよう！」

「とても、そちらが優勢とは思われへんけどね～自慢の兵はかなり減ってもうたで、何としても後輩は助けるしな…降参した方が身のためやで～」

　アヤは腕を組みながら〝鴉の眼〟に噛みついた。

「…覚醒したサユミがいることで、強気でいるようだが、何処まで頼りの綱として、役割を果たせるかな？」

　〝鴉の眼〟はサユミたちの前で不敵な笑みを浮かべて、部下を退却させた。

「何をするつもり？まさか一人で私たちを相手にする気？」

　サユミたちは〝鴉の眼〟の不可解な行動に困惑していた。〝鴉の眼〟に一切の不安や動揺はなく、独りで彼女たちに挑もうとした。

「ここで私に会ったことを後悔するがいい…下等生物ども」

　その時、〝鴉の眼〟に異変が起こり、凄まじい邪気が漂い始めた。サユミたちはそれがひしひしと身に迫り、警戒態勢を取った。彼の体は見る見ると肥大していき、醜い姿へと変異していった。変異した〝鴉の眼〟の全長は、最終的に十五メートル近くとなり、背中に体を覆うほどの大羽が生えて彼の面影はなかった。サユミたちは我が目を疑った。

「…あの化け物がさっきの彼？信じられない…あれが奥の手ってこと？」

「私の変異とはレベルが違いすぎるわ…」

「……まさか！」

　サユミたち同期メンバーがざわめく中、二階堂は何か心当たりがあるようであった。

「愛美、何か知ってるの？」

「ええ、あれは多分、私から盗んだ劇薬の影響よ…自分の体で試すとはね…！」

「…あの完成した劇薬のデータのことね、あれを開発して自分に投与したってこと？」

「そうに違いないわ…正式名は、ルシフェルを超越した神秘の薬〝ラファエル〟、弱点が克服されて、力が向上されるはずだけど…あの状態だと実験は成功したとは言えないわ…あれは〝彼〟じゃない、理性のない化け物よ…」

　　二階堂が言った通り、変異した〝鴉の眼〟は理性を失い、野獣のように雄叫びを上げて暴走していた。

「…ボス！や…め…て…ぐわあ！！」

　〝鴉の眼〟は、部下たちを襲って殺めていき、次にサユミたちを攻撃目標にした。

「…手加減してくれそうにないわね、まさにラスボスの貫録…」

「さっき、私、言い過ぎたのかな？」

　クミコとアヤは冗談をこぼしつつ、変貌した〝鴉の眼〟に攻撃しようとした。

「…！！！？」

　その時、クミコとアヤの攻撃は通用せず、〝鴉の眼〟は片手で彼女たちを弾き飛ばした。

「…アヤ…！クミコ…！！」

　ダメージを受けた二人は、サユミの声が届かないまま気を失っていた。

「私たちも続くぞ」

「…ちょっと待って…！！」

　アヤコとヒコトは、サユミを指示に従わないまま、〝鴉の眼〟に立ち向かった。

「……！！」

　アヤコの鉄拳攻撃は通用せず、ヒコトの突風斬撃でも〝鴉の眼〟はびくともしなかった。二人もまた軽く倒されて惨敗した。

同期メンバーは次々と倒されて気づけばサユミだけとなり、二階堂を必死に守ろうとした。

「絶対前に行かないようにね…今の彼に弱点はある？」

「……悪いけど、ないのに等しいわ…今の彼の肉体は活性化して、悪い意味で充実しているわ…中途半端な攻撃では逆効果…一撃で確実に仕留めるしかないわ…」

「…参考になったわ、ありがとう…」

　サユミは二階堂に礼を言った後、得物の槍を手にして、勇敢に強敵に挑もうとした。

「…ガキン…ガガ…キン…ギン…！！」

　サユミは、覚醒した力でどうにか〝鴉の眼〟に太刀打ち出来ていたが、互角の勝負となって、勝利へ導くための決め手が彼女になかった。

「くそ…時間がないっていうのに…！」

　サユミが焦る中、〝鴉の眼〟は容赦なく、彼女を追い詰めて行った。

「…バササササササ」

「！！？」

　その時、〝鴉の眼〟は無数の羽根を銃弾のように放っていき、サユミの視界を奪って、ついには放たれた羽根は綺麗な球体を作り上げて、彼女をその中に閉じ込めた。

「…しまった…！」

　サユミは完全に閉じ込められて、身動きが取れず、呼吸するのも困難であった。これでサユミの運命は決まったようなものだが、〝鴉の眼〟は何故か、彼女に眼をッ向けなかった。

「…え？」

　その時、二階堂と〝鴉の眼〟の目が合って、恐れていた事態が起ころうとしていた。

〝鴉の眼〟は二階堂を獲物として、狙っており、彼女は冷や汗を掻いて対処手段が見つからずにいた。

「…誰か……助けて！」

　二階堂は、後ずさりしながら神頼みして、〝鴉の眼〟は徐々に前進して、彼女を追い詰めて行った。

「……！」

　〝鴉の眼〟の圧倒的な力でダウンした同期メンバーであったが、サユミだけは辛うじて意識があり、窮屈な闇の世界から脱出しようとしていた。

「…カラン」

　その時、サユミが手放した得物の槍に反応があり、それは勝手に動き始めた。彼女の槍は、自らの意志で遠隔操作する仕掛けが備わっており、〝鴉の眼〟に気づかれないよう、そっと動かして反撃の時を待っていた。

「うわあああああああああああああ……」

　その時、サユミの頭の中に相棒に桜塚や二階堂など、大事な仲間の姿が過り、彼女の気合いで羽根の球体が跡形もなく吹き飛ばされた。

「…うが…！？」

　〝鴉の眼〟は突然のことで驚愕して、サユミに不意を突かれた。

「……ブビシャ！！」

　その時、〝鴉の眼〟の胸部にサユミの槍が勢いよく突き刺さった。〝鴉の眼〟は悲鳴を轟かせて苦痛を訴えた。

「…サユミ！良かった…無事だったのね」

　サユミは〝鴉の眼〟が苦しんでいる隙に二階堂を安全な場所に移動させた。

「…今の彼に致命傷を与える方法は…これしかない…！」

　サユミがそう言うと、〝鴉の眼〟に突き刺さっている槍が蒼白い光に包まれていった。その光はとてつもない高電圧、高熱で落雷に遭ったかのように〝鴉の眼〟は放電を被っていた。彼はあまりの衝撃で倒れ込んでいった。

　サユミの槍は様々な改造が施されており、以前は自ら落雷に槍先を当てて、攻撃していたが、その必要が無くなり、槍を収納している箱が雷と同等のエネルギーを充電する物となった。よって、天候や時間帯など関係なく、いつでも必殺技が使えるようになった。ただ、以前より威力が増して、危険性が伴い、一回しか使えないというデメリットがある。

「……た…倒したの…？」

　二階堂が〝鴉の眼〟の様子を窺う中、彼に変化が起こった。

「これは……！」

　　〝鴉の眼〟は、醜い巨体から元の姿に戻ったのであった。彼は息が上がり、かなり弱っているようであった。

「……ゴゴゴ」

　サユミと〝鴉の眼〟の死闘が一段落したのと同時に、隠されていた研究設備が姿を現した。

「……ザ……ザ…生産工場が復活したから後輩たちを救えるわ…今、そっちに向かっているから待ってて！」

　サユミはマイたちの声を耳にして、表情が和らぎ変身を解いた。そして、同期メンバーも意識を取り戻して、勝利の瞬間を味わおうとした。彼女たちは疲れ切った顔の〝鴉の眼〟を囲んだ。

「どうやら私たちの勝ちのようね…」

「…ああ、完敗だ…首から下が全く動かんよ…究極の体は手に入らなかった…」

「…リスクがありすぎるわ、あなたは元々、普通の人間…さらなる劇物に耐えられる力が備わっていないのよ…」

　〝鴉の眼〟は二階堂の忠告を聞いて、軽く微笑んだ。

「私としたことが…焼が回ったな、リオンに試せば良かったな…今さら言っても後の祭りだが…」

「……哀れね…あんたは私たちに敗けたんじゃない、強欲、傲慢、軽率…自らの愚かさが敗因となったのよ…」

「そうだな、私は少しも成長していないな」

　〝鴉の眼〟の体は徐々に風化していき、彼に死が近づいていた。サユミはそんな彼にずっと優しく語り続けた。

「世界征服ごっこもこれで終わりね、シナリオ通りにはいかなかった…」

「…はっきり言ってどうでもいい計画だ、ただ、君たちに注目されたかっただけだ…」

「成程…私たちの嫉妬を糧にして生きてきたのね…あんたは元々私たちと同類だったわけだから…」

「……」

　サユミは〝鴉の眼〟の本心を推し量った。彼は反論せず、黙って彼女の話を聞いていた。

「あなたの本名は〇〇ノゾミ…幼少から歌や踊ることが好きで歌劇団に興味を持ち、入団を決めた…誰よりも歌劇団への愛情を持っていて、トップを目指そうとした…うちのレイやミナミと同じ学年ね…」

　サユミは、劇薬の実験体リストに記録されていた〝鴉の眼〟改めノゾミの経歴を思い出して口にした。ノゾミからは完全に邪気が消えて、人間らしさが戻ろうとしていた。

「……人間だった頃の記憶等、抹消しようと思っていたけど、久々に自分の名を呼ばれると歌劇団に居た頃が懐かして愛おしく思う…思います…」

「あなたとはこんな形で会いたくなかった…表舞台で共演したかったわ…」

「同感です…でも色々ありましたけど、サユミさんたち歌劇団のスターと接することが出来て良かったです…」

「…お疲れ様、あなたは〝鴉の眼〟という難役を見事に演じ切ったわ…無事に千秋楽を迎えられた…」

「ありがとうございます…私はこれで卒業しますが、あっちの世界で先輩や仲間たちの活躍を見守ることにします……さようなら」

　ノゾミはサユミたちに別れを告げて、姿を消した。彼女が蘇ることはなかった。サユミたちはうっすらと涙を浮かべて、ノゾミを見送った。こうして、〝鴉の眼〟との長きに渡る対決は終止符を打った。

「…もうじき、夜が明けるわ、早く彼女たちをカプセルに入れて…！」

　昏睡状態の歌劇団メンバーは、生産工場の専用カプセルに入れられたことで一命を取りとめた。また、〝鴉の眼〟のアジトを捜索すると、地下シェルターが発見をして、その中にはセイズの幹部や信者が幽閉されていて、その者たちは〝鴉の眼〟が死んだことで洗脳が解けていた。数時間後、サユミたちのもとに救助隊がやって来て、ミチコが操縦するヘリで都内に帰ろうとした。その時、空は晴れていたが、突然小雨が降り出し、それはノゾミの涙のように思えた。

　　それから数日が経ち、サユミは神戸市内の病院に花を持って訪れた。彼女はそこで入院している桜塚の見舞いで来ていた。

「…こうやって顔を合わすのも久しぶりだね、もう何年も会ってなかったみたいだ」

「…お互い、何かとバタバタしていましたからね…とにかく無事で良かったです…仲間の方もご無事なんでしょう？」

「…ああ、僕より早く退院出来そうだ、子去年も確かこんな感じで入院していたな…運が良いんだか、悪いんだか…」

「…もう例の災いに関わることはありません、任務は果たしましたから…」

「…そのことだが、ようやく本格的に例の慈善組織の捜査が行われることとなった…組織の関係者全員を事情聴取しているが、洗脳されていたことから、その時の記憶がないため何も出てこない…ボスが死んでいたことを知らないのにも驚きだ」

「芽野の遺体は発見されたんですか？」

「ああ、組織が所有する畑を掘り起こすと、白骨化した彼が見つかった…殺人として捜査しているが、証拠や手掛かりは一切なく、迷宮入りとなるだろう…真相を知っているのは僕を含めてごく僅かだ…だろ？」

　桜塚は、サユミに軽くウインクして今回の黒幕のことを公にしようとしなかった。

「…あの慈善組織はどうなるんですか？」

「芽野が居ない今、新体制になりつつある、あの忌まわしい研究所は取り壊して、規模を小さくして活動していくそうだ…」

「そうですか、良かった～」

「色々とあったが、また君を頼り切ってしまった…二階堂さんが無事で良かった…彼女に伝えてくれ、役に立たなくて悪かったと…」

「彼女は全然気にしていませんよ、そのうち見舞いに来るんで本人に伝えて下さい」

「…それで例のデータはどうなった？削除したのか？」

「…いいえ、ちゃんと彼女が保管しています、亡くなった恩師の形見なので、良いことに役立てるそうです」

「そうか、それは楽しみだ」

「…ではこれで失礼させてもらいます、本業の方が忙しくて…」

「ああ、そういえば…そろそろ海外公演だな…わざわざ済まなかったね…」

「…いいえ、しばらく会えないので顔を拝見しとこうと思いまして…」

「土産話を期待しているよ…それではお互い無事姿でまた秋頃に会おう…」

　サユミは相棒と別れて、しばし、裏稼業から離れて、本業である舞台の仕事に全神経を集中させた。

　それから時が流れ、二〇一五年八月某日、サユミ率いる歌劇団メンバーは、関西国際空港に居た。チェックインを済ませた。彼女たちは多くの関係者、ファンに見送られ、搭乗口で元気良く挨拶して航空機に乗り込んだ。サユミたちは、公演の無事を祈って公演開催国へと発って行った。

覚醒の槍　明の章　完

覚醒の槍　明の章

http://p.booklog.jp/book/102670

著者 : iwaiwa01663856
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/102670

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/102670

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ